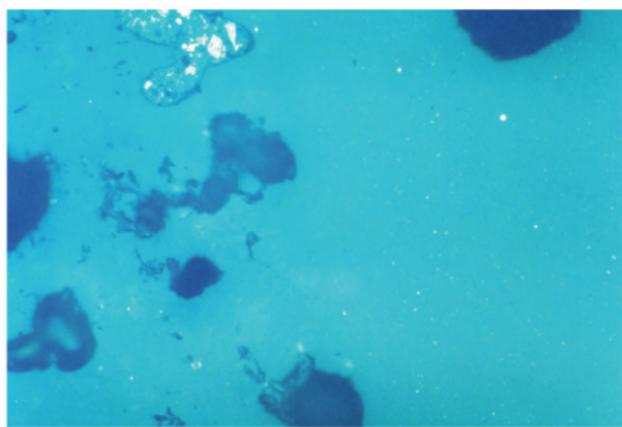
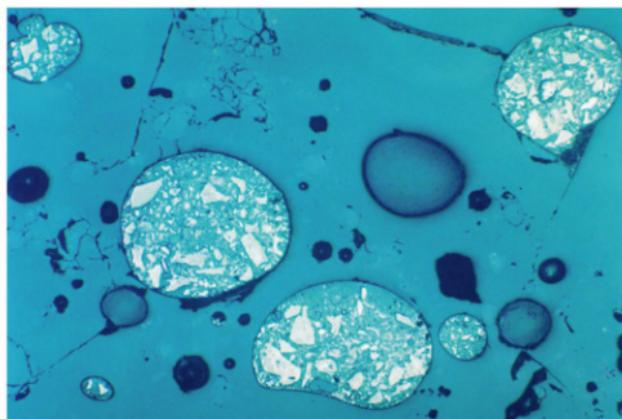


×100

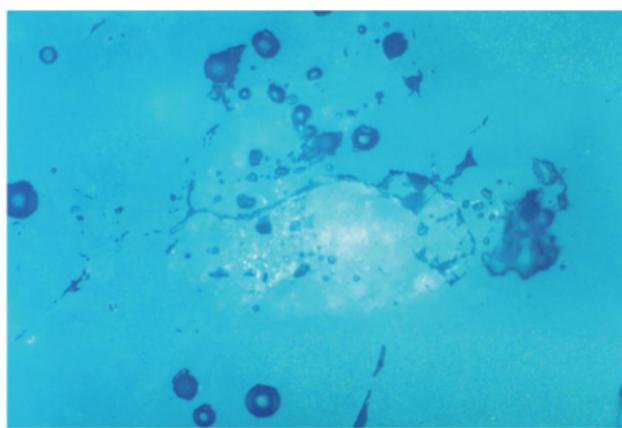


×400

第146図 顕微鏡組織 4-1 (試料No.4)

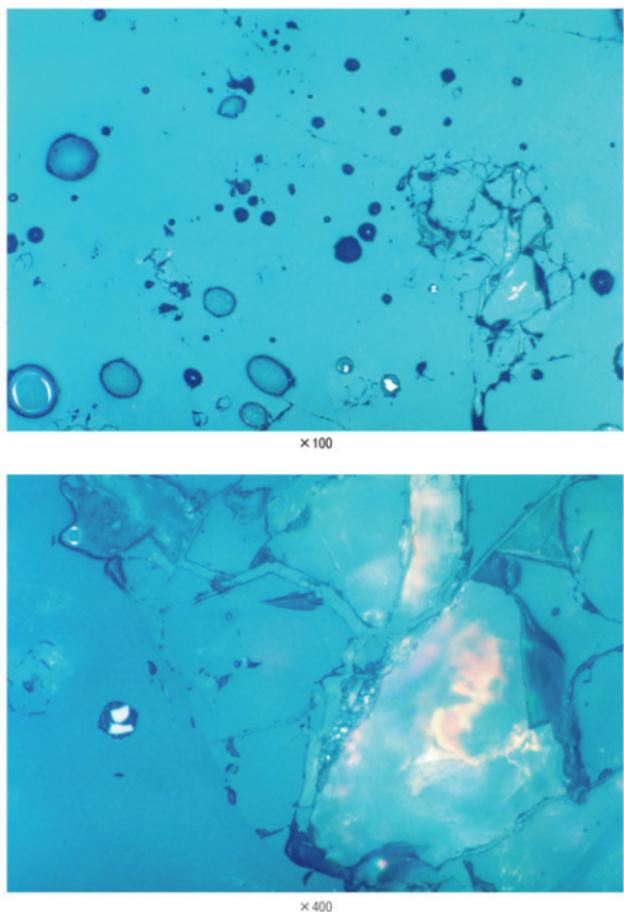


×100

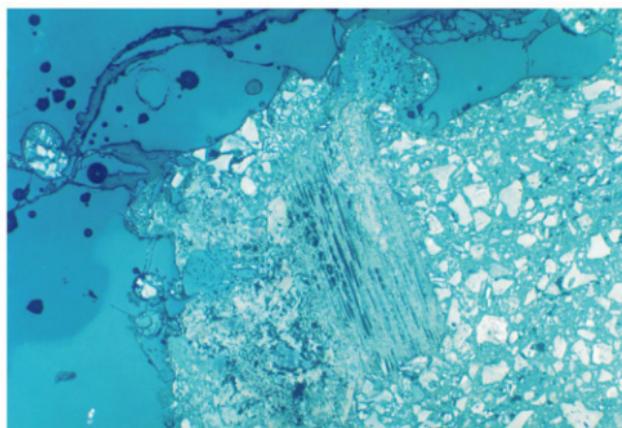


×400

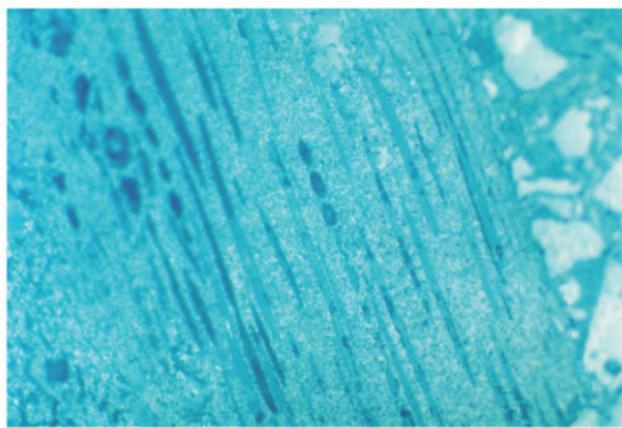
第147図 顕微鏡組織 4-2 (試料No.4)



第148図 顕微鏡組織 5-1 (試料No.5)



×100



×400

第149図 顎微鏡組織 5-2 (試料No. 5)

第2節 樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、旧河道から出土した木製品13点である。このうち、差歛下駄（W9）は、台に前歛・後歛が装着された状態であったため、各部品から試料を採取する。また、網代は、観察した範囲で少なくとも3種類の素材が利用されており、それぞれから試料を採取する。したがって、合計点数は17点である。

2. 分析方法

木製品の木取り等を観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。網代を構成する部品については、小片を採取した上で小片から切片を採取する。切片をガム・クロラール（泡水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を第40表に示す。木製品は、針葉樹3分類群（スギ・ヒノキ・ヒノキ科）、広葉樹4分類群（ブナ属・クリ・ケヤキ・ハリギリ）とイネ科タケ亜科・イネ科に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1~10細胞高。

上記、ヒノキを含むヒノキ科のいずれかであるが、組織の保存状態が悪いために同定できず、ヒノキ科とした。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は單独または放射方向に2~3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の

第40表 樹種同定結果

報告 No	登録No	遺構	層位	種別	部位	木取	樹種	備考		
W 1	2004210-1	旧河道	黒色シルト	漆椀		横木地盤目取	ハリギリ	薄手物(内:黒に朱の模様、外:黒)		
W 2	2004210-9	旧河道	黒灰色シルト	漆椀		横木地盤目取	クリ	内:黒、外:黒		
W 3	2004210-13	旧河道 (北側護岸下)	黒色シルト (最下層)	漆椀		横木地盤目取	ブナ属	内:黒に朱の模様、外:黒		
W 4	2004210-5-6-8	旧河道 (北側護岸下)	黒色シルト (最下層)	漆鉢(大)		横木地盤目取	ケヤキ	内:黒、外:黒		
W 5	2004210-17	旧河道	黒灰色シルト	折敷	底板	板目	スギ			
W 6	2004210-20	旧河道	黒色シルト (最下層)	板		板目	ヒノキ			
W 7	2004210-18	旧河道 (北側護岸)		板		板目	スギ			
W 8	2004210-15	旧河道	中層	連歯下駄 差歛下駄 (露卯)	台	台表が板目 (歯の中央に樹芯)	ヒノキ科	東		
W 9	2004210-14	旧河道	黒色シルト			板目	スギ			
						板目	スギ			
						板目	スギ			
W10	2004210-16	旧河道 (北側護岸下)	黒色シルト (最下層)	木簡		板目	スギ			
W11-1	2004210-21	旧河道		編物	竹(太)	-	イネ科タケ亜科	節の形状からササ類と考えられる。		
W11-2	2004210-21	旧河道		編物	竹(細)	-	イネ科タケ亜科			
W11-3	2004210-21	旧河道		編物	草本	-	イネ科			
W12	2004210-10	旧河道	黒色シルト (最下層)	漆椀		横木地盤目取	ブナ属	東(一括) 内・外:黒に朱の模様		
W13	2004210-12	旧河道	黒灰色シルト	漆椀		横木地盤目取	ケヤキ	薄手物 (内:赤、外:黒に朱の模様)		

分布密度は高い。道管は單穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、

数細胞高のものから複合放射組織まである。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圈部は1列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・ハリギリ (*kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai) ウコギ科ハリギリ属

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状または対列状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-30細胞高。

・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfam. Bambusoideae)

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の

繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成するが、繊維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不齊中心柱をなす。

いわゆるタケ・ササ類である。組織構造から種類を細分することは困難であるが、試料の外観や節の形状から、WIIIは、稈鞘が伸長しても脱落せずに残るササ類と考えられる。WI1は、節部分が削られており、タケ類かササ類かを判別することができない。

・イネ科 (Gramineae)

試料は、小径で保存上難しく、厚密を受けて組織も潰れている。横断面では、2対4個の道管の外側に師部細胞があり、これらを繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は、柔組織中に散在し、不齊中心柱をなす。

タケ亜科とした試料に比べて、維管束鞘を構成する繊維細胞が薄く、小さい。このことから、タケ亜科以外のイネ科と考えられるが、種類は不明である。

4. 考察

木製品は、漆椀を中心に、漆鉢、折敷、板、下駄、木簡、編物がある。漆椀は、いずれも横木地板目取で、内外面とも黒漆塗りとなるもの、外面が黒漆塗りで、内面が黒漆に朱塗りの模様があるもの、内面が朱塗り、外面が黒漆塗りに朱塗りの模様があるもの、内外面とも黒漆塗りに朱塗りの模様があるものがある。このうち2点が薄手物となる。これらの漆椀は、全て落葉広葉樹で、ブナ属、クリ、ケヤキ、ハリギリが認められ、少なくとも4種類の木材が利用されていたことが推定される。薄手物や漆塗りによる使用樹種の違いは認められない。漆鉢は、比較的大型の資料であり、横木地板目取で、内外面とも黒漆塗りとなる。樹種はケヤキであり、漆椀と同じ樹種が利用されている。

クリとケヤキは、比較的重硬で強度・耐朽性が高く、加工はやや困難な部類に入る。ブナ属は重硬であるが、加工は容易であり、保存性は低い。ハリギリは、広葉樹としては軽軟で、加工は容易であるが、保存性は低い。こうした異なる材質の木材が漆椀に利用されていたことが推定される。

兵庫県内の事例では、初田館跡の室町時代とされる漆椀にクリを中心トチノキが混じる組成、福田片岡遺跡の室町時代とされる漆椀にケヤキ、クリ、カツラ、トチノキ、ナラ類が認められた例がある（島地・林、1991；島地、1992）。ブナ属やハリギリの利用例が確認できないが、今回の結果から利用されていたことが推定される。

折敷（底板）は、スギの柾目板を利用されている。板状の木製品は、この他に板材にスギの柾目板ヒノキの柾目板、木簡にスギの板目板が利用されている。スギとヒノキは、いずれも本理が直通で割裂性が高く、楔を利用した分割加工が容易であり、板状加工が容易な樹種が選択・利用されている。折敷底板については、藤田・一ノ谷口遺跡の12世紀後半～14世紀前半とされる資料でスギとヒノキが確認されている（森下、2002）。また、木簡については、玉津田中遺跡の室町時代とされる祝符木簡がスギに同定されている（島地、1996）。今回の結果は、既存の報告例とも調和的である。

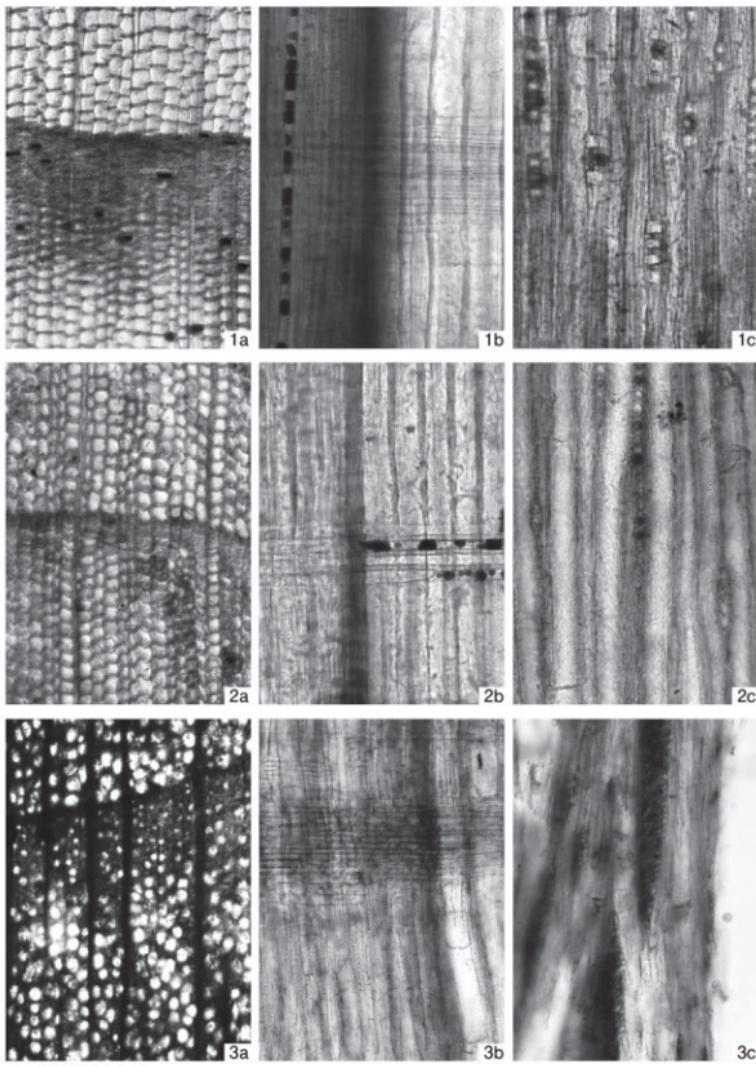
下駄は、台と歯を一本で作る連歎下駄と、台と歯を別材で作る差歎下駄がある。連歎下駄は、台表が板目となり、歯の中央付近に樹芯があることから、ヒノキ科の小径木あるいは、大径木の中心付近を利用したことが推定される。中心付近を利用するのは、辺材よりも強度・耐水性が高いこと等が考えられる。一方、差歎下駄は、台表が板目、前歎・後歎は板目板となる。全てがスギであり、台と歯同じ樹種を利用したことが推定される。下駄については、初田館跡の連歎下駄にクリ、ミズキ、スルデ、福田片岡遺跡の

速歯下駄にツガ、ケヤキ、二葉マツ等の報告例がある（島地・林、1991；島地、1992）。これらの結果をみると、広葉樹の利用が多く、スギやヒノキ科の利用例は見られない。しかし、多くの下駄について樹種同定が行われている草戸千軒町遺跡（広島県福山市）の室町時代前半とされる資料をみると、速歯下駄・差歛下駄共にヒノキ属を中心とした針葉樹の多い結果が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社、2001）。今回の結果から、本地域でも、スギやヒノキなどの針葉樹が下駄に利用されていたことが推定される。

網代は、肉眼観察で少なくとも3種類の部材が確認できる。このうち、竹（太）と竹（細）は、いずれもタケ亜科を割いて板棒状にした部品を使っている。このうち竹（太）は、節の形状等からササ類と考えられる。また、肉眼観察時に草本と考えられた部品はイネ科の稈であり、ササ類とは異なる草本性のイネ科が利用されていると考えられる。耐水性、加工性、編みやすさ等を考慮して素材を変えていることが推定される。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所,
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81~181,
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66~176,
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83~201,
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30~166,
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47~216,
- 森下大輔, 2002, 木製品などの樹種について, 「藤田・一ノ谷遺跡～社町道福住上三草線道路改良事業に先立つ調査～」, 加東都埋蔵文化財報告28, 加東都教育委員会, 31~38.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2001, 草戸千軒町遺跡から出土した下駄の樹種, 「草戸千軒町遺跡出土の下駄2」, 草戸千軒町遺跡調査研究報告5, 広島県立歴史博物館, 15~34.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙, 1992, 初田館跡出土木製品の樹種, 「初田館跡 近畿自動車道舞鶴間関係埋蔵文化財調査報告書 XIV」, 兵庫県文化財調査報告第116冊, 兵庫県教育委員会, 287~305.
- 島地 謙, 1996, 玉津田中遺跡出土木製品の樹種, 「神戸市西区 玉津田中遺跡 - 第6分冊 - (総括編) 田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」, 兵庫県文化財調査報告第135~6冊, 兵庫県教育委員会, 15~49.
- 島地 謙・林 昭三, 1991, 福田片岡出土木製品の樹種, 「福田片岡遺跡 - 太子・竜野バイパス建設に伴う発掘調査報告書 -」, 兵庫県文化財調査報告第94冊, 兵庫県教育委員会, 1~20.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



1.スギ(報告NoW5)

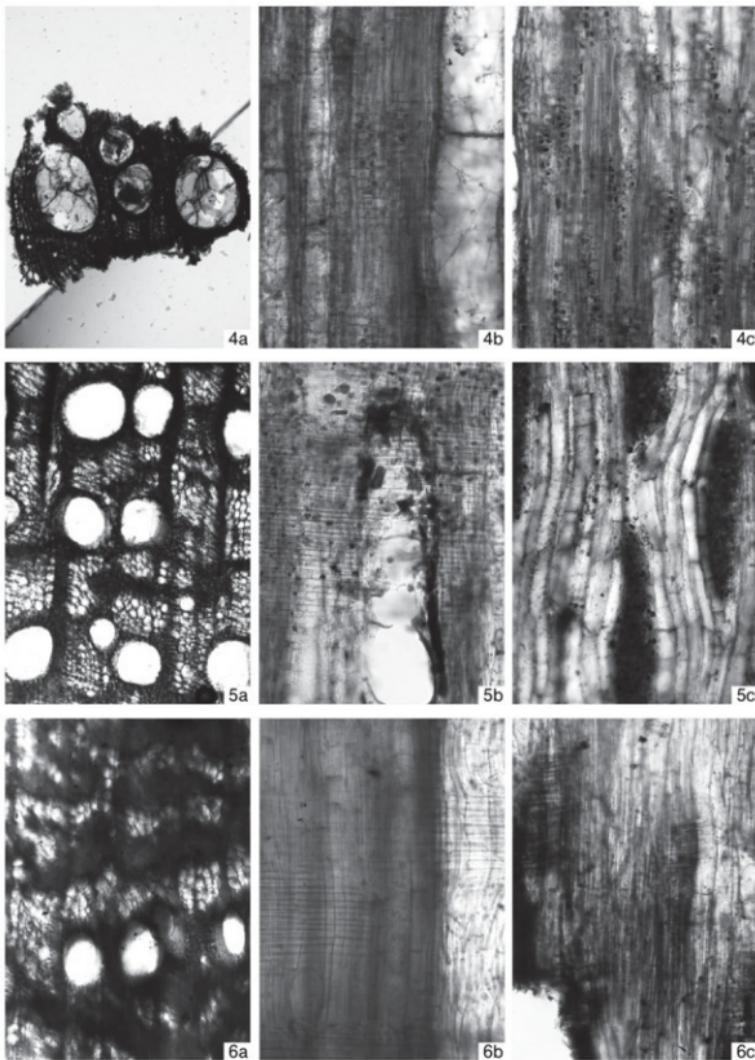
2.ヒノキ(報告NoW6)

3.ブナ属(報告NoW12)

a:木口,b:柾目,c:板目

300 μm :3a
 200 μm :1-2a,3b,c
 100 μm :1-2b,c

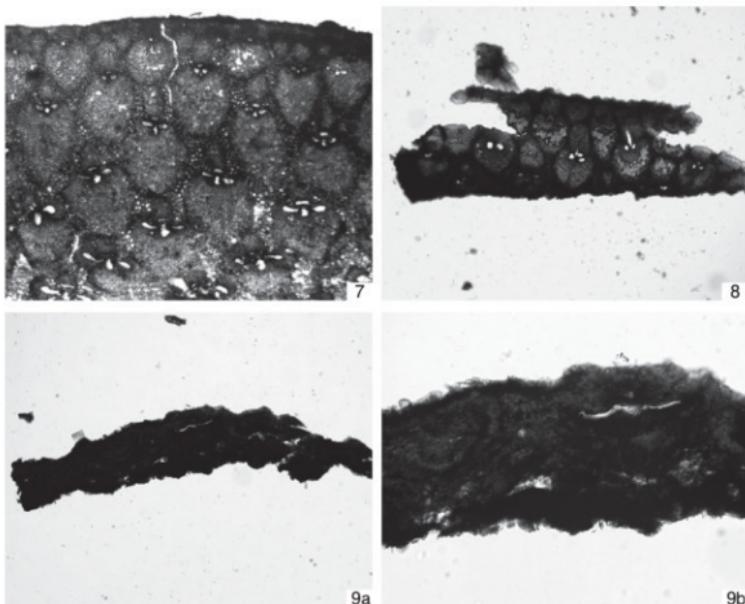
第150図 木材 (1)



4.クリ(報告NoW2)
5.ケヤキ(報告NoW4)
6.ハリギリ(報告NoW1)
a:木口,b:柾目,c:板目

300 μ m:a
200 μ m:b,c

第151図 木材 (2)



7.イネ科タケ亜科(報告No.W11-1) 横断面
8.イネ科タケ亜科(報告No.W11-2) 横断面
9.イネ科(報告No.W11-3) 横断面

— 300 μm :7,8,9a
— 200 μm :9b

第152図 木材 (3)

第3節 微細物分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、旧河道から出土した種実単体試料5点98個と、土壤試料3点である。土壤試料は、同じ層準から採取されているため、便宜上番号（仮No.1～3）を付している。

2. 分析方法

土壤試料中から植物遺体を分離するために、土壤試料約300ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗した。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体をビンセットを用いて抽出した。多量確認されたイネの穎の破片は、粒径1mmの破片までを全て抽出し、粒径0.5mmの破片は基部の果実序柄が残るもの100個まで抽出した。

種実遺体の同定は、現生標本と石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照より実施し、個数を数えて一覧表で示した。実体顕微鏡観察による区別が困難な複数種間は、ハイフンで結んで表示した。なお、木材、炭化材、木の芽、菌核、動物遺存体、昆虫類は一覧表の下部に一括してまとめ、プラスで表示した。分析後は、大型植物遺体を70%程度のエタノール溶液を入れた容器中で保存した。

3. 結果

結果を第41表に示す。全試料を通じて、裸子植物1分類群（針葉樹のアカマツ）の葉12個、被子植物38分類群（木本のヤマモモ、クワ属、ヒサカキ属、キイチゴ属、サンショウ、サンショウウ属、イイギリ、エゴノキ属、草本のイネ、エノコログサ属、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、ギシギシ属、サナエタデ近似種、タデ属、スペリヒユ科、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ科、アブラナ科、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、マメ科、カタバミ属、エノキグサ、スミレ属、トウガン、メロン類、チドメグサ属、キランソウ属、イヌコウジュ属、トウバナ属、ナス近似種、ナス科、ゴマ近似種、タカサプロウ、キク科）の種実1109個が検出されたほか、木材、炭化材、木の芽、菌核、動物遺存体、昆虫類、土器片が確認された。土壤試料で得られた分類群が単体試料で確認された分類群（サンショウ、メロン類、エノキグサ、ナス近似種）を全て網羅している。

大型植物遺体群は、栽培種のイネの穎が最も多く（584個）、一部は炭化、灰化している。イネ穎以外の栽培種は、炭化したイネの胚乳2個、トウガンの種子1個、メロン類の種子106個（うち、モモルディカメロン型3個、マクワ・シロウリ型69個、雑草メロン型8個）、ナス近似種の種子11個、ゴマ近似種の種子1個が確認された。

種の種子1個が確認された。

栽培種を除いた分類群は、木本は、常緑高木のアカマツ、ヤマモモ、落葉高木のクワ属、イイギリ、エゴノキ属、落葉低木のサンショウ（属）、落葉または常緑低木のキイチゴ属、常緑低木のヒサカキ属が確認された。本地域に分布する常緑広葉樹林内に生育する樹種や、森林の林縁部などの比較的明るい林地を好み、伐採地や崩壊地などに先駆的に侵入する樹種から成る。草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が確認され、ホタルイ属やタカサプロウなどの水湿地性植物をわずかに含む。

以下に、各分類群の形態的特徴等を記す。

第41表 種実分析結果

分類群	部位	状態	種実単体試料				土壤試料300g 0.5mm以下水洗		
			II- I 区	II- II 区	II- I 区	II- I 区	登録No.22		
			田河道	田河道	田河道	田河道北側 溝岸下	網代中		
			黒色シルト (最下層)	黒色シルト (最下層)	黒色シルト (最下層)	黒色シルト (最下層)			
木本			アゼ	果(-核)	西			仮No.1	仮No.2
アカマツ	葉	破片					7	5	
ヤマモモ	核	完形					1		
クワ属	核	完形					1	1	
ヒサカキ属	種子	完形					1	1	
		破片							
キイチゴ属	核	完形					2	2	1
		破片					1		
サンショウ	種子	完形				14	1	2	1
		破片						1	
サンショウ属	種子	破片					11	12	11
イイギリ	種子	破片							1
エゴノキ属	種子	破片							1
草本									
イネ	穀	破片(基部)					>165	>125	>120
		破片					46	89	31
		破片						1	1
		破片(基部)					3	1	1
		破片(基部)						1	
		胚乳							1
		完形							
		破片							
エノコログサ属	果実	破片					1		
イネ科	果実	完形					3		
		破片					5	2	1
ホタルイ属	果実	完形							
カヤツリグサ属	果実	完形					5	3	4
カヤツリグサ科	果実	完形					12	8	15
		破片					1	3	1
ギンギシ属	果実	完形					1	1	
		破片							
サナエタデ近似種	果実	完形					1	3	
		破片					1		
タデ属	果実	完形					1		
スペリヒユ科	種子	完形					10	11	5
		破片					2		1
ナデシコ科	種子	完形					13	18	34
		破片					2	2	
アカザ科	種子	完形					9	4	10
		破片						6	
ヒヌ科	種子	完形					13	19	20
		破片					2	3	
アブラナ科	種子	完形					3	3	1
キジムシロ属*	核	完形							1
マメ科	種子	完形							1
カタバミ属	種子	完形					5	7	7
		破片						2	
エノキグサ	種子	完形					1	1	
		破片							
スミレ属	種子	完形					3	2	
		破片					2	1	
トウガシ	種子	完形					2	2	2
		破片					1		
メロン属(モモルディカメリソ属)	種子	完形	1	1	1		1		
メロン属(マクワ・シロウリ属)	種子	完形					59	2	1
		破片					2	1	1
メロン属(雄京メロン属)	種子	完形					8		
メロン属	種子	完形					8	2	9
チドメグサ属	果実	完形						3	2
		破片					1	9	1
キランソウ属	果実	完形						1	1
イヌコウジ属	果実	完形					1	1	
		破片					2	2	3
トウバナ属	果実	完形					1		
ナス科近似種	種子	完形					2	2	2
		破片					2	1	2
ナス科	種子	完形							1
ゴマ科近似種	種子	完形							1
タカラブロウ	果実	完形							1
キク科(ヨメナ属)	果実	完形							1
木本									
武化材							+	+	
かわせ							+	+	
油材							+		
動物遺存体							+	+	
貝壳類							+	+	
上墨片						1	+	+	
							3		

注)*キジムシロ属:キジムシロ属へビイチゴ属-オランダイチゴ属

注)土壤試料にはイネの穂片を多量含むため、粒径1mmの穂片までを全て抽出し、粒径0.5mmの穂片は基部の果実序柄が残るもの100個まで抽出した。

第42表 メロン類種子の計測結果

No.	地区	造橋	層位	備考	モルディカメロン型		マクワ・シロウリ型		雑草メロン型		備考		
					番号	長さ (mm)	幅 (mm)	番号	長さ (mm)	幅 (mm)			
II-1	田河道	黒色シルト (最下層)	東(一括)	I	9.22	4.22	-	-	-	-	厚さ0.06mm		
II-1	田河道	黒色シルト	西	I	8.31+	4.12	-	-	-	-	-		
II-1	田河道	黒色シルト 北側護岸下		-	-	-	1	7.8	3.59	-	半分2個が接着し定形1個		
22			湖代中		1	8.16	3.47	1	6.23	3.16	1	5.3	2.84
					-	-	-	2	6.53	3.17	2	5.69	3.08
					-	-	3	6.56	3.05	3	5.69	3.13	
					-	-	4	6.46	2.94	4	5.64	2.83	
					-	-	5	6.99	3.59	5	5.64	2.92	
					-	-	6	6.23	3.13	6	5.67	3.11	
					-	-	7	6.97	3.02	7	5.47	2.97	
					-	-	8	6.65	3.23	8	5.94	3.14	
					-	-	9	6.43	3.24	-	-	-	
					-	-	10	6.73	3.61	-	-	-	
					-	-	11	6.5	3.61	-	-	-	
					-	-	12	6.44	3.6	-	-	-	
					-	-	13	7.01	3.16	-	-	-	
					-	-	14	7.18	3.15	-	-	-	
					-	-	15	6.65	3.37	-	-	-	
					-	-	16	6.73	3.07	-	-	-	
					-	-	17	7.33	3.26	-	-	-	
					-	-	18	7.15	3.4	-	-	-	
					-	-	19	7.25	3.67	-	-	-	
					-	-	20	7.13	3.59	-	-	-	
					-	-	21	6.65	3.53	-	-	-	
					-	-	22	7.08	3.55	-	-	-	
					-	-	23	6.65	3.48	-	-	-	
					-	-	24	6.39	3.8	-	-	-	
					-	-	25	6.43	3.52	-	-	-	
					-	-	26	6.72	3.79	-	-	-	
					-	-	27	7.55	3.42	-	-	-	
					-	-	28	7.08	3.14	-	-	-	
					-	-	29	7.49	3.3	-	-	-	
					-	-	30	7.28	3.59	-	-	-	
					-	-	31	7.31	3.51	-	-	-	
					-	-	32	7.15	3.39	-	-	-	
					-	-	33	7.55	3.53	-	-	-	
					-	-	34	7.99	3.5	-	-	-	
					-	-	35	7.87	3.43	-	-	-	
					-	-	36	7.33	3.55	-	-	-	
					-	-	37	7.38	3.49	-	-	-	
					-	-	38	7.9	3.27	-	-	-	
					-	-	39	6.91	3.45	-	-	-	
					-	-	40	7.13	3.56	-	-	-	
					-	-	41	7.54	2.89	-	-	-	
					-	-	42	7.16	3.55	-	-	-	
					-	-	43	6.92	3.68	-	-	-	
					-	-	44	7.71	3.39	-	-	-	
					-	-	45	7.65	3.46	-	-	-	
					-	-	46	7.39	3.55	-	-	-	
					-	-	47	7.51	3.86	-	-	-	
					-	-	48	7.58	3.55	-	-	-	
					-	-	49	7.55	3.5	-	-	-	
					-	-	50	7.37	3.82	-	-	-	
					-	-	51	6.15	3.67	-	-	-	
					-	-	52	7.14	3.39	-	-	-	
					-	-	53	7.43	3.44	-	-	-	
					-	-	54	7.39	3.54	-	-	-	
					-	-	55	6.94	3.84	-	-	-	
					-	-	56	7.68	3.65	-	-	-	
					-	-	57	7.68	2.94	-	-	-	
					-	-	58	7.45	3.6	-	-	-	
					-	-	59	7.36	3.65	-	-	-	
	No.1				-	-	1	7.45	3.42	-	-	-	
					-	-	2	7.71	4.56	-	-	-	
					-	-	3	6.37+	3.41	-	-	-	
	No.2				-	-	1	6.87	3.57	-	-	-	
					-	-	2	6.88	3.74	-	-	-	
					-	-	3	6.98	3.55	-	-	-	
	No.3				-	-	4	6.75	2.97*	-	-	-	
					-	-	1	7.82	3.82	-	-	-	
					-	-	2	-	-	-	-	-	
	合計個数 最大 最小 平均 標準偏差				-	-	69	-	8	-	-	-	
					-	-	9.22	7.99	4.56	-	5.94	3.14	
					-	-	8.16	7.47	2.89	-	8.3	2.83	
					-	-	8.690	7.123	3.469	-	5.630	3.003	
					-	-	0.750	0.607	0.267	-	0.185	0.129	

<木本>

- ・アカマツ (*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.) マツ科マツ属

針葉は長さ3.0mm以上、径0.8mm程度の針形。先端部は尖り、基部を欠損する。葉横断面は半円形で、中心部に2つの維管束がある。3~11個程度の樹脂道が下表皮に接する。

- ・ヤマモモ (*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.) ヤマモモ科ヤマモモ属

核(内果皮)は灰褐色、長さ7.0mm、幅6.5mm、厚さ5.0mm程度の歪でやや偏平な広楕円体。内果皮は厚く硬く、表面には微細な網目模様があり。粗面。剛毛が密生する。

- ・クワ属 (*Morus*) クワ科

核は灰褐色、長さ2.0mm、幅1.3mm、厚さ1mm程度の三角状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄い。一辺が鋭利で、基部に爪状突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。本地域に分布するクワ属は、ヤマグワ (*M. australis* Poir.) と栽培種のマグワ (*M. alba* L.) があるが、核の実体顕微鏡下観察による判別は困難である。

- ・ヒサカキ属 (*Eurya*) ツバキ科

種子は灰~黒褐色、径1.3~1.8mm程度のやや偏平な不規則多角状広倒卵体。基部の臍に向かい薄くなる。種皮表面は臍を中心に梢円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。本地域に分布するヒサカキ属は、常緑広葉樹林内の林床に生育する低木~小高木のヒサカキ (*E. japonica* Thunb.)、海岸近くに生育する常緑小高木のハマヒサカキ (*E. emarginata* (Thunb.) Makino) の2種があるが、種子の実体顕微鏡下観察による判別は困難である。

- ・キイチゴ属 (*Rubus*) バラ科

核(内果皮)は灰黄褐色、長さ2.2mm、幅1.5mm程度の偏平な半倒卵体。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

- ・サンショウウ (*Zanthoxylum piperitum* (L.) DC.) ミカン科サンショウウ属

種子は灰黒褐色、長さ3.9mm、幅3.0mm、厚さ2.5mm程度のやや偏平な倒卵体。腹面正中線上基部に斜切形の臍がある。種皮は厚く硬く、表面には浅く細かな網目模様がある。なお、臍の形状が不明の種子破片をサンショウウ属としている。

- ・イイギリ (*Idesia polycarpa* Maxim.) イイギリ科イイギリ属

種子は灰黒褐色、長さ1.2mm以上、径1.5mm程度の広倒卵体。頂部に円形の孔がある。頂部から基部の臍にかけて1本の縱隆条がある。種皮は海綿状で表面には微細な網目模様がある。

- ・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

種子は暗灰褐色、完形ならば長さ1cm、径8mm程度の卵体。頂部から基部にかけて3本程度の縱溝と縱隆条がある。基部は斜切形、灰褐色の着点がある。種皮は硬く断面は柵状、表面には粒状網目模様がある。

<草本>

- ・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎(果)は淡~灰褐色、胚乳と一部の穎は炭化しており黒色、一部の穎は炭化しており灰白色を呈す。穎、胚乳はやや偏平な広楕円体。胚乳は長さ4.9mm、幅2.2mm、厚さ1.3mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の隆条が対列する。胚乳を包む穎(果)は、完形ならば長さ6.5~7.3mm、幅3~4mm、厚さ2mm程度。破片は最大3.5mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の

護穎を有し、その上に外穎（護穎と言ふ場合もある）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稈穎を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縱列する。

・エノコログサ属 (*Setaria*) イネ科

果実は灰黄褐色、長さ2.7mm、径2.2mm程度の半偏球体。背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には横方向に目立つ網目模様が配列する。

・イネ科 (Gramineae)

果実は淡～灰褐色、長さ2.5mm、径0.7mm程度の半狭卵体。背面は丸みがあり腹面はやや平ら。果皮表面には縱長の網目模様が縱列する。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実は灰～黒褐色、長さ2.2mm、径1.7mm程度の片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。背面正中線上は鈍棱。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ属 (*Cyperus*) カヤツリグサ科

果実は灰褐色、長さ1.3mm、径0.6mm程度の三稜状狭倒卵体。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面には微小な疣状突起が密布する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

上記カヤツリグサ科以外の形態上差異のある複数種を一括している。果実は淡～黒褐色、長さ1.5mm、幅0.8mm程度のレンズ状または三稜状倒卵体。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。果皮表面には微細な網目模様がある。

・ギシギシ属 (*Rumex*) タデ科

果実は暗灰褐色、長さ2.1mm、径1.2mm程度の三稜状広卵体。三稜は鋭く明瞭で、両端は急に尖る。果皮表面はやや平滑。果実周囲に残る花被は灰褐色、径5mm程度の心円形で粗い網目模様をなし、縁には歯牙がある。中肋は瘤状に膨れる。

・サナエタデ近似種 (*Polygonum cl. lapathifolium* L.) タデ科タデ属

果実は黒褐色、長さ2.3mm、幅1.7mm程度の偏平な広卵状二面体。両面中央はやや凹む。頂部の2花柱を欠損する。基部は切形、灰褐色の萼から果実と同長かやや長い花被脈が伸び、先が2つに分かれ反り返る。果皮表面は平滑で光沢がある。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実は黒褐色、長さ2.1mm以上、径1.7mm程度のやや偏平な広卵体で基部を欠損する。基部は切形。腹面正中線は鈍稜状。果皮表面には微細な網目模様がある。

・スペリヒュ科 (Portulacaceae)

種子は黒色、径0.8mm程度のやや偏平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。臍には種柄の一部が残る。種皮表面には鈍円錐状突起が臍から同心円状に配列する。

・ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

種子は灰褐色、径0.8～1.2mm程度のやや偏平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く表面には瘤状突起が臍から同心円状に配列する。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子は黒色、径1.3mm程度のやや偏平な円盤状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・ヒユ科 (Amaranthaceae)

種子は黒色、径1.2mm程度の偏平な円盤状。縁は棱状で、基部は凹み臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が配列し、光沢がある。

・アブラナ科 (Cruciferae)

種子は赤褐色、長さ1.2mm、幅0.7mm程度の偏平な楕円形。基部は切形で、両面の同一側には臍点から頂部へ伸びる1個の深い溝がある。種子表面には深い凹みによる微細な網目模様がある。

・キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 (*Potentilla-Duchesnea-Fragaria*) バラ科

核(内果皮)は灰褐色、径0.7mm程度の偏平な腎体。内果皮は厚く硬く、表面は粗面で数個の海綿状隆条が斜上する。

・マメ科 (Leguminosae)

種子は炭化しており黒色。長さ2.3mm、幅1.5mm、厚さ0.5mm程度のやや偏平な楕円体。腹面中央にある楕円形の臍を欠損する。種皮表面は平滑で光沢がある。

・カタバミ属 (*Oxalis*) カタバミ科

種子は黒褐色、長さ1.3-1.5mm、幅1.0mm程度の偏平な倒卵体。基部はやや尖る。種皮は薄く、表面には4-7列の横隆条が配列する。

・エノキグサ (*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子は黒灰褐色、長さ1.8mm、径1.6mm程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y字状の稜がある。種皮は薄く硬く、表面には細粒状凹点が密布する。

・スミレ属 (*Viola*) スミレ科

種子は灰褐色、長さ1.4mm、径1.0mm程度の広倒卵体。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には縦方向に走る1本の縫合線がある。種皮は薄く、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・トウガン (*Benincasa hispida* (Thunb. ex Murray) Cogn.) ウリ科トウガン属

種子は灰褐色、長さ1.1cm、幅0.6cm、厚さ1.5mm程度の偏平な倒卵体。基部は切形で楕円形の臍がある。種子両面の全周の縁には段差があり薄くなる。種皮表面は粗面。

・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が検出された。淡-灰褐色、長さ5.3-9.22mm、幅2.83-4.22mmの偏平な狭倒皮針形。種子の基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。デジタルノギスを用いて種子の大きさを計測した結果、藤下(1984)の基準による中粒のマクワ・シロウリ型(長さ6.1-8.0mm)が96%を占め、小粒の雑草メロン型が0%、大粒のモモディカメロン型(長さ8.1mm以上)が4%であった(表3)。

・チドメグサ属 (*Hydrocotyle*) セリ科

果実は灰褐色、径1.1mm程度のやや偏平な半月形。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面には1本の明瞭な円弧状の稜がある。

・キランソウ属 (*Ajuga*) シソ科

果実は黄灰褐色、長さ1.7mm、径1.2mm程度の楕円体。腹面基部に長さ1.2mm程度の大きな楕円形で表面は粗面、小突起が密生する着点痕がある。果皮表面には深い凹みによる網目模様が分布する。

・イスコウジュ属 (*Mosla*) シソ科

果実は淡一灰褐色、径1.2mm程度の倒卵形。基部には脐点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面には浅く大きく不規則な網目模様がある。

・トウバナ属 (*Clinopodium*) シソ科

果実が検出された。灰褐色、長さ1.1mm、径0.7mm程度の広倒卵形。基部は舌状に突出し、脐点がある。背面は丸みがあり、腹面の正中線は鈍棱をなす。表面は粗面。

・ナス近似種 (*Solanum cf. melongena* L.) ナス科ナス属

種子は灰褐色、長さ3.0mm、幅3.5mm、厚さ0.7mm程度の偏平で歪な腎臓形。基部はやや肥厚し、くびれた部分に脐がある。種皮はやや厚く、表面には微細な星型状網目模様が脐から同心円状に発達する。なお、長さ2.0mm、幅2.5mm程度の野生種に由来すると思われる小型種子をナス科 (Solanaceae) と区別している。

・ゴマ近似種 (*Sesamum cf. indicum* L.) ゴマ科ゴマ属

種子は灰褐色、長さ2.5mm、幅1.5mm程度の偏平な倒卵形で基部が尖る。種皮は薄く、表面は粗面で微細な網目模様がある。

・タカサゴロウ (*Eclipta prostrata* (L.) L.) キク科タカサゴロウ属

果実は灰褐色、長さ2.5mm、径0.8mm程度のやや偏平な三角状倒卵形。両端は切形、果皮は海綿状で、両面には瘤状突起が分布する。両縁に翼があり、水に浮きやすい。

・キク科 (Compositae)

果実は灰褐色、長さ2.5mm、幅1.7mm程度の偏平な倒卵形。頂部は切形で脐がある。両側の縁は薄く翼状。果皮表面には微細な網目模様があり、数個の報喜条が配列する。ヨメナ属 (*Kalimeris*) に似る。

4. 考察

旧河道からは、多量のイネをはじめ、トウガン、メロン類、ナス（近似種）、ゴマ（近似種）などの食用される栽培種の種実が産出した。これらの栽培植物が当時の本遺跡周辺域で利用されていたことが推定される。産出した栽培種のうち、イネの一部は炭化しており、火熱を受けていることが推定される。これら炭化個体を含む出土種実は、旧河道から室町時代前半の土器や瓦、木製品、金属製品、骨・貝類がともに出土していることを考え合わせると、廃棄された食料残渣と考えられる。

メロン類の利用に関して、出土種子の大きさを計測した結果、中粒種子のマクワ・シロウリ型が86%、小粒種子の雑草メロン型が10%、大粒種子のモモルディカメロン型が4%の比率を示した。藤下（1984など）によると、中世以降の出土メロン類種子は、マクワ・シロウリ型が大半を占め、室町時代前半の本遺跡もこれを支持する。よって、当時の本遺跡で利用されたメロン類には、複数の品種の存在が推定されるものの、その主体はマクワ・シロウリ型であったことが示唆される。

栽培種を除いた分類群は、木本は、常緑高木のアカマツ、ヤマモモ、落葉高木のクワ属、イイギリ、エゴノキ属、落葉低木のサンショウ（属）、落葉または常緑低木のキイチゴ属、常緑低木のヒサカキ属が確認された。これらの樹種は、林縁部などの比較的明るい場所に生育しているものが多い。一方、草本は、エノコログサ属、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、ギシギシ属、サンエイタデ近似種、タデ属、スペリヒュ科、ナデシコ科、アザケ科、ヒュ科、アブラナ科、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、マメ科、カタバミ属、エノキグサ、スマレ属、チドメグサ属、キランソウ属、イヌコウジュ属、トウバナ属、ナス科、タカサゴロウ、キク科が確認された。これらは人里植物に属する分類群が

多い。以上のことから、調査区周辺域は、明るく開けた草地が卓越する領域であったことが推定される。なお、少量ではあるが、ホタルイ属やタカサゴロウなどの水湿地性植物が確認されることから、旧河道の集水域にはこれら水湿地性植物が生育する領域が存在したことが推定される。

引用文献

- 藤下典之, 1984. 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法. 古文化財の自然科学的研究. 古文化財編集委員会編, 同朋舎, 638-654.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000. 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.



1. アカマツ 葉(仮 No.3) 2. ヤマモモ 核(仮 No.3) 3. クワ属 核(仮 No.2)
 4. ヒサカキ属 種子(仮 No.3) 5. キイチゴ属 核(仮 No.2) 6. サンショウ属 種子(登録 No.22; 綱代中)
 7. イイギリ 種子(仮 No.3) 8. イネ 頸(仮 No.2) 9. イネ 胚乳(仮 No.3)
 10. エノコログサ属 果実(仮 No.2) 11. イネ科 果実(仮 No.1) 12. ホタルイ属 果実(仮 No.3)
 13. カヤツリグサ属 果実(仮 No.1) 14. カヤツリグサ科 果実(仮 No.3) 15. ギシギシ属 果実(仮 No.2)
 16. サナエタデ近似種 果実(仮 No.2) 17. タデ属 果実(仮 No.1) 18. スベリヒユ科 種子(仮 No.2)
 19. ナデシコ科 種子(仮 No.3) 20. アカサ科 種子(仮 No.3) 21. ヒユ科 種子(仮 No.3)
 22. アブランナ科 種子(仮 No.3) 23. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 核(仮 No.1)
 24. マメ科 種子(仮 No.3) 25. カタバミ属 種子(仮 No.2) 26. エノキグサ 種子(登録 No.22; 綱代中)
 27. スミレ属 種子(仮 No.1) 28. メロン類(マクロ・シロウリ型) 種子(登録 No.22; 綱代中)
 29. メロン類(マクロ・シロウリ型) 種子(登録 No.22; 綱代中)
 30. メロン類(モモロディカメリヨン型) 種子(Ⅱ-1区; 旧河道 黒色シルト(最下層) 東(一括))
 31. トウガラン 種子(仮 No.1) 32. チドメグサ属 果実(仮 No.2) 33. キランゾウ属 果実(仮 No.3)
 34. イヌコウジュ属 果実(仮 No.1) 35. トウバナ属 果実(仮 No.1) 36. ナス近似種 種子(仮 No.1)
 37. ナス科 種子(仮 No.2) 38. ゴマ近似種 種子(仮 No.2) 39. タカサゴロウ 果実(仮 No.1)

第153図 大型植物遺体

第4節 石材鑑定

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、礎の断片1点(42)である。肉眼で暗緑色を呈し、横約4.9cm、縦約5.5cm、高さ約1cmの大きさを有する。

2. 分析方法

肉眼鑑定に際しては、野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、五十嵐(2006)に示される一般的な岩石の分類基準を参考に岩石名を付した。

3. 結果および考察

鑑定の結果、試料は粘板岩と鑑定された。粘板岩は、泥質堆積岩が地下深部で広域変成作用を受けて生じた変成岩で、再結晶作用および平行に割れやすいへき開を有することで特徴付けられる。以下の地質の記述は、20万分の1地質図幅「姫路」(猪木、1981)を参考とした。

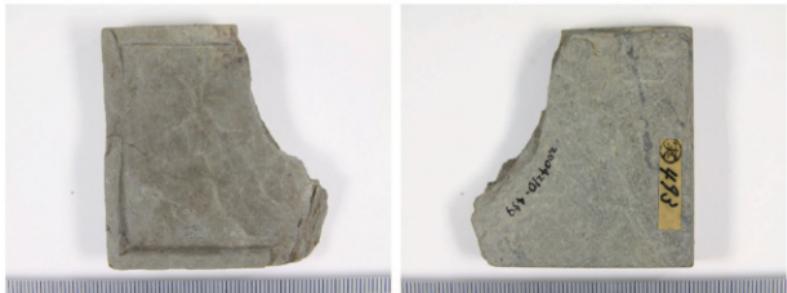
本遺跡周辺域では、上郡町以北の三日月町から上月町にかけて粘板岩が分布することが知られており、試料は在地の粘板岩に由来すると考えられる。ただし、本遺跡は古代に敷設された当時の山陽道と千種川の交差地点にあたることから、試料が遠方の产地より搬入品として持ち込まれた可能性も残される。

国内における粘板岩製の礎の主な产地は、宮城県雄勝地域の玄晶石(雄勝石)、長野県上伊那郡辰野地域の龍溪石、山梨県南巨摩郡早川地域の雨煙石、滋賀県高島地域の高島虎斑石および長崎県対馬の若田石が挙げられる。今後は、本遺跡周辺域や遠方の产地の石材との比較検討が望まれる。

引用文献

五十嵐俊雄、2006、考古資料の岩石学、バリノ・サーヴェイ株式会社、194p.

猪木幸男、1981、20万分の1地質図幅「姫路」、地質調査所。



1. 石材(表)(42)

2. 石材(裏)(42)

第5節 骨・貝類同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、II-1区の旧河道から出土した骨・貝類39試料（No.1~39）である。すでにクリーニングされた状態ではあるが、固結した粗粒砂を含む灰色シルトが骨に付着する場合もある。大半は、1試料中1点の骨が含まれているが、No.1・2・21・22は複数点の破片がみられる。

2. 分析方法

試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。なお、一部の試料については、接着剤を用いて接合を行う。なお、哺乳類の骨格各部位の名称については、ニホンジカを例として第155図に示す。

3. 結果

確認された種類は、腹足綱1種類（アッキガイ科）、硬骨魚綱2種類（スズキ・タイ科？）、鳥綱と思われる骨1種類、哺乳綱（ウマ・イノシシ・ニホンジカ）である（第43表）。同定結果を第44表、種類別部位別結果を第45表に示す。また、ニホンジカの骨格について図1に示す。以下、試料ごとに結果を記す。

<No.1>

アッキガイ科の破片である。おそらくアカニシ (*Rapana venosa*) の可能性がある。焼けている。

第43表 検出動物分類群一覧

軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
新腹足目	Order Neogastropoda
アッキガイ科	Family Muricidae
脊椎動物門	Phylum Vertebrata
硬骨魚綱	Class Osteichthys
スズキ目	Order Perciformes
スズキ科	Family Moronidae
スズキ	<i>Lateolabrax japonicus</i>
タイ科？	Family Sparidae?
マダイ	<i>Pagrus major</i>
鳥綱？	Class Aves?
哺乳綱	Class Mammalia
ウマ目（奇蹄目）	Order Perissodactyla
ウマ科	Family Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i>
ウシ目（偶蹄目）	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>



第155図 ニホンジカの骨格（大谷・大秦司、1994を改変）

第44表 骨貝同定結果

No.	出土地区	出土遺構	層位	出土年月日	備考	種類	部叢	左 右	部分	数量	被熱	備考
1	II - 1	旧河道	黒色シルト	2004/11/10	西	アッキガイ科	殻柱		破片	2	有	
							殻		破片	34+	有	
2	II - 1	旧河道	黒色シルト	2004/11/10	東	アッキガイ科	殻柱		破片	2	有	
							殻		破片	17+	有	
3	II - 1	旧河道 北側堤岸下	黒色シルト (最下層)	2004/11/29		イノシシ	上腕骨	左	両端欠	1		近位端未化骨外れ
4	II - 1	旧河道	黒色シルト	2004/11/13		ニホンジカ	角		枝部	1		切断
5						ニホンジカ	肩甲骨	左	破片	1		
6						ニホンジカ	腕骨+足骨	右	近位端欠	1	切断	他骨Bd28. 1
7						イノシシ	肩甲骨	左	破片	1		
8	II - 1	旧河道	中層	2004/11/1	東	ニホンジカ	上腕骨	左	遠位端	1		
9						ニホンジカ	中手骨	右	遠位端欠	1		Bp25.3
10	II - 1	旧河道	黒色シルト	2004/11/10	東	イノシシ	上腕骨	右	P1'~M1'部	1		M1'~2'立(M1'一部欠損)
11						ニホンジカ	脛骨	右	両端欠	1		遠位端未化骨外れ
12						ニホンジカ	中手骨	左	遠位端欠、 近位端破損	1		
13						ズスキ	上顎蓋骨	左	破片	1		
14						イノシシ	脛骨	右	近位端	1+		化骨変弱
15						ニホンジカ	角	枝部		1		基部切断
16						ニホンジカ	角		角部~枝部	1		枝部の一方切断
17						ニホンジカ	角		分岐部~枝部	1		分岐部・先端部切断
18						ニホンジカ	角		分岐~枝部	1		枝部切断
19	II - 1	旧河道	黒色シルト	2004/11/8	東	魚類	鰓骨		破片	1	右	
20	II - 1	旧河道	黒色シルト	2004/11/15	アゼ	ニホンジカ	下顎骨	右	枝部	1		切断
21						鯨類	頭蓋骨		破片	2+		
22						クマ	上顎歯牙	右	P2	1		臼歯高24±
23						イノシシ	第3中手骨	右	定存	1		
24						獄類	肋骨		破片	1		
25						ニホンジカ	中手骨	左	近位端	1		No. 27と同一骨 GL175.5
26						獄類	頭蓋骨		破片	1		
27						ニホンジカ	中手骨	左	遠位端	1		No. 25と同一骨 Bd25.7
28						獄類	頭蓋骨		破片	1		
29						獄類	頭蓋骨		破片	1		
30						イノシシ	尺骨	右	近位端	1		肘頭の前面・背面切断
31						ニホンジカ	中足骨	左	近位端	1		Bp25.9
32	II - 1	旧河道	黒色シルト	2004/11/9	東(一括)	鳥類?	四肢骨		破片	1		
33	II - 1	旧河道	黒色シルト	2004/11/11	西 (アゼの糞)	獄類	頭蓋骨		破片	1		
34						獄類	不明		破片	1		穿孔? 2有
35	II - 1	旧河道	下層(黒色シルト)	2004/11/6	北西側溝	獄類	不明		破片	1		
36						マダイ	頭蓋骨	右	破片	1		
37						魚類?	不明		破片	1		
38	II - 1	旧河道	黒色シルト (最下層)	2004/11/11	東(一括)	魚類	鰓骨		破片	1	有	
39	II - 1	旧河道	黒色シルト	2004/11/8	西	獄類	不明		破片	1		

注1) P:前臼歯 M:後臼歯

注2) GL:全長 Bp:遠位端幅 Bd:遠位端幅

<No. 2>

アッキガイ科の破片である。おそらくアカニシ (*Rapana venosa*) の可能性がある。焼けている。

<No. 3>

イノシシの左上腕骨である。両端が欠損する。近位端未化骨であり、外れている。

<No. 4>

ニホンジカの角である。長さ約25cm程度の枝部である。一部切断される。

<No. 5>

ニホンジカの左肩甲骨である。背縁側が破損する。

<No. 6>

ニホンジカの右桡尺骨である。近位端側は、切断され、欠損する。遠位端幅28.1mmを計る。

<No. 7>

イノシシの左肩甲骨である。背縁側が破損する。後縁部が割れるが、割れ口が新しく、後代の影響と思われる。

<No. 8>

ニホンジカの左上腕骨である。遠位端部のみ残存する。

<No. 9>

ニホンジカの右中手骨である。遠位端は、打ち割るなどにより欠損する。近位端幅25.3mmを計る。

<No. 10>

イノシシの右上顎骨である。第4前臼歯～第3後臼歯部の破片であり、第1・2後臼歯は植立する。なお、第2後臼歯は、一部割れており、欠損する。

<No. 11>

ニホンジカの右脛骨である。両端が欠損するが、遠位骨端が未化骨状態で外れていることが確認される。

<No. 12>

ニホンジカの左中手骨である。遠位端が打ち割るなどにより欠損し、欠、近位端が割れて破損する。

<No. 13>

スズキの左主鰓蓋骨の破片である。

<No. 14>

イノシシの右脛骨である。近位端の破片である。骨端が骨化しているが、化骨化が弱い。

<No. 15>

ニホンジカの角である。枝部で基部側が切断されている。

<No. 16>

ニホンジカの角である。角座から枝部が残るが、枝部の一部が切断されている。

<No. 17>

ニホンジカの角である。分岐から枝部が残るが、分岐部と先端部が切断され、先端部が丸みをおびる。

<No. 18>

ニホンジカの角である。分岐から枝部が残るが、枝部先端部が切断される。

第45表 種類別部位別数量表

種類	部位	左右	個数	試料番号
アフキガイ科	殻		55 +	No. 1 No. 2
スズキ	主鰓蓋骨	左	1	No. 13
マダイ	前鰓蓋骨	右	1	No. 36
魚類	椎骨		1	No. 19
	鱗鱗		1	No. 38
魚類?	不明		1	No. 37
鳥類?	四肢骨		1	No. 32
ウマ	上顎第2前臼歯	右	1	No. 22
	上顎骨		3 +	
イノシシ	上顎骨	右	1	No. 10
	肩甲骨	左	1	No. 7
	上腕骨	左	1	No. 3
	尺骨	右	1	No. 30
	第3中手骨	右	1	No. 23
	脛骨	右	1 +	No. 14
ニホンジカ	角		5	No. 4 No. 15 No. 16 No. 17 No. 18
	下顎骨	右	1	No. 20
	肩甲骨	左	1	No. 5
	上腕骨	左	1	No. 8
	桡骨+尺骨	右	1	No. 6
	中手骨	左	1	No. 12
		右	3	No. 9 No. 25-27
	脛骨	右	1	No. 11
	中足骨	左	1	No. 31
獣類	頭蓋骨		6 +	No. 21 No. 26 No. 28 No. 29 No. 33
	肋骨		1	No. 24
	不明		3	No. 34 No. 35 No. 39

<No. 19>

魚類の椎骨である。焼けている。

<No. 20>

ニホンジカの右下顎骨である。切断された下顎枝の先端部のみである。

<No. 21>

獣類の頭蓋骨片である。

<No. 22>

ウマの右上顎骨である。第2前臼歯がみられ、臼歯高24mm前後を計る。

<No. 23>

イノシシの右第3中手骨である。完存する。

<No. 24>

獣類の肋骨片である。

<No. 25>

ニホンジカの左中手骨。骨体のはば半分のところから割れており、近位端側である。No. 27とは、接合関係にあり、同一骨である。No. 27と合わせた状態でみると、全長175.5mmを計る。なお、近位端幅は割れているため計測不能。

<No. 26>

獣類の頭蓋骨片である。

<No. 27>

ニホンジカの左中手骨である。骨体のはば半分のところから割れており、遠位端側である。No. 25とは、接合関係にあり、同一骨である。遠位端幅25.7mmを計る。

<No. 28>

獣類の頭蓋骨片である。

<No. 29>

獣類の頭蓋骨片である。

<No. 30>

イノシシの右尺骨である。近位端部のみ残存する。肘頭の前面・背面が切断される。

<No. 31>

ニホンジカの左中足骨である。近位端側のみ残存する。近位端幅25.9mmを計る。

<No. 32>

鳥類の可能性がある四肢骨片である。

<No. 33>

獣類の頭蓋骨片である。

<No. 34>

獣類の部位不明破片である。栄養孔の他に穿孔らしき孔が2箇所認められ、加工品の可能性がある。

<No. 35>

獣類の部位不明破片である。

<No. 36>

マダイの右前鰓蓋骨の破片である。

<No. 37>

魚類と思われる部位不明破片である。

<No. 38>

魚類の鱗片である。焼けている。

<No. 39>

獸類の部位不明破片である。

4. 考察

旧河道から出土した動物遺体は、アッキガイ科、魚類のスズキ・タイ類?、鳥類?、哺乳類のウマ・イノシシ・ニホンジカに同定された。これら骨・貝類は、室町時代の土器・瓦・木製品・金属製品とともに出土することから、当時の間人によって利用・廃棄されたものと推定される。

アッキガイ科、スズキ、マダイは海生の動物であり、瀬戸内海沿岸などで採取・漁獲されたものが遺跡内に持ち込まれていたことが推定される。スズキやマダイの骨は焼けておらず、加熱処理されない状態で流通していたと推定される。一方、アッキガイ科、種類不明の椎骨や鱗片は焼けていることから、調理・食用後の残滓として破棄されたと考えられる。

鳥類?、イノシシ、ニホンジカは、周辺の山野で捕獲されたものと思われる。イノシシおよびニホンジカは、ともに縄文時代から狩猟対象となった種類である。イノシシの出土骨の部位は、左上腕骨近位端、右脛骨近位端、比較的大型な右尺骨からなる。重なる部位は認められないものの、化骨化が終了している骨と終了していない骨が存在することから、若獣と成獣に由来する複数個体が含まれていることが推定される。

ニホンジカの出土部位をみると、右中手骨が重なることから、少なくとも2個体は存在したことが推定される。出土数は、イノシシよりも多く、角、右下顎骨、右橈骨+尺骨など切痕のみられる骨体が多いことが特徴である。化骨化が終了した成獣に由来する四肢骨が多いが、中には右脛骨など骨端が外れた若獣に由来するものもみられる。また、切痕については、右下顎骨および右橈骨+尺骨のものは、解体時に生じた痕跡の可能性がある。角は、道具や装飾品としての加工・利用時に生じたものと痕跡の可能性がある。また、No. 17は先端が丸くなってしまっており、加工途中に廃棄されたものではなく、製品として使用されていたものが廃棄されている可能性がある。この他、種類不明四肢骨のNo. 34は、栄養孔のほかに人为的に施された可能性がある孔がみられ、何らかの用途を持った加工品の可能性がある。

ウマの出土部位は上顎歯牙と上顎骨からなり、頭蓋が存在した可能性がある。上顎歯牙は、右第2前臼歯で、臼歯高は24mm前後であった。西中川ほか(1991)に基づくと、年齢は12歳前後と推定される。遺跡から出土するウマやウシの遺存体については、1) 家畜として飼養していたウマ・ウシを土坑などに埋葬・埋納する、2) 革などの原料として加工・利用した後、残骸を溝や土坑に廃棄する、3) 雨乞いなどの儀礼・祭祀に伴って、ウマ・ウシを殺し遺棄・埋納する、といった行為と関係することが推測されている(佐伯, 1967、松崎, 2000)。今回のウマの頭蓋については、出土状況を踏まえて評価検討することが今後の課題である。

引用文献

- 松崎元樹, 2000. 武藏国多磨郡城を中心とする古代牧関連の遺跡について. 山梨県考古学協会2000年度研究集会 古代の牧と考古学 資料集, 山梨県考古学協会, 52-75.
- 西中川 駿・本田道輝・松元光春, 1991. 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究. 平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書, 99p.
- 佐伯有清, 1967. 牛と古代人の生活. 至文堂.
- 八谷 昇・大泰司紀之, 1994. 骨格標本作製法. 北海道大学図書刊行会, 129p.



- 1.アッキガイ科?殻柱(No.1)
 3.イノシシ左上腕骨(No.3)
 5.ニホンジカ左肩甲骨(No.5)
 7.イノシシ左肩甲骨(No.7)
 9.ニホンジカ右中手骨(No.9)
- 2.アッキガイ科?殻柱(No.2)
 4.ニホンジカ角(No.4)
 6.ニホンジカ右橈骨+尺骨(No.6)
 8.ニホンジカ左上腕骨(No.8)
 10.イノシシ右上顎骨(No.10)

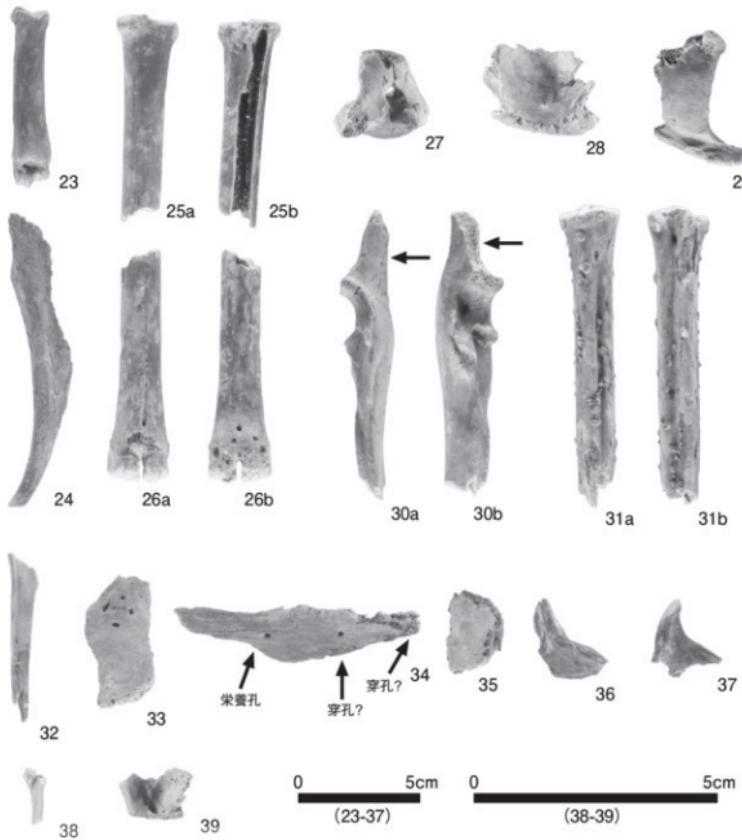
第156図 出土骨 (1)



- 11.ニホンジカ右脛骨(No.11)
 13.ズスキ左主髄蓋骨(No.13)
 15.ニホンジカ角(No.15)
 17.ニホンジカ角(No.17)
 19.魚類椎骨(No.19)
 21.黙類頭蓋骨(No.21)

- 12.ニホンジカ左中手骨(No.12)
 14.イノシシ右脛骨(No.14)
 16.ニホンジカ角(No.16)
 18.ニホンジカ角(No.18)
 20.ニホンジカ右下顎骨(No.20)
 22.ウマ右上顎第2前臼歯(No.22)

第157図 出土骨 (2)



- 23.イノシシ右第3中手骨(No.23)
- 25.ニホンジカ左中手骨(No.25)
- 27.獣類頭蓋骨(No.26)
- 29.獣類頭蓋骨(No.29)
- 31.ニホンジカ左中足骨(No.31)
- 33.獣類頭蓋骨(No.33)
- 35.獣類不明(No.35)
- 37.魚骨?不明(No.37)
- 39.獣類不明(No.39)

- 24.獣類肋骨(No.24)
- 26.ニホンジカ左中手骨(No.27)
- 28.獣類頭蓋骨(No.28)
- 30.イノシシ右尺骨(No.30)
- 32.鳥類?四肢骨(No.32)
- 34.獣類不明(No.34)
- 36.マダイ左前鰓蓋骨(No.36)
- 38.魚類鱗棘(No.38)

第158図 出土骨 (3)

第5章 出土遺物のまとめ

第1節 土器

はじめに 本書で報告する調査では、旧河道を中心に多岐にわたる土器が多量に出土している。出土土器の種別としては、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・焼締め陶器・青磁・輸入陶磁器が出土している。ここでは、これらの土器を種別ごとに分類するとともに、年代観を明らかにし、本道跡の検討の基礎としたい。また、地域的特徴等も明らかにしていきたい。土器の分析にあたっては、編年がほぼ確立されている備前焼鉢を中心検討し、この検討結果をもとに、他の種別について分析を加えていくこととする。

1. 土器の分類

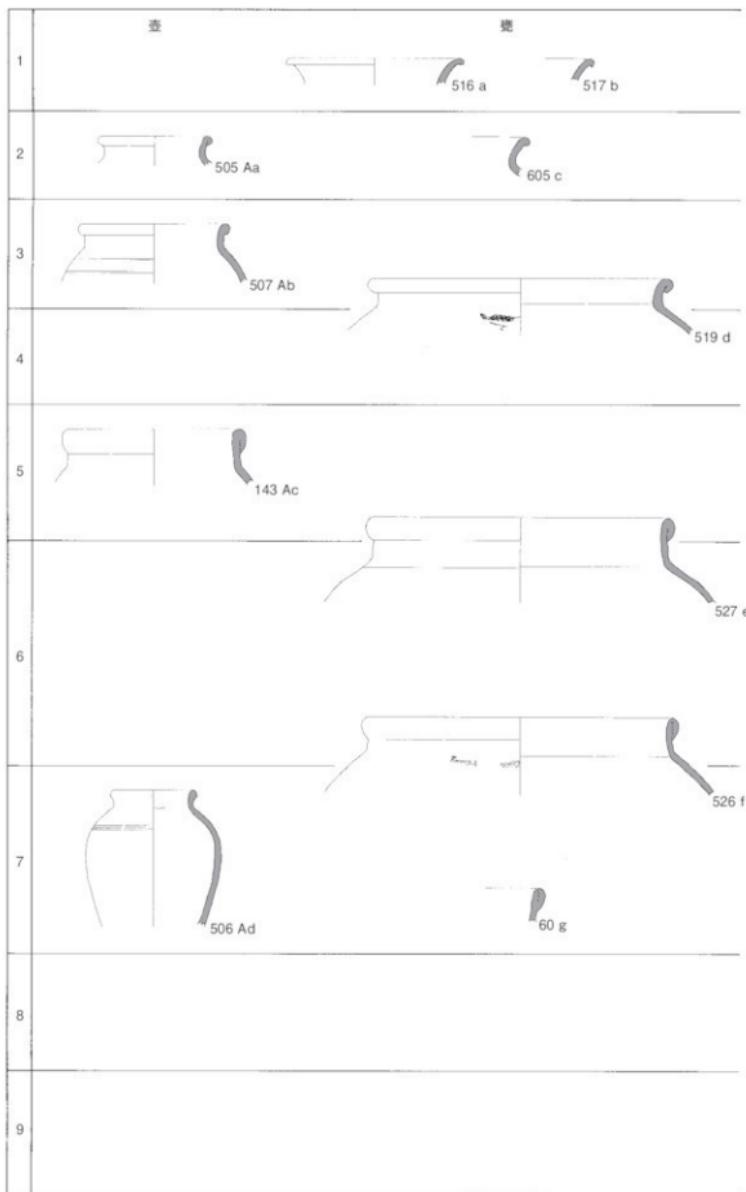
(1) 備前焼

鉢・壺・甕・椀等が出土している。備前焼については、多くの先行研究がある。ここでは、重根弘和の分析¹⁾をもとに、分類を行い、時期的な検討を加えたい。

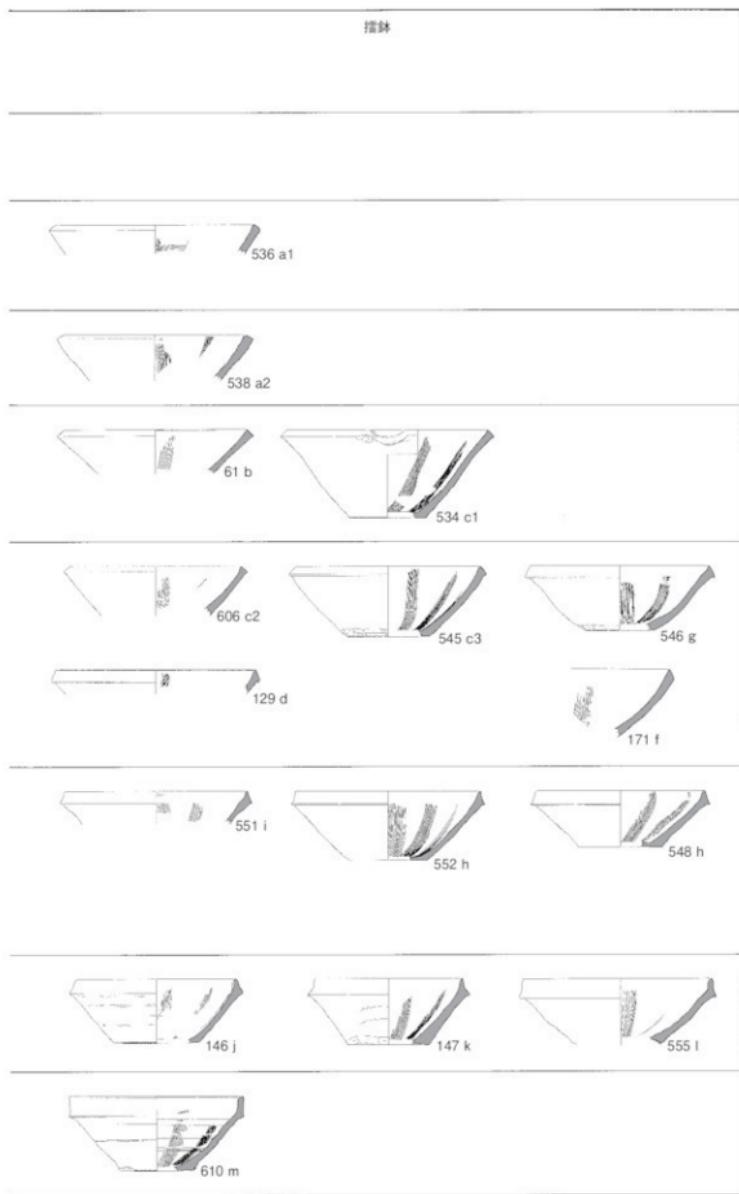
- 鉢 口縁端部形態をもとに分類する。a～mの13タイプに分類できる。
- a 端部断面が方形をなすもの。断面が肥厚気味のもの（a 2 : 538）と、均一なもの（a 1 : 536）に細分できる。
- b 口縁部が直線的で、端部がわずかに肥厚気味なもの（61）。
- c bに対して両端部を強く横ナデし、両端がわずかに突出傾向にあるもの。特に、内端部より外端部が突出する。内面に変化点が認められるもの（c 1 : 534・535・537・539・540）、認められないもの（c 2 : 542・606）、外端部がやや突出するもの（c 3 : 13・544・545・612）、とに細分できる。
- d cに対して外端部が下方へ顯著に突出するもの（57・129）。
- e cに対して両端方向の横ナデが強く、顯著に突出するもの（172）。
- f 外端部の突出は目立たず、内端部の上方への意識が強いもの（45・49・131・171）。内面に変化点は認められない。
- g 横ナデによる外端部および内端部の突出が顯著で、内面に変化点が認められるもの（546・554）。
- h 横ナデによる外端部の突出がfより顯著であるとともに、上方への突出も強くなり、内面に変化点が認められるもの（548・550・552・553）。法量的に、大型の553と小型の548と、差が認められる。



第159図 出土備前焼



第160図 備前焼（壺・甌）



第161図 備前焼（擣鉢）

- i 上方へ顯著に引き延ばされるが、外端部の突出は認められないもの（551）。内面には変化点が顯著に認められる。
- j iよりさらに上方の引き延ばしが顯著なもの（23・55・62・130・146・173）。
- k jと同様に上方に引き延ばされるとともに、外端部も強い横ナデにより突出するもの（147・170・607）。
- l 口縁部が上方に立ち上がり、端部を丸く取めるもの（66・555）。外端部も強い横ナデにより突出する。
- m lより口縁部の立ち上がりが顯著になり、内傾する端面を有するもの（556・608～610）。外端部も強い横ナデにより突出する。
- 以上の分類を、重根弘和の分類基準に当てはめると、a 1がⅢ Aに、a 2がⅢ Bに、c 1がⅣ A-1に、c 2・c 3・d・gがⅣ A-2に、h・iがⅣ B-1に、j・k・lがⅣ B-2に、それぞれ対応するものと考えられる。このほか、bがⅢ B～Ⅳ A-1に、fが、Ⅳ A-2～Ⅳ B-1に位置付けられるものと考えられる。
- 甕 口縁端部形態をもとに分類する。a～gの7タイプに分類できる。
- a 口縁端部を折り返し、薄く仕上げるもの（516）。
- b aより口縁端部を大きく折り返し、薄く仕上げるもの（85・517）。
- c 口縁端部が折り返され、口縁部と一体となり、小規模な玉縁状をなすもの（41・518・605）。
- d 口縁端部が断面円形の玉縁となるもの（519）。
- e 口縁端部が断面楕円形の玉縁となるもの（522・525・527・529～532）。
- f 口縁端部の玉縁が強い横ナデにより、押しつぶされる傾向にあるもの（169・526）。
- g 玉縁の押しつぶされ傾向がより顯著なもの（60）。
- 以上の分類を、重根弘和の分類基準に当てはめると、aとbがⅡ Aに、cがⅡ Bに、dがⅢに、eがⅣ A-1以降に、fがⅣ A-2以降に、gがⅣ B-1に、それぞれ対応するものと考えられる。
- 壺 口縁端部形態をもとに分類する。大きくA～Dの3タイプに分類できる。
- A 口縁部が甕と同様の形態をとるものの、端部の形態により、さらにa～eの5タイプに細分できる。
- a 口縁端部断面円形の玉縁をなすもの（505・524）。
- b 口縁端部玉縁がより発達したものの（507）。
- c 口縁端部玉縁が断面楕円形をなすもの（143）。
- d 口縁端部の玉縁が横ナデにより退化傾向にあるもの（506・510）。
- e 口縁端部の玉縁が横ナデによりほとんどの形態をなさないもの（53・511・523）。
- B 体部に対して口縁部が短く直立するもの（602）。
- C 長く直立する口縁部外面に突帯が付くもの（513）。
- D 口縁部は残存しないが、徳利形のもの（514）。
- 以上の分類のなかで、壺 Aについて重根弘和の分類基準に当てはめると、A aがⅡ Bに、A bがⅢ Aに、それぞれ対応するものと考えられる。また、A cが、甕のⅣ A-1～Ⅳ A-2に、A dがⅣ Bに対応させることができるものと考えられる。

3個体のみの出土であるため、細分は控えたい。ただし、法量的・形態的に細分は可能と考えられる。

備前焼椀については、石井 啓・重根弘和による分析⁽²⁾と比較すると、当遺跡出土の椀は、法量的に最も新しい時期のものと理解することができる。ただし、両氏が設定した最も新しい段階（13世紀後半～14世紀初頭）の資料より法量的には小型であることから、より時期的に下る可能性が考えられる。

さらに、最も新しい段階（IV期後半）に位置付けられている不老山東口古墳前窯址出土資料と比較すると、558は法量的にはほぼ類似するが、同窯址出土資料の方が口縁部を薄く仕上げている。他の2個体については、法量的により小型である。

以上から、両氏の変化傾向を前提とすると、本遺跡出土椀は備前焼椀の中でも最も新しい時期に位置付けることができるのではないかと考えられる。したがって、先に検討した、8段階を中心とした時期位置付けられるものと考えたい。

小 結 以上の検討結果から、1～9の9段階に分けることができる。これをまとめたのが第160図と第161図である。

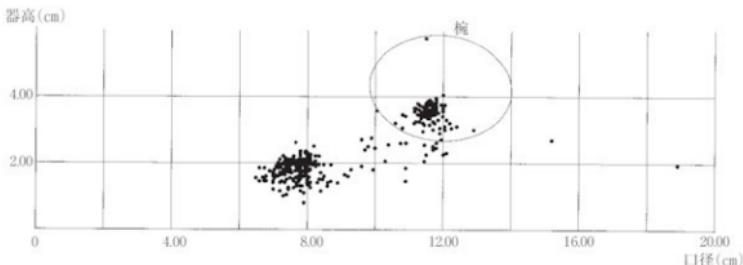
時期 上記の分類を重根弘和の分類に当てはめると、1段階がII A（13世紀末～14世紀初頭）に、2段階がII B（14世紀前半）に、3段階・4段階がIII B（14世紀中頃）に、5段階がIV A-1（14世紀中頃～後半）に、6段階がIV A-2（14世紀後半～15世紀前半）に、7段階がIV B-1（15世紀前半～15世紀中頃）に、8段階がIV B-1～IV B-2（15世紀中頃～後半）に、9段階がV（16世紀初頭）に、それぞれ対応するものと考えられる。

（2）土師器

椀・皿・壺・羽釜・鉢が出土している。

椀と皿について、ここであらためて両者の分類基準を明確にしておきたい。椀と皿の法量分布を表したのが、第162図である。これによると、大きく2つの分布の中心域が認められる。

このなかで、口径10.60cm～13.80cm、器高2.8cm以上の分布域にあるのが、椀として報告してきたものに相当する。椀より口径が大きな皿も存在することから、若干の例外もあるが、器高2.8cm以上のものを、本報告では「椀」として報告していくことにする。逆に、「椀」



第162図 挽と皿の法量分布

第46表 土器器楕数量表

分類		点数			比率	
		実測点数	旧河道出土未実測点数	合計	%	備考
楕A	a	1	76	68	144	97 楕A aに対する比率
		2	1	0	1	
		不明	0	4	4	
		小計	77	72	149	81 楕Aに対する比率
	b	1	14	9	23	67 楕A bに対する比率
		2	2	4	6	17 楕A bに対する比率
		不明	3	2	5	
		小計	19	15	34	18 楕Aに対する比率
	a + b	1	0	1		
		小計	97	87	184	96 楕全体に対する比率
	楕B	2	1	3	1	楕全体に対する比率
	不明	5	0	5		
	合計	104	88	192		

以外のものについては、「皿」として報告していく。

楕 整形技法から、輪轂使用により整形されたもの（楕A）と手づくねにより整形されたもの（楕B）に大きく分類できる（第165図）。

楕A 底部が糸切りにより切り離されているもの（a）と、ヘラにより切り離されているもの（b）に分類できる。さらに、aについては、回転糸切りによるもの（a 1:245他）と静止糸切りによるもの（a 2:265）とに細分できる。またbについては、回転ヘラ切りによるもの（b 1:250他）と、静止ヘラ切りによるもの（b 2:262・263）とに細分できる。さらに、底部を回転糸切り後、回転ヘラ切りにより切り離されるものが認められる（楕A ab : 248）。

楕B 264と594の2個体が出土している。この2個体は法量的には差が認められるが、形態には同タイプと考えられる。

統計 楕についての出土個体数をまとめたのが、第46表である。この表には、実測した個体以外に、旧河道から多量に出土した未実測の個体についても含まれている。未実測の個体については、口縁部から底部にかけて約1/2以上残存するものをカウントした数値である。

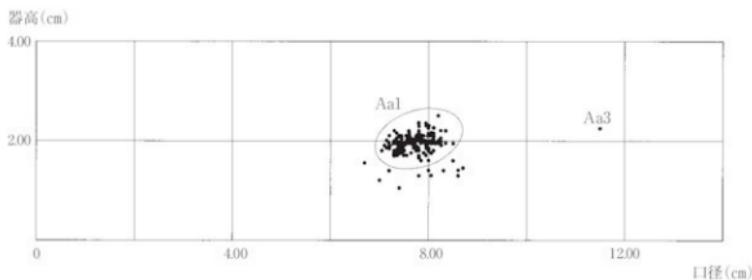
これによると、楕Aの出土量が圧倒的に多く、楕全体の約96%を占めている。楕Bはわずか1%に過ぎない。また、楕Aのなかでもaが圧倒的に多く、楕Aの中で約81%を占めている。さらにa 1が楕A aの約97%を占めている。一方、bは楕Aのなかで約18%を占め、そのなかでもb 1が67%と過半数を占めている。b 2は、楕A bの17%である。

皿 整形技法から、輪轂使用により整形されたもの（皿A）と、手づくねにより整形されたもの（皿B）、に大きく分類できる（第165図）。

皿A 底部が回転糸切りにより切り離されているもの（a）と、ヘラにより切り離されているもの（b）、ヘラ削りにより仕上げられているもの（c）、に分類できる。また、両者が併用されているものも出土している（a・b:428）。さらには、形態の特徴から、皿a・皿bともに細分できる。

皿A a 大きく4タイプに細分できる（第163図）。

a 1：体部から口縁部が内湾し、外面の体部と底部の境が明瞭なもの（378他）。法量から、



第163図 土器皿Aaの法量分布

口径の小さいタイプ (422)、器高の高いタイプ (292)、などが認められる。

a 2：体部から口縁部は a 1 同様内湾するが、外面の体部と底部の境が不明瞭なもの (83・125)。

a 3：底部に対して体部が明確に屈曲し、口縁部にかけて直線的にのびるもの。器高・口径ともに、皿Aa のなかでは大型である (108)。

a 4：基本的には a 3 と類似するが、口縁部の立ち上がりがわずかなもの (72・110・269)。

皿Ab 形態・法量にかなりのバリエーションが認められる (第164図)。ヘラ切りに関しては、回転ヘラ切りによるものと、回転を利用しないヘラ切りが認められる。

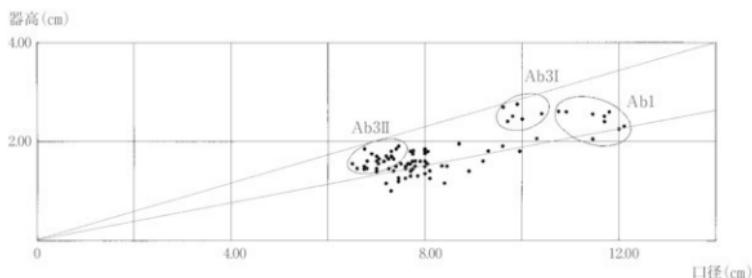
b 1：底部に対して体部が明確に屈曲し、口縁部まで直線的にたちあがるもの (51・63・75・93・117・155・156・595)。口縁部はわずかに内湾傾向にある。最も大型の皿である。

b 2：b 1 に対して底径が小さいもの (133)。

b 3：口縁部形態は b 2 と類似するが、体部に対して底部が厚く仕上げられているもの。口縁部が体部より薄く仕上げられている。法量的に、大型のもの (I : 46・80・134・135) と、小型のもの (II : 26・28・34・137・140・152) に分類できる。

b 4：底部から体部にかけての屈曲が不明瞭なもの (56)。口縁部は直線的。

b 5：b 4 に対して口縁部が内湾傾向にあり、全体的に薄く仕上げられているもの (149)。特に、口縁部が薄く仕上げられている。



第164図 皿Abの法量分布

椀	A	 245  265  250  263  248 al
	B	 264  594
皿	a	 378 1  125 2  108 3  269 4
	b	 595 1  133 2  80 3 I  26 3 II  56 4  149 5  47 6  442 7  428 8  159 9  103 10  431 11  454 12  6 13 I  114 13 II  99 14  453 15  429 16
	c	 267
	B	 37 a  104 b  120 c

第165図 土器類 椆・皿の分類

b 6 : 底部に対して口縁部が斜方向に短く直線的にたちあがるもの (47・65・157・449)。

底部から体部にかけては、明確に屈曲する。口径に対して器高が低い傾向にある。

径口指数19~23。

b 7 : b 6 に対して、より小型の皿 (154・442)。底部から体部にかけての屈曲がやや不明瞭。

b 8 : 不安定な底部に対して、口縁部を短く立ち上げさせるもの (428・432・433・598)。

強いナデ調整により、口縁部は薄く仕上げられている。

b 9 : 形態的に b 6 と類似するが、内面の底部と体部の境が不明瞭なタイプ (159)。

b 10 : b 6 に対して、口径がより大きなタイプ (50・103・116・441)。径口指数10~20。

b 11 : 不安定な底部に対して、口縁部が短く上方にたちあがるもの (431・437・438)。

b 12 : やや不安定な底部に対して、口縁部が外反気味にたちあがるもの (454)。口径に対して器高が比較的高く (径口指数25)、底部に対して、口縁部が薄く仕上げられている。

b 13 : 安定した底部に対して、口縁部が斜外方に短くたちあがるもの。法量的に、大型のもの (I : 6) と、小型のもの (II : 21・114) が認められる。

b 14 : 形態的には b 1 と同じであるが、底部が回転を利用しないヘラ切りによるもの (99)。

b 15 : 形態的には b 7 と同じであるが、底部が回転を利用しないヘラ切りによるもの (452・453・455)。

b 16 : 形態的には b 11 と同じであるが、底部が回転を利用しないヘラ切りによるもの (43・429)。

皿 A c 267の1個体である。底部の切り離しは不明であるが、静止ヘラ削りにより仕上げられている。法量的にも、全ての土器皿のなかで最も大型である。

皿 B 手づくね整形によるもの。3タイプに細分できる。

a : 口縁部が直線的にたち上り、比較的深いタイプ (37)。

b : 口縁部がわずかにたち上り、端部を丸く収めるタイプ (104)。

c : b と同形態で、端部をわずかにつまみあげ、端面を有するタイプ (120・456)。

統計 皿について、各タイプの出土

第47表 土器皿数量表

比率についてまとめておきたい

(第47表)。資料数のカウント

方法については、概と同様である。

皿 A と皿 B とでは、皿 A の出土量が圧倒的に多い。皿 B は全

分類	点 数		
	実測点数	旧河道出土 未実測点数	合 計
皿 A	a 173	140	313
	b 83	3	86
	小 計 256	143	399
皿 B	4	0	4
合 計			802

体の1%にも満たない。さらに、皿 Aにおいては、皿 A a が多く、皿 A の中では78%を占めている。

堀 鉄かぶと形堀 (堀 A) と、壺形堀 (堀 B) が出土している。堀 A・堀 B ともに出土量は少ない。堀 A と堀 B とでは、堀 A が圧倒的に多く出土している。

堀 A 口縁部の特徴から、4タイプに細分できる。

a : 口縁部内面が強い横ナデ調整により肥厚するもの (112・462・599)。

b : 口縁端部外面を中心に肥厚するもの (145・459・160・461・458)。

c : 口縁端部は肥厚せず、口縁端部を丸く収めるもの (460)。

d : 口縁部外面を中心に肥厚させるもの (457)。

堀 B 463が典型的なものである。他は、口縁部の小片のみが出土している。

羽釜 465の1点が出土している。

鉢 466の1点が出土している。

(3) 須恵器

古墳時代・奈良時代を除いては、7点出土している。いずれも捏鉢である。大野遺跡⁽⁴⁾では、捏鉢 C e・捏鉢 D・捏鉢 E f・捏鉢 E d に分類されているものである。いずれも14世紀前半から中葉に位置付けられている。

このなかで、161は8段階とされた S D02において出土している。

(4) 瓦器

570の椀1個体が出土している。形態的特徴から、いわゆる和泉型としては理解できないものである。このため、時期についても明らかにすることはできない。

(5) 瓦質土器

壠・鉢・擂鉢・蓋・壺・火鉢・風炉が出土している（第166図）。

壠
壠が出土している。口縁部を中心とした形態的特徴から、壠A～壠Cの3タイプに分類できる。

壠A 口縁部が受口状をなすものである。4個体（86・472～474）出土している。

壠B いわゆる羽釜形タイプの壠である。体部から口縁部にかけて大きく内湾する。鈎を付けた位置で、大きく2タイプ（a・b）が認められる。

B a 鈎が口縁端部付近に貼り付けられ、口縁端部から鈎にかけてが一体となるもの。さらに、口縁端部を丸く収めるもの（a 1 : 479・487・492・494）と、端面を造り断面が方形をなすもの（a 2 : 67・489・490・493・495）に分類できる。

B b 鈎が口縁端部よりやや下側に貼り付けられるもの。B a同様、口縁端部を丸く収めるものの（b 1 : 14・109・163・483・484）と、端面を造り断面が方形をなすもの（b 2 : 162・480・485）に分類できる。

B c B a同様、鈎が口縁端部付近に貼り付けられるが、口縁部と鈎の境が明確なもの。B aとB bの中間的な形態。口縁端部を丸く収めるタイプ（c 1 : 92）と、端面を造り断面が方形をなすもの（c 2 : 101）に分類できる。

壠C 体部が鉢形をなすものである。4個体（476～478・486）出土している。鈎の貼り付けは壠B aと同じで、口縁端部から鈎上面にかけて一体となっている。

鉢 口縁部を中心とした形態的特徴から、鉢A～鉢Cの3タイプに分類できる。

鉢A 体部から口縁部にかけて直線的なもの。475の1個体が出土している。

鉢B 口縁部が内湾傾向にあるもの。497の1個体が出土している。

鉢C 口縁部が体部対してわずかに内側に屈曲するもの。100と164の2個体が出土している。

擂鉢 7の1個体が出土している。

蓋 165の1個体が出土している。

壺 496の1個体が出土している。

火鉢 498～501の4個体が出土している。形態的特徴から、A～Cの3タイプに分類できる。底部片（500）については、分類できない。

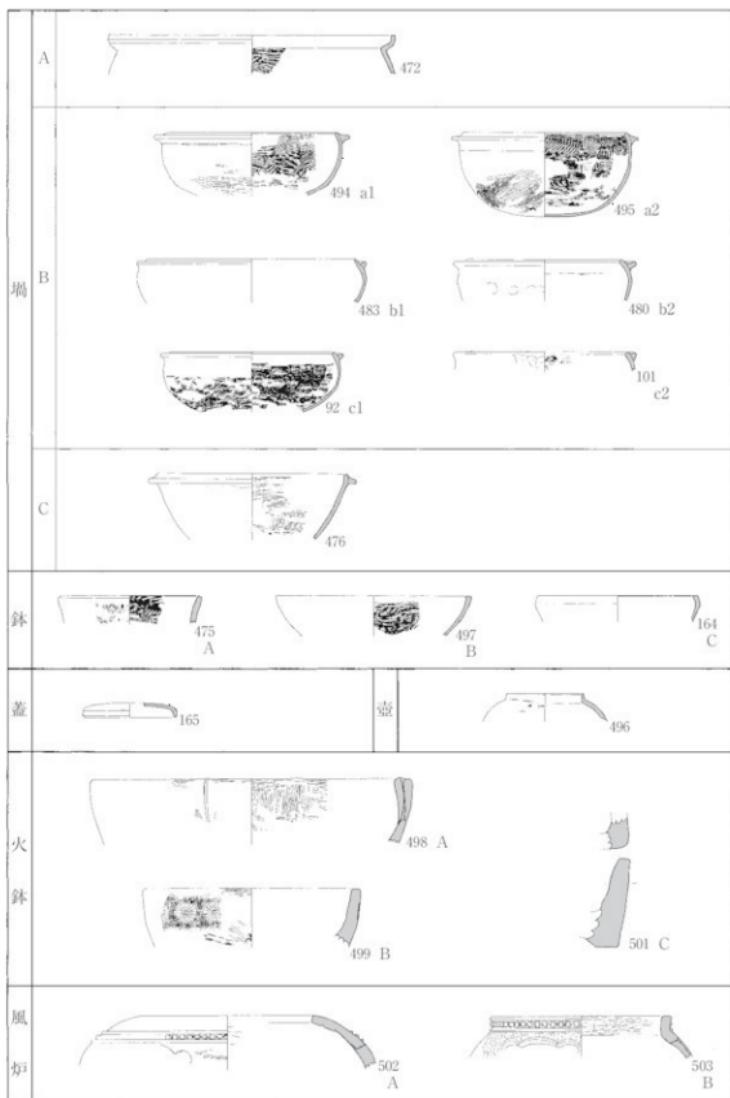
火鉢A いわゆる円形浅鉢に分類されるもので、口縁部が輪花状をなすものである。498の1個体が出土している。

火鉢B いわゆる円形浅鉢に分類されるものである。499の1個体が出土している。

火鉢C いわゆる方形浅鉢に分類されるものである。501の1個体が出土している。

風炉 形態的特徴から、A・Bの2タイプに分類できる。底部片（504）については、分類できない。

風炉A 体部から口縁部にかけて大きく内湾し、ドーム形をなすもの。502の1個体が出土して



第166図 瓦質土器の分類

いる。

風炉B 内湾する体部に対して口縁部が短く直立するもの。503の1個体が出土している。

(6) 備前焼以外の国内産陶器

常滑焼・瀬戸美濃焼・唐津焼・志野焼・他が出土している。

常滑焼 119の1個体が出土している。

瀬戸美濃焼 碗・壺・盤が出土している。

碗 52と562の2個体が出土している。562は、山茶碗で、15世紀前半に位置付けられる。

壺 118・563・564の3個体が出土している。118は、四耳壺の肩部で、13世紀中頃～中葉に位置付けられる。563は、白磁を模した灰釉で、13世紀中葉に位置付けられる。

盤 36の1個体が出土している。その特徴から15世紀前半に位置付けられる。

唐津焼 127・128・568の3個体が出土している。内面に、砂目・胎土目が認められることから、127と128は17世紀前葉に位置付けられる。568についても、ほぼ同様の時期に位置付けられる。

志野焼 566の1個体が出土している。その特徴から、17世紀前葉に位置付けられる。

他 その種別等を明らかにできなかった製品である。571が該当する。

(7) 输入陶磁器

陶器・白磁・青磁・青花が出土している。

陶器 灰釉陶器（572）と鉄釉陶器（613）が出土している（第167図）。

572は、中国福建省磁灶窯もしくは童子山窯産と考えられ、12世紀から13世紀に位置付けられるものである。⁽³⁾ 613は、外耳壺の耳部と考えられ、その特徴から14世紀以降と考えられる。

白磁 盆・碗・杯が出土している（第167図）。

皿 大きく2タイプ（Aタイプ・Bタイプ）に分類できる。

A：口縁部内端面の釉を剥ぎ取る、いわゆる口禿タイプの皿である。38・573・576・591の4個体が該当する。山本分類の皿XIに該当するもので、13世紀後半～14世紀前半に位置付けられている。

B：614の1個体である。

碗 2タイプが出土している。623は、森田分類⁽⁴⁾のD群にあたるもので、14世紀代に位置付けられている。575は小碗に分類されるものである。

杯 95と167の2個体である。福建省四都窯産と考えられるもので、15世紀前半～中葉に位置付けられている。⁽⁵⁾

青磁 碗・皿・盤・瓶が出土している（第167図）。完存するものがないため、口縁部から体部を中心に分類する。

碗 大きく5タイプ（Aタイプ～Eタイプ）に分類できる。

A：内外面とも無文のもの。口縁部が外反するもの（577・593）、直口するもの（40）など、バリエーションが認められる。いずれも、上田分類⁽⁶⁾のD IIもしくはEタイプと考えられ、14世紀後半～15世紀前半に位置付けられている。

B：外面に蓮弁が認められるタイプである。大きく、鎬蓮弁をもつもの（a : 445・555・581・582）と、細線蓮弁をもつもの（b : 584）に分類することができる。aについては、上田分類のB IIに、bについては上田分類のB IVに該当するものである。前者は14世紀後半～15世紀前半に、後者は16世紀代に位置付けられている。

C：外面に雷文が認められるもの（585・619）。上田分類のC II aに分類されるもので、14世紀後半～15世紀中葉に位置付けられている。

D：内面に草花文が認められるもの（586）。山本分類⁽¹⁾のI - 2 aに分類されるもので、12中頃～後半に位置付けられている。

E：外面に弱い沈線状のヘラ彫が認められるもの（39・618）。山本分類のIII - 1 Bに分類されるもので、13世紀中葉～14世紀初頭に位置付けられている。

底部：高台断面が方形に近いもの（A : 16・625・626）、高台を削り出すもの（B : 587）、が認められる。Aは13世紀～14世紀に、Bは14世紀～15世紀に位置付けられる。

■ 大きく4タイプ（Aタイプ～Dタイプ）に分類できる。

白	碗	 623	 575	杯	 167
磁	皿	 591 A	 614 B		
	碗	 577 A	 40 A	 581 Ba	 584 Bb
青	碗	 585 C	 586 D	 39 E	 587 底 B
磁	皿	 583 A	 616 B	 126 C	 624 D
	盤	 142		瓶	 615
青	花		 592		
陶	器	 572		 613	

第167図 輸入陶磁器の分類

- A：内外面とも型押しによる蓮弁文が認められるもの（583）。刑窓産と考えられ、14世紀代に位置付けられるものである。⁽¹⁰⁾
- B：いわゆる穂花皿である。616の1個体が出土している。類例として宮内遺跡（兵庫県豊岡市）で出土しており、16世紀代に位置付けられている。⁽¹¹⁾
- C：白磁皿を模倣したものである。126の1個体が出土している。13世紀以降に位置付けられるものと考えられる。
- D：624の1個体である。底部から体部にかけての残存で口縁部形態は不明であるが、その形態から皿と判断したのである。14世紀前半に位置付けられるものと考えられる。⁽¹²⁾
- 盤 142と617の2個体で、いずれも同タイプに分類されるものである。14世紀代に位置付けられるものである。
- 瓶 615の1個体である。14世紀前半以降に位置付けられるものである。⁽¹³⁾
- 青 花 592の皿1個体が出土している。16世紀以降と考えられる。

2. 共伴関係の検討

備前焼 ここでは、備前焼型式間の共伴関係について、見ておきたい。P08・SK06・SD02を対象とする。

P08 8段階の擂鉢jと壺gが共伴している。当該資料については、重根広和の分類と一致するものである。

SK06 8段階の擂鉢jと5段階～7段階の壺A cが共伴している。SK06については、一括して廃棄されたものと考えられることから、壺A cに関しては8段階まで共伴しうるものと理解したい。

SD02 8段階の擂鉢f・擂鉢j・擂鉢kと7段階以降の壺hが共伴している。当該資料については、重根広和の分類と一致するものである。

土師器 先に検討した備前焼との共伴関係をもとに、おもな型式についての時期を検討する。さらに、土師器相互の共伴関係について検討する。

椀 備前焼との良好な共伴資料を欠く。

皿 8段階とされたSK06において、皿A b 2・皿A b 3が出土している。さらに、8段階とされたSD02において、皿A b 1・皿A b 6・皿A b 9が出土している。この他、SB 24-P 8において、8段階の擂鉢fと皿A b 3・皿A b 6が共伴している。

次に皿相互の共伴関係をみてみたい。P18において、8段階の皿A b 1と皿A b 8が共伴している。P60において、8段階の皿A b 1と皿A b 10が共伴している。P64において、8段階の皿A b 1と皿A a 2が共伴している。SK07においては、8段階の皿A b 3と皿A b 5が出土している。

以上から、皿Aa 2・皿Ab 1～b 9については、8段階に位置付けることができる。この結果、P17において8段階の皿A b 10と共伴する皿Aa 4についても、8段階に位置付けることができる。

ところで、皿Abについては、古網干遺跡（姫路市）井戸出土資料⁽¹⁴⁾に類例を求めることができる。15世紀代と位置付けられた資料で、共伴する備前焼擂鉢は、本報告で8段階と

した擂鉢kに分類したものである。以上からも、皿Abの年代については、大方指示されるものと考えられる。

壺 8段階とされたS K06において壺Aaと壺Abが、同じくS D02において壺Abが出土している。

瓦質土器 まず備前焼との共伴関係をもとに、おもな型式についての時期を検討する。次に他の種別との共伴関係を検討する。

壺 S B07-P3において、7段階の擂鉢c3と壺Bbが共伴している。一方、8段階とされたS D02においても、壺Bbが出土している。

この他、P37において、先に8段階とされた皿Ab1と壺Bc1が共伴している。また、P14において皿Aa1と共伴している。

鉢 8段階とされたS D02から、鉢Cが出土している。

蓋 8段階とされたS D02から出土している。

青磁 盤が8段階とされるS K06から出土している。盤は14世紀代と位置付けられているが、8段階（15世紀中頃～後半）の資料との共伴から、ある程度伝世したものと考えられる。

白磁 杯が8段階とされたS D02から出土している。杯は15世紀前半～中葉と位置付けられており、年代的にはほぼ合致するものである。

3. 旧河道出土土器の検討

はじめに 今回報告する遺物の大半は旧河道出土である。しかし、旧河道はある程度時間幅をもって堆積したものと考えられる。したがって、出土遺物全てが一時期のものとは考えがたいものである。現に、備前焼をみると、1段階から9段階が出土している。したがって、上記の時間幅をもって、つまり13世紀末～16世紀前半の間に堆積したものと考えられる。

以上のような状況のもと、ここでは、最下層出土の一括土器群と最下層出土土器について、検討してみたい。

最下層一括土器群 梶と皿が圧倒的に多く出土している。楓では楓Aa1が、皿では皿Aa1が大半を占めている。これらの型式については、前項の検討では時期を明らかにすることはできなかった。これらの中にあって、8段階とされた皿Ab8が共伴している。この他、8段階のS B15で、楓Aa1が出土している。以上から、下層一括土器群は、8段階にその時期の少なくとも一部を当てる能够のものではないかと考えられる。

最下層出土土器 明らかに最下層から出土した土器を対象とする。

備前焼 5・6段階の甕eが出土している。14世紀中頃～15世紀前半を中心とした時期に位置付けられている。

土師器 楓Aa1・皿Aa1・皿Ab1が出土している。楓Aa1と皿Aa1については、先の最下層一括土器群の主体となった型式である。

北側護岸下層出土土器 擾鉢C1と撚鉢gが出土している。撚鉢C1は14世紀中頃～後半に、撚鉢gは14世紀後半～15世紀前半に位置付けられている。

小結 以上から、最下層出土土器と最下層一括土器群は、基本的に大きな時期差はないものと考えられる。これは、東有年・沖田遺跡井戸1⁽²⁾ 出土資料からも、支持できるものである。

SE01においては、土師器楕A a 1が瓦質土器の壠B a・土師器皿A b 4が共伴している。

つまり、旧河道に廃棄された土器群の主たる時期は、8段階（15世紀中頃～後半）と考えられる。つまり、旧河道自体がこの段階まで機能していたものと考えることができる。

なお、北側護岸下層遺物をはじめとして、共伴する備前焼については、全体的にこの時期より古い傾向（5段階～7段階）を示している。量的にも多く出土している。さらに、13世紀末まで廻ることができる遺物も少ないながらも出土していることから、当該期から継続していたものと考えられる。そして、14世紀中頃以降がその中心であったと考えている。

また、9段階の備前焼をはじめとして、唐津焼・志野焼・青花など、16世紀以降に出現を求めることができる遺物の出土から、当該期に当旧河道が埋没したものと考えられる。

4. 旧河道以外の土器の検討

はじめに

掘立柱建物跡出土資料を中心に検討する。多くが先に検討したように、5段階～8段階（14世紀中頃～15世紀後半）を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。ここでは、掘立柱建物跡出土資料のなかでも古く位置付けられる資料について検討したい。

時期の検討

まず、圓化した土器、特に備前焼から判断できるのは、以下の建物である。S B18が1段階、S B14が3～4段階、S B30が5段階である。

須恵質の備前焼

ところで、大野遺跡出土例³⁰⁾、兵庫津遺跡出土例³¹⁾などから、2段階から3段階までの備前焼の壺は、須恵質をなし外面がハケ調整により仕上げられている。本報告でも、1段階～4段階に須恵質の壺が認められる。そこで、4段階までのメルクマールとして、須恵質の小片が出土した建物について検討してみたい。

このような須恵器片が出土している建物は、S B06・S B10・S B12・S B14・S B15・S B18・S B20・S B21・S B23があげられる。このなかで、S B14とS B18は他の共伴土器から、4段階以前に位置付けられている。この他、S B06についても、共伴する須恵器捏鉢から判断して、当該期に位置付けられるものと考えられる。

しかし、S B12・S B15・S B20・S B23に関しては、共伴土器から当該期に位置付けることは困難である。S B21に関しては、共伴する土師器皿からの時期の特定が困難なため、当該期に位置付けられるものと判断したい。この他、S B10についても、共伴する土器が出土していないため、当該期に位置付けたい。さらに、S B05出土資料に関して、備前焼の特徴から、やや古い傾向にあるものと考えられる。

この他、P 12・P 21・P 64についても、当該期に位置付けられるものと考えられる。

建物以外の時期

最後に、井戸・土坑・溝の時期について検討したい。多くの遺構は、8段階に埋没したものと考えられる。この中で、SE01については出土土器から判断して、16世紀後半～17世紀初頭に埋められたものと考えられる。これは、旧河道がほぼ埋没した時期と一致する時期である。

5. 土器の特徴について

前項で、出土土器の時期的な特徴を検討してきた。時期を特定できなかった器種につい

ても、大半は15世紀を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。これを前提として、土師器と瓦質土器を中心に、その特徴をまとめておきたい。

(1) 土師器

椀・皿・堀が主要な器種で、個体数では椀と皿が大半占める。

椀 個体数としては多くが出土しているが、大半が旧河道からの出土である。特に最下層一括土器群からの出土である。逆に、掘立柱建物跡や土坑・溝からの出土はほとんど見られない。また、上郡町教育委員会が調査した第2次の調査でもほとんど出土していない。⁽²⁰⁾ 遺跡内で限られた状況で使用された可能性が考えられる。

また、当タイプの椀の特徴として、造りが全体的に椎拙である。特に底部の造りが椎拙で、底部が薄いため回転糸切りによる切り離しの際に底部に穴があき、粘土を補填後さらに糸切りを行った例（209：モノクロ図版20）がその代表例である。

なお、周辺遺跡では、西野山・堀遺跡で当タイプの類例が認められる。⁽²¹⁾

皿 椭とは異なり、旧河道をはじめとして柱穴・土坑・溝と、各遺構内から出土している。ただし、皿Aaは旧河道から多く出土する傾向にある。特に最下層一括土器群出土のほとんどが当タイプの皿である。先の椀と同様の特徴が認められ、椀とセットで使用されていた可能性が考えられる。

また、皿Aaの特徴として、先に検討した椀と同様、底部の回転糸切りの技術が大変椎拙であるという特徴を指摘することができる。一端開始した回転糸切りを途中で止め再度実施いた例（334：モノクロ図版28）などがその好例である。さらには、切り離し後底部下面を親指で押えたため、底部下面が大きく窪んだ例も認められる。このため、底部の厚さが2mmと大変薄く仕上がっていいる例が多く認められる。

さらに、糸切り後、板状の圧痕が認められる例が多く認められる。これは、椀についても同様に認められる特徴である。先に述べた、椀とのセット関係を裏付けるものであり、同じ工人により造られた可能性を示唆するものである。胎土・焼き上がりも同様の特徴を示している。

この他、皿Abについては、同様の技法によるものが古網干遺跡（姫路市）から出土している。しかし、器壁の薄さ、底部の仕上げなどの点において明らかに異なり、異なる工人の手によるものと考えられる。しかし、西播磨において、共通する技法が存在した可能性は否定できないものと考えられる。

堀 堀Aと堀Bの2タイプが出土しているが、前者が圧倒的である。しかし、個体数としてはわずかである。同じ煮沸具としては瓦質土器の堀が多く出土していることから、瓦質土器が主体であったものと考えられる。

(2) 瓦質土器

堀・火鉢・風炉を中心的に検討する。

堀 土師器の堀とともに煮沸具として機能していたものであるが、先に触れたように、土師器より圧倒的に多く出土している。これは、上郡町教育委員会が調査した第2次調査でも

同様の傾向である。

さらに、同じ千種川流域で上流域に位置する平瀬道路⁽²⁰⁾（佐用郡佐用町）でも、当遺跡と同タイプの壙が出土している。西野山・堀遺跡、宝林寺遺跡⁽²¹⁾、有年・沖田遺跡⁽²²⁾でも同タイプの瓦質土器が出土している。

当タイプの瓦質土器については、ほぼ同時期に位置付けられる揖保川流域の福田片岡遺跡⁽²³⁾（たつの市）では認められない。煮沸具は土師器が主流となっている。当タイプの瓦質土器は、千種川に特徴的な可能性が考えられる。

火鉢 いずれも奈良火鉢とみられるものである。火鉢Aは佐藤分類⁽²⁴⁾の浅鉢形土器I類A類、水澤分類⁽²⁵⁾の円形浅鉢I類に、火鉢Bは佐藤分類の浅鉢形土器II類A類、水澤分類の円形浅鉢II類に相当するものと考えられる。佐藤によると、浅鉢形土器I類A類は14世紀初頭～中頃に、浅鉢形土器II類A類は14世紀中頃～15世紀中頃に位置付けられている。これは先に検討した時期と概ね一致するものである。

ただし、火鉢Bについては、法量的に小型であり、口縁部の形態も若干異なる。なお、火鉢Bの菊花文がスタンプされた例は、西野山・堀遺跡でも出土例が認められる。

風炉 風炉Aは水澤分類⁽²⁶⁾の風炉III類に、風炉Bは水澤分類の風炉I類～IV類に分類されるものである。風炉Bについては、口縁部のみの残存であるため、より詳細な分類は不明である。風炉Aは14世紀中頃に、風炉Bは15世紀代に位置付けられている。これは、火鉢同様、先の時期的検討結果と合致するものである。

（3）輸入陶磁器

ここでは、全体的な出土傾向について概観する。

出土傾向 数的な根拠を欠くが、当該期の一般的な集落と比較すると、出土量は多いと考えられる。しかも、器種にバリエーションが認められる。たとえば、同じ千種川流域に位置するほぼ同時期の平瀬道路と比較すると、多い傾向にある。しかし、決して多量に出土したというイメージではない。調査面積の違いもあるが、同じ山陽道沿いの福田片岡遺跡と比較すると量的に少ない傾向にある。

ただし、灰釉陶器（572）・鉄釉陶器（613）・白磁杯（95・167）など、類例の少ない資料の出土が注目される。

6. まとめ

最後に、本報告で出土した土器の器種構成と、上郡町教育委員会が調査した第2次調査出土土器との比較をおこない、まとめとしたい。

（1）器種構成

煮沸具 土師器の壙と瓦質土器の壙から構成される。量的には後者が主体をなす。さらには、旧河道出土例から、漆椀が伴っていたものと考えられる。

供膳具 土師器の椀・皿、備前焼の椀、瀬戸美濃焼の碗・皿、輸入陶磁器の碗・皿から構成される。量的には土師器が圧倒的である。この他、1点であるが、瓦器椀が出土している。輸入陶磁器については、どこまで使用されていたかに付いては不明である。

貯蔵具	備前焼の壺・甕から構成される。
調理具	備前焼の擂鉢・鉢と須恵器の捏鉢から構成される。備前焼の擂鉢が圧倒的である。
その他	喫茶と関連する瓦質土器の風炉や火鉢が出土している。
(2) 上郡町第2次調査出土資料との比較 ⁷⁾	
時期	本報告の土器の多くが14世紀後半から15世紀後半にかけての資料であったが、第2次調査出土資料は16世紀代を中心のことである。
土師器	皿に関しては、ほとんどの個体が底部の切り離しが回転ヘラ切りによっている。これは、本報告の皿Abに分類されるものである。逆に、本報告の皿Aaに分類されるものがほとんど出土していない。そして、この皿Aaと同一工人の手によると考えた碗についても、極わずかしか出土していない。さらに、皿Aのなかでも皿Ab1とした大型の皿が、本報告例よりも、量的に目立つ傾向にある。
瓦質土器	まず、器種のバリエーションに差が認められる。本報告例以外にも、茶釜・茶釜蓋・焙烙などが出土している。さらに、風炉に関しては、本報告で風炉Bとしたタイプが出土している。これは、口縁部の文様が蓮子紋からなり、珠紋の本報告例とは異なるものである。
備前焼	擂鉢・甕などが多量に出土している点は同じである。このなかで、碗が比較的多く出土しており、本報告の内容とは大きく異なる。ただし、法量的に口径が10cm未満と小型である点については、本報告例と同じ傾向である。
輸入陶磁器	本報告例より、種類・量ともに豊富である。なかには、中国製の茶入れ等の出土も認められる。

〔註〕

- (1) 重根和弘「まとめ」「山崎古窯跡－一般県道磯上備前線道路改築に伴う調査－」岡山県教育委員会
2002
重根和弘「中世備前焼に関する考察－形態と変遷と年代について－」「山口大学考古学論集 近藤喬一
先生退官記念論文集」近藤喬一先生退官記念事業会 2003
- (2) 石井 啓・重根和弘「備前焼」「第23回 中世土器研究会 中世須恵器と山茶碗」日本中世土器研究
会 2004
- (3) 河本清・葛原克人「不老山古備前窯址」「埋蔵文化財発掘調査報告－山陽新幹線に伴う調査－」岡山
県教育委員会 1972
- (4) 山田清朝「まとめ－遺物」「大野遺跡－（一）別府川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報
告書－」兵庫県教育委員会 2010
- (5) 亀井明徳氏の御教示による。
- (6) 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」「九州
歴史資料館研究論集 4」1974
- (7) 田中克子「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その二）福建省閩江流域、及び以北における窯跡
出土陶磁」「博多研究」第10号 2002

- (8) 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」『日本貿易陶磁研究会』1982
- (9) 山本信夫『太宰府条坊跡X V - 陶磁器分類編 -』太宰府市教育委員会 2000
- (10) 亀井明徳氏の御教示による。
- (11) 岡田章一「出土土器・陶磁器の検討」「宮内堀脇遺跡 I - (一) 町分久美浜線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -」兵庫県教育委員会 2009
- (12) 亀井明徳氏の御教示による。
- (13) 亀井明徳氏の御教示による。
- (14) 中川 猛「古網干遺跡」「姫路市史 第七巻 考古資料編」姫路市市史編集専門委員会 2010
当概資料については、姫路市埋蔵文化財センターの御好意により、実見させていただいた。
- (15) 中田宗伯『東有年・沖田遺跡 - は場整備事業に伴う発掘調査 -』赤穂市教育委員会 2003
- (16) 兵庫県教育委員会「大野遺跡 - (一) 別府川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -」2010
- (17) 岡田章一他「兵庫津遺跡 II (浜崎・七宮地区的調査) -一般国道共同構整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 -」兵庫県教育委員会 2004
- (18) 上郡町教育委員会島田氏の教示による。以下、上郡町教育委員会の調査については、すべて島田氏の教示によるものである。
- (19) 萩 能幸『西野山・堀遺跡 - 高田地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報 -』上郡町教育委員会 1997 以後、当遺跡に関しては当書による。
- (20) 山上雅弘『平瀬遺跡 - 国道373号地域連携推進事業 (特改1種) に伴う埋蔵文化財調査報告書 -』兵庫県教育委員会 2008
- (21) 上郡町教育委員会島田氏の御教示による。
- (22) 赤穂市埋蔵文化財調査事務所にて実見。
- (23) 岡崎正雄『福田片岡遺跡 - 太子・竜野バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書 -』兵庫県教育委員会 1991 以下、本遺跡に関しては当書による。
- (24) 佐藤亜聖「大和における瓦質土器の展開と画期」「中近世土器の基礎研究 X I」日本中世土器研究会 1996
- (25) 水澤幸一「瓦器、その城館的なるもの - 北東日本の事例から - 」「帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第9集」帝京大学山梨文化財研究所 1999 以下、水澤分類は本文による。
- (26) 水澤幸一「瓦器の相貌」「中近世土器の基礎研究22」日本中世土器研究会 2009
- (27) 本項に関しては、上郡町教育委員会島田 拓氏の御教示によるもので、同氏の御配慮のもと実見させていただいたものである。

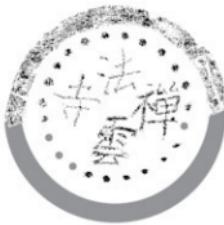
第2節 瓦

(1) 出土瓦の特徴

軒丸瓦

2型式出土している。K 1と以前から周知されていたものと合成したのが、第168図である。K 2については、以前周知されていたものと圓線等の特徴を異にするが、時期的な差は認められないものと考えられる。また、圓線を伴わないタイプが上郡町の第1次調査でも出土している⁽¹⁾。なお、2型式とも同時期のものと考えられる。

この他、筒部については、全体的に造りが粗い傾向にある。具体的には、叩き縮めが不十分で、粘土の総目沿って貫入が著しい。特に、K 3については、凸面の剥離が顕著である。



第168図 軒丸瓦の復元

軒平瓦

1点しか出土していないが、以下のような特徴が認められる。①連珠文が突出する点から、中世初期に見られる特徴を示している。②厚みが瓦当部ほど厚くなる特徴から、四天王寺系の工人によるものと考えられる。

平 瓦

9点出土しているが、以下のような特徴が認められる。①全体的に離れ砂が認められる。②凸面に対して凹面がていねいに仕上げられている。

この他、凹面に布目が認められる個体については、軒平瓦の可能性が考えられる。

丸 瓦

2点出土しているが、以下のような特徴が認められる。①凸面は叩き成形後、ヘラナデにより仕上げられている。②半截して造られている。③孔の位置に2タイプ認められる。④玉縁長が長い。

小 結

この他、軒丸瓦を含めた丸瓦と、軒平瓦を含めた平瓦とでは、胎土の特徴が大きく異なる。平瓦は砂粒が均質に多く含まれているのに対して、丸瓦が少ない傾向にある。特に表面にはほとんど観察されない。

さらに、全体的に、瓦自体が大型である点が、特徴として指摘することができる。したがって、塔とかではなく、大型の建物に使用されていたものと考えられる。また、全体的に粗しが不十分である。

最後に、軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦とともに、その特徴から同時期に造られたものと考えられる。

(2) 瓦の時期

瓦の出土状況

ところで、今回の調査で出土した瓦は、全て旧河道から出土したものである。特に、K 1・K 2・K 4をはじめとして、北側護岸施設から集中して出土している。他の瓦についても旧河道内の下層から出土している。また、瓦の種類に関係なく、ほぼ同時に廃棄されたものと考えられる。そして、これらの瓦が廃棄された時期については、先に土器の項で検討したように、8期つまり15世紀代と考えられるものである。

瓦の時期

「雲」「法雲禪寺」という文字で飾られた軒丸瓦は、法雲寺創建時のものと考えられてい

る⁽²⁾。法雲寺は、赤松円心の菩提寺として、建武四年（1337年）に上郡町苔繩に建立された臨濟宗寺院である。暦応2年（1339）には仏殿が完成し、貞和元年（1345）には利生塔が建立されている⁽³⁾。以上から、これらの瓦の起源は、14世紀第2四半期まで遡らせることが可能と考えられる。

（3）まとめ

瓦の使用

今回報告する調査で出土した瓦は、図化した16点が全てである。この量は、屋根に葺かれていたものとしては、少なすぎる量である。特に、先に大型の建物に葺かれていた可能性を考えると尠更である。今回の調査区外にその大半が廃棄されているものとするならば、うなずけるのであるが。屋根全面には葺かれていなかった可能性も考える必要がある。

なお、今回の調査で瓦が出土した意義については、次章で検討したい。

〔参考文献〕

- （1）上郡町教育委員会　島田　拓氏の御教示による。また、同氏の御好意により、実見させていただいた。
- （2）田中幸夫『播磨の中世瓦－瓦が語る神社・寺・城跡－』2004
田中氏には、本遺跡出土瓦を実見していただき、御教示いただいた。本項の記述も、田中氏の御教示を受けてのものである。改めて感謝する次第である。
- （3）上郡町史編纂専門委員会「上郡町史 第一巻 本文編Ⅰ」上郡町 2008

第6章 まとめ

第1節 遺構

1. 挖立柱建物について

ここでは、掘立柱建物跡を中心に検討する。掘立柱建物跡は計30棟検出されている（第169図）。その概要については、第48表のとおりである。

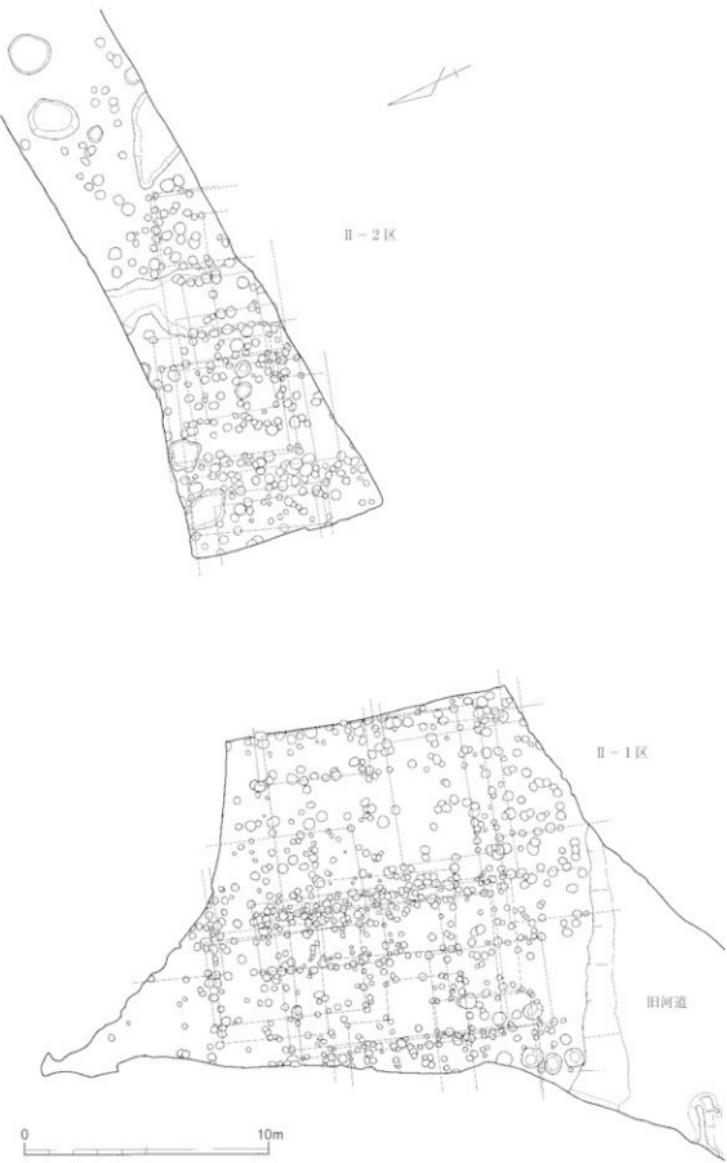
建物の構造

建物の構造の判明したものは全て総柱建物である。柱穴の規模から判断して、束柱構造の建物と考えられる。また、庇を伴う建物は検出されなかった。

なお、建物を構成する柱穴のなかには、柱穴底部に扁平な石を据えたものが数例認められた。しかし、これらの柱穴のみから構成される建物を復元することはできなかった。このため、このような柱穴に関しては、柱を建てる際の柱の高さを調節させるためのものと考えたい。建物群の基盤が砂地であることとも、この要因と考えられる。また、これらの総

第48表 挖立柱建物跡一覧

建物	地区	柱構造	柱間	面積 (m ²)	棟軸方向	時期
S B01	II-2区	総柱	3間×4間	32.64	N11° 30° E	後半期
S B02	II-2区	総柱	2間×3間	17.02	N15° E	後半期
S B03	II-2区	総柱	3間×4間	25.62	N15° E	後半期
S B04	II-2区	総柱	3間×4間	40.49	N17° E	後半期
S B05	II-2区	総柱	2間×3間	18.52	N19° E	前半期
S B06	II-2区	総柱	3間×3間	36.51	N20° 30° E	前半期
S B07	II-2区	総柱	-	-	N22° E	後半期
S B08	II-2区	総柱	4間×	-	N23° 30° E	後半期
S B09	II-2区	総柱	2間×	-	N21° E	後半期
S B10	II-2区	総柱	3間×	-	N16° E	前半期
S B11	II-1区	総柱	2間×3間	22.18	N19° E	後半期
S B12	II-1区	総柱	2間×3間	19.99	N19° 30° E	後半期
S B13	II-1区	総柱	2間×3間	25.67	N15° E	後半期
S B14	II-1区	総柱	3間×5間	56.35	N18° E	前半期
S B15	II-1区	総柱	3間×4間	47.85	N19° E	後半期
S B16	II-1区	総柱	5間×	-	N20° E	後半期
S B17	II-1区	総柱	2間×3間	16.43	N18° E	後半期
S B18	II-1区	総柱	4間×4間	60.65	N17° E	1段階
S B19	II-1区	総柱	3間×	-	N18° 30° E	後半期
S B20	II-1区	総柱	2間×3間	17.22	N17° E	後半期
S B21	II-1区	総柱	2間×3間	24.5	N16° E	前半期
S B22	II-1区	総柱	2間×3間	13.92	N18° E	後半期
S B23	II-1区	総柱	-	-	N16° E	後半期
S B24	II-1区	総柱	2間×2間	9.67	N16° E	後半期
S B25	II-1区	総柱	4間×	-	N16° E	後半期
S B26	II-1区	総柱	-	-	N16° E	後半期
S B27	II-1区	総柱	2間×3間	16.91	N24° E	後半期
S B28	II-1区	総柱	2間×3間	12.8	N19° 30° E	後半期
S B29	II-1区	総柱	2間×3間	16.04	N17° E	後半期
S B30	II-1区	総柱	-	-	N17° 30° E	5段階



第169図 掘立柱建物群

柱の建物が、倉であったのかどうかについては、判断できない。

建物の規模 建物の規模は、2間×3間が最も多く、続いて3間×4間が多く検出されている。最も規模の大きなものは、SB14の3間×5間である。この他SB16でも、桁行が5間検出されている。ただし、当建物については梁行全体が未検出であるため、全体の規模は不明である。

建物の面積は、4間×4間のSB18が60.65m²と最大で、4間×5間のSB14が56.35m²と続く。最も多かった2間×3間の面積は、15m²から25m²に集中している。

建物の棟軸方向 建物の棟軸方向は、大きみると大きな違いは認められない。特に、SB01・SB07・SB08・SB27を除くと、N15°EからN21°Eの間に集中している。前章で検討した、建物群のなかでも古く位置付けられたSB10・SB14・SB18・SB21をみると、N16°E～N18°Eの間に集中している。

建物の建て替え 今回報告する建物群の特徴の一つは、幾度同じ場所で建て替えがなされているという点である。これは、建物を建てることが可能な土地が限られていたことによるものと考えられる。今回の調査では、区画を明示することはできなかったが、一定の区画があったものと想定される。

2. 旧河道について

北側護岸施設 出土遺物から判断して、旧河道は、前半期から後半期にかけて機能し、16世紀後半に埋没したものと考えられる。ここで注目したいのが、北側護岸施設として報告した石組である。調査では、十分その機能を明らかにすることはできなかった。しかし、可能性として、船着場に関連する造構の一部である可能性が考えられる。

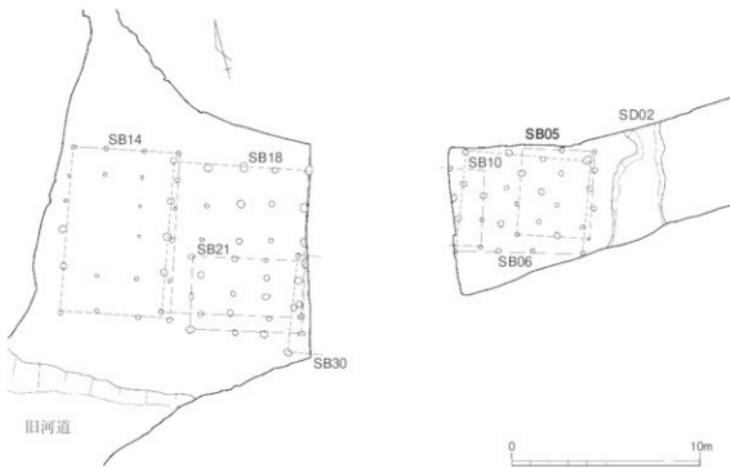
3. 造構の変遷

前章で遺物の時期について検討した。この検討結果をもとに、造構の変遷について検討したい。ただし、前章での検討の結果、備前焼は1段階から9段階まで細分できるが、すべての時期について造構を位置付けることは困難である。そこで、先に時期的な中心と考えた8段階（後半期：15世紀代）とより確実に古く位置付けられる1～5段階（前半期：14世紀中頃～後半）の2期にわけてみたい。

前半期の造構 前章での検討結果から、SB05・SB06・SB10・SB14・SB18・SB21・SB30は、当該期に位置付けられるものと考えられる（第170図）。ただし、これらの建物についても、前章での検討結果（前章第1節）および、平面的な重複関係から、同時期に存在したすることは困難である。

この他、P12・P21・P61・P64については、前半期に位置付けられる。また、SD02についても、出土遺物から判断すると後半期に位置付けられる。しかし、当該資料は意識的に埋められた土砂中からの出土であること、先にあげた前半期の建物がSD02とは平面的に重複しないことから、前半期から機能していたものと考えたい。旧河道についても、当該期から機能していたものと考えられる。

以上、前半期の造構を概観すると、建物の規模が総体的に大きい傾向にある。また、S



第170図 前半期の掘立柱建物群

D02と平面的に重複せず、方向性がほぼ一致する。したがって、SD02が区画溝として機能していたのではないかと考えられる。

後半期の遺構　上記外の遺構が、当該期に位置付けられるものと考えられる。旧河道についても、最終段階までは機能していたものと考えられる。先の検討結果から、前半期から後半期にかけて機能し、16世紀後半に完全に埋没したものと考えられる。

当該期の遺構を概観すると、掘立柱建物跡については、前半期よりその規模が縮小されている。そのかわり、建物の平面形が長方形となり、2間×3間の建物が主流となる。そして、南北方向に棟軸をもつ建物（南北棟）と東西方向に棟軸方向をもつ建物（東西棟）に明確に区別されるようになる（第171図）。特にⅡ-1区で顕著に認められる傾向であるが、南北棟・東西棟それぞれがほぼ同じ場所で位置をわずかに替えながら建て替えられている。少なくとも、2回はほぼ同じ位置での建て替えが認められる。

このなかで、南北棟に注目すると、SB11・SB13・SB16・SB20・SB24の一群が同一区画内にあったのではないかと考えられる。SB07・SB19・SB23の一群についても同様に考えられる。両群の平面的な状況から、南北方向に長い地割りの復元が可能ではないかと考えられる。

これと同様に、東西棟のSB01・SB02・SB03・SB08が集中している箇所についても、一定の区画が存在した可能性が考えられる。

いずれの区画においても、これらの区画内で南北棟と東西棟が組み合わされていたものと考えられる。

最終期の遺構　SE01については、16世紀後半に掘削されたものと考えられる。この段階においては、旧河道は機能していなかったものと考えられる。



第171図 後半期の掘立柱建物群

第2節　山野里宿遺跡の検討

1. 史料上にみる山野里

はじめに

山野里宿遺跡は、その遺跡名から、「宿」に関連する遺跡と考えられている。これは、先にも紹介したように、①当地に「宿」とつく地名が遺存すること、②当地の中心部を中世山陽道が通っていたとされること、に依拠するものである。

文献史料

以下、山野里宿遺跡の調査成果について、「宿」との関連において検討をしてみたい。ところで、本道跡が所在する山野里については、文献史料にも登場する。そこで、まずその史料を検討し、史料上の「山野里」についてみていくことにする。南北朝時代以降「山里」「山ノ里」が登場する主な史料⁽¹⁾は、第49表のとおりである。

(1) 史料の検討

山里宿

まず注目されるのが、史料4に「山里宿」の文字が認められることである。少なくとも南北朝期においては、当地が「宿」として認識されていたことは明らかである。

軍陣

次に注目されるのが、史料1と史料3に「山里」に陣が置かれていた記述である。また、史料7からも、赤松則尚が播磨へ下向した際に真先に当地へ入っている。このように、当地が、軍事上の拠点であったことが理解できる。時期的には、14世紀中頃・15世紀中頃である。

倉

また、史料5において、当地に「倉」が存在したことが理解できる。赤松氏の本城である白旗城へ運ぶための兵糧米が貯えられていたものである。榎原雅治⁽²⁾は、当概史料から倉を軍事的拠点であったこととの関連で理解されている。

交通の要衝

この他、史料1と史料2において、当地は交通上重要な位置にあったことが理解できる。これに関連して、史料5の兵糧米が倉に搬入される史料も、交通の要衝にあったことに関連するものと考えられる。

以上、文献史料から、「山里」は交通上重要な位置にあり、①宿として、②軍事的拠点と

第49表 「山野里」関連史料一覧

No	町史	元号	年代	史料名	史料内容（抜粋）
1	史66	元弘二年～三年	1332～1333	太平記 卷七 松峰起事	山陽・山陰両道を塞ぎ、山里・梨原の間に陣をとる
2	史65	元弘三年	1333	太平記 卷六 赤松入道円心賜大塔宮令旨事	移坂・山ノ里二箇所に閑を居、山陽・山陰両道を差塞ぐ
3	史204	貞治二年	1363	教王護国寺文書 卷一 播磨国矢野莊重藤名學兼方年貢等敷用状	山里陣長夫
4	史85	建武元年	1334	大日本古文書 城賴申状案	山里宿
5	史345	応永三五年	1428	東寺百合文書 ら函三四 播磨国矢野莊供僧方年貢等敷用状	山里貯兵糧米
6	史519	文安四年	1447	東寺百合文書 れ函七五 播磨国矢野莊供僧方年貢等敷用状	山里へ野伏折紙付時
7	史541	享徳二年	1453	東寺百合文書 れ函九二 播磨国矢野莊供僧方年貢等敷用状	下野方山ノ里へ入国礼

して、③倉として、機能していたことが理解できる。次に、①の宿について検討していくことにする。

(2) 宿について

「宿」については、文献史学の間で、以下のようなイメージで捉えられている。

宿のイメージ 宿は、基本的に都市の範疇で理解されている。具体的には、新城常三・齊藤利男・榎本正治・榎原雅治・飯村 均・五味文彦⁽²⁾によって、語られている。

新城常三 宿は、市・市場が集落化したもので、その地理的条件として、河畔・山麓および街道の合流点などを挙げている。そして、交通集落として発達した宿は、自然的・人文的な優越性により、あるいは市が設けられ、あるいは守護が居住し、寺院が建立され、しだいに宿としての純粋性を失い、経済的・政治的なあるいは宗教的な小中心地として、都市化の傾向をたどる、と指摘されている。

齊藤利男 宿は、自然堤防上など「河原」的な場所に成立し、そこは農村社会との接点であった。そして、そこには「宿の寺」つまり「境の寺」があったと指摘されている。

榎本正治 多くの宿は、寺社などで結界され、限定された区域の中に、道を中心にして計画的に町割された可能性が高く、交通の要衝に設けられた。一方、宿は他の場所と分離された地域であり、かつ自然災害を受けにくい場所とされている。さらに、港や市も宿と重複するとされている。しかし、市と宿の違いとして、市は無主の地に立地するのに対し、宿は所有者が存在したと指摘されている。

榎原雅治 前項の史料5をもとに、宿には、「宿（やど）」としての機能と、「倉」としての機能があったと指摘されている。

また、宿には「宿の寺」が存在し、権力者の宿泊場所として利用されていた。そして、宿の寺は長者たちの援助により維持されていた、つまり宿泊施設を建設・維持するためには地域社会に対して権力的な影響力を有する「宿の長者」と宗教関係者の協業関係が前提であったとされている。

この他、倉の置かれた山陽道の宿はいずれも山陽道と主要河川の交差する地点であると、指摘されている。

飯村 均 中世の宿について、中世後期の「宿」「市」「湊」の可能性のある集落は、いずれも13世紀頃に成立するものの、その盛期は15世紀を中心とし、16世紀後半には著しく衰退するか、廃絶する。また、道に面した集落の衰退と軸を一にするように、道の維持管理も行われなくなり、その役割が著しく低下すると指摘されている。

五味文彦 中世の宿の要素として、(1)道にそって、(2)民家が集住し、(3)寺院や信仰の場として生まれ、(4)裕福な「有徳人」が成長し、近くの(5)河原に、(6)市が設けられてにぎわう、といった6点をあげている。

小 結 以上の研究成果から、宿の要素・イメージとして、以下の5点のキーワードをあげることができる。上記の五味文彦の説には沿うもので、①陸上・水上交通の要衝に位置する（地理的位置）、②河原を中心とした新興地に立地（地形環境）、③建物が集中する（都市）、④宿内には「宿の寺」が存在する（宗教施設）、⑤市が付設される、の5点である。

(3) 調査成果の検討

前項で指摘したキーワードに合せて、調査成果を検討していくこととする。

地理的位置　先述した（第1章第1節）ように、本遺跡は東西の陸上交通（山陽道）と南北の水上交通（千種川）の交差点に位置する。さらに、山陽道にはほぼ平行するよう安室川が千種川へ流れ込んでいる。

特に中世においては、千種川は内陸部と瀬戸内を結ぶ重要な交通路であったようである。材木・鉄の運搬において重要な大動脈であった。また、千種川流域の莊園などから、年貢が川舟で坂越（赤穂市）まで運ばれ、海舟に積み替えられたようである。¹⁰⁷⁾

以上から、当地は交通の要衝であったことは明らかである。また、前節で述べたように、旧河道内で検出された北側護岸施設についても、船着場の一部の可能性が考えられる。上記の交通機能の一端を示しているものと考えられる。

地形環境　山野里宿遺跡は自然堤防上に立地する（第1章第2節）。この自然堤防が形成された時期は、出土土器から奈良時代以降と考えられる。したがって、当遺跡、特に今回の調査地は古くから集落があった場所ではない。いわゆる新興地に立地していると、理解することができる。

都市　II-1区からII-2区に検出した掘立柱建物群が、建物の集中を物語っている。また、建物の建て替えが顕著であることから、限られた区画が存在していたことによるものと考えられる。以上から、今回報告する建物群は、都市的様相の一端を表しているものと捉えることも可能である。

この他、か壁の出土（第4章第1節）が注目される。五味文彦は、都市には欠かせない要素の一つとして、鍛冶・鑄物師などの職人を挙げている¹⁰⁸⁾。つまり、か壁の出土も、都市との関連で捉えることのできる資料ではないかと考えられる。

瓦質土器と瓦の出土があげられる。

宗教施設　瓦質土器¹⁰⁹⁾によると、当遺跡で出土したような大型の火鉢や風炉は、公家や寺院が必要とした器物であるとしている。特に、仏教信仰という内面的・精神的生活と密接に結びついた器物であったと考えている。

これを深く掘り下げたのが祢津宗伸である。祢津によると、瓦質風炉については、中世の喫茶において、抹茶・煎茶を喫する場合は必ず用いられるものであったようである。そして、禪宗寺院では『大鑑清規』に喫茶規定があるように、喫茶が盛んであった。なかでも、特に煎茶が普及していたようである。¹¹⁰⁾

以上から、本遺跡出土の瓦質風炉についても、寺院と関連する遺物としてとられることが可能と考えられる。

瓦　出土量は多くはないが、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦各種が出土している。ここから、寺が存在した可能性が考えられる。特に注目されるのが軒丸瓦と軒平瓦で、赤松円心の菩提寺として建立された法雲寺と同文瓦である（第5章第2節）。法雲寺は、円心が雪村友梅を開山に招いて建立された臨済宗寺院である。その後多くの禪僧が住持となり、応永二三年（1416）には五山に次ぐ十刹に昇格している。

これは、先の祢津の分析結果と合致するものである。つまり、出土瓦が禪宗寺院である

法雲寺と同文である。したがって、想定される寺院が押宗寺院と考えられる。その押宗寺院は特に喫茶が盛んであり、喫茶には瓦質の風炉が欠かせないものであった。このように、「喫茶」を中心に瓦と瓦質風炉を結びつけることが可能である。ただし、前章第2節でも触れたように、瓦の出土量が少ない点については検討する余地がある。

市 今回の調査成果から、直接「市」と断定することは困難と考えられる。ただし、多量に出土した土師器碗Aと皿Aaについては、使用された痕跡がほとんど認められないことから、商品的なものであった可能性を否定することはできない。

(4) 「宿」的要素の抽出

はじめに 上記の検討において、当地の調査成果からも、一般にイメージされている「宿」と合致する点を多く見出すことができた。さらに、上記の検討事項以外に、調査成果から「宿」を指示する要素を指摘することができる。それは、①多量の出土土器、②動物遺体、③遺跡の存続時期、④地名、である。以下、この4点について検討してみたい。

①多量の土器 旧河道から、土器が多量に出土している。これらの土器については、北側の建物群から廃棄されたと考えられるものである。ここでは、備前焼擂鉢・土師器皿・輸入陶磁器について検討したい。

備前焼擂鉢 まず、多量に出土した備前焼擂鉢であるが、全ての個体において使用痕を確認することができた。つまり、調理具として盛んに使用されていたことを示すものである。

土師器皿 灯明皿として使用されていたと考えられる個体が少なからず認められた。当地で使用されていたことを示す資料と考えられる。



第172図 山野里地内小字の復元



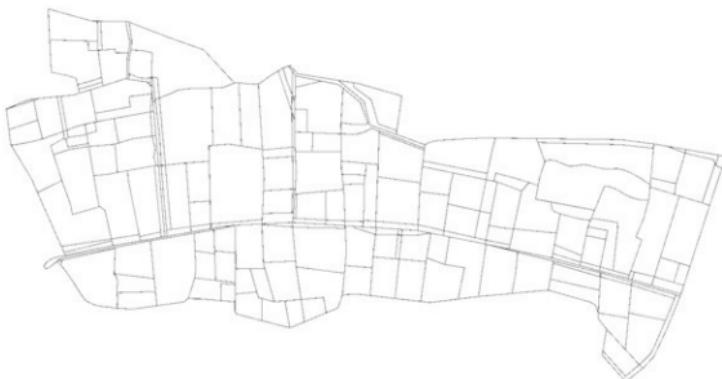
第173図 地籍図「山野里字四ツ日」と調査位置

輸入陶磁器 多種多様な陶磁器が出土している。しかし、各器種とも数点ずつの出土であり、商品として当地で扱われていたものとは考えられない。むしろ、多様な流通過程の結果もたらされたものと考えたい。瀬戸美濃焼についても同様に考えられる。

小 結 以上、旧河道から出土した多量の土器は、当地で使用されていたものであり、一部（土師器椀A・皿Aa）を除いて、市との関連で考えることは困難と考えられる。

②動物遺体 旧河道からアッキ貝科、スズキ・マダイなど、海生生物が出土している。アッキ貝科については、加熱処理痕が認められるとのことである（第4章第5節）。当地で消費されていたものと考えられる。アッキ貝、特にアカニシについては、中世までは一般的に消費されていたという分析がなされている³⁰。宿の利用者に供されていた可能性が考えられる。

③遺跡存続時期 今回の調査地に限ると、14世紀中頃から15世紀後半にかけて、機能していたことが明ら



第174図 山野里字宿 地籍図

かとなっている。この時期は、福田片岡遺跡（兵庫県たつの市）における、中世山陽道の存続時期が13世紀後半から15世紀後半～16世紀前半とする分析結果と合致するものである。これは、先の飯村一均の説とも合致するものである。

④地名
当地に残る地籍図と小字名から検討してみたい。

小字 調査地周辺の小字名を復元したのが第

172図である。山野里地内の主な小字単位の地籍図を、上都町発行の都市計画図上に復元したものである。地籍図自体がスケール的に正確ではないため、全体的に正確さを欠くものである。ここで注目されるのが、調査地が位置する「山野里字四ツ日」の西側に「山野里字宿」という小字が認められる。

地籍図 第173図は、「山野里字四ツ日」と調査地の位置関係を表したものである。なお、先にも述べたように、地籍図そのものが正確さを欠くため、調査地との位置関係も正確なものではないことを断っておく。これによると、中央部を東西方向に細長い区画がのびている。これが山陽道と考えられる。したがって、調査地は山陽道の南側にあたることは明らかである。しかし、山陽道には面していないものと考えられる。

また、この山陽道を中心に、南北に長い長方形の区画が認められる。部分的ではあるが、長方形地割りと理解することができる。この区画のラインと調査成果を面的に合せることは困難であるが、建物の方向性とはほぼ一致するものと考えられる。

第174図は、「山野里字宿」地内の地籍図である。「山野里字四ツ日」同様、中央部を横断する区画が認められ、山陽道と考えられる。そして、この山陽道に面した長方形の区画を認めることができる。

第50表 赤松氏の動向

年号	当主	記事
1331	元弘元年	元弘の乱。六波羅攻め。
1333	正慶2年	円心 大塔宮護良親王の令旨に応え、挙兵。杉坂・山里に關。建武政権により播磨守護に。
1334	建武元年	円心 播磨守護職解任。
1336	建武3年	足利尊氏より、播磨守護職に。
1337	建武4年	法雲寺建立。
1337	建武4年	円心の長男範資攝津守護に。
1350	觀応元年	円心没。
1357	延文2年	則祐 宝林寺建立。
1362	貞治2年	則祐 摂津守護職に。
1364	貞治3年	則祐 備前守護を兼任。
1371	応安4年	義則 守護職を繼承。
1393	明徳4年	明徳の乱後、美作守護に。
1427	応永34年	満祐 代を繼ぐ。
1441	嘉吉元年	嘉吉の乱。赤松悲領家壊滅。
1458	長禄2年	赤松氏再興。
1467	応仁元年	赤松氏勢力挽回。
1483	文明15年	播磨・美作・備前の支配権が山名氏に。
1499	明応8年	赤松氏分裂。



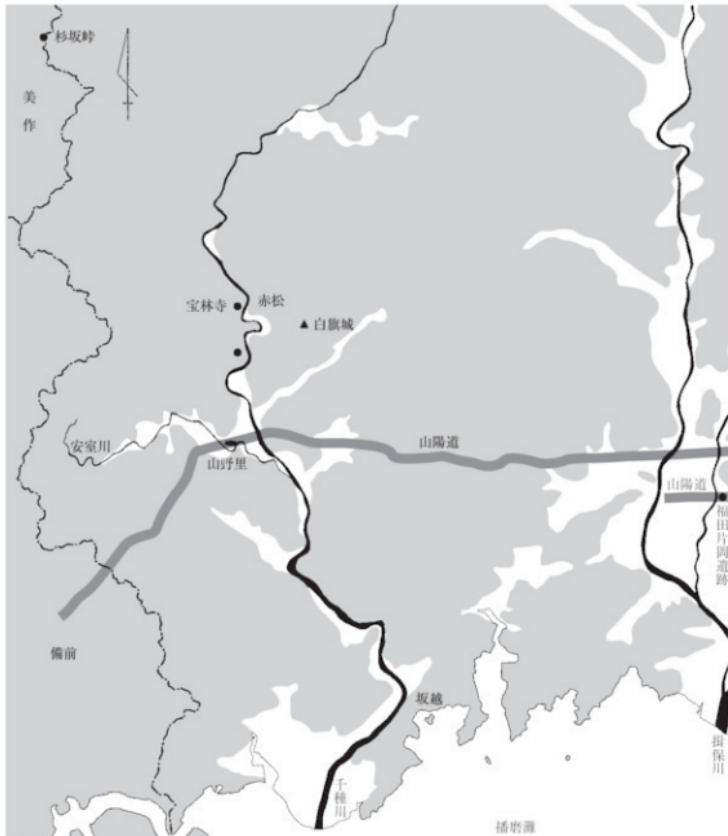
第175図 現在の旧山陽道（宿地内）

以上、第173図と第174図の地籍図から復元された山陽道が、第172図の中央部を東西方向に横断する網線である。

小　結　　以上の調査成果を考えると、本道跡が「宿」である可能性が極めて高くなる。一方で、①道路構造が未検出であること、②瓦の出土量がわずかであることから寺院の実態が不明である、などの点を指摘することができる。①については、先述したように、調査地が山陽道とはやや離れていることによるものと考えられる。

(5) 赤松氏との関連

はじめに　　ところで、(1)で扱った史料のほとんどは、赤松氏に関連するものである。さらに、出土瓦も、赤松氏創建の法雲寺と同文である。このように、本道跡を検討するにあたっては、



第176図　関連地の位置

赤松氏を無視することはできない。以下、①出土した動物遺体、②輸入陶磁器、③瓦質土器、④出土呪符木簡、⑤出土漆椀の5点から、赤松氏との関連について検討してみたい。

赤松氏の動向 まず、上記5点について検討する前に、14世紀・15世紀における赤松氏の動向を簡単に見ておきたい。本遺跡と関連する14世紀・15世紀代の赤松氏の動向について簡単にまとめたのが、第50表である^[1]。赤松氏は、14世紀後半で赤松円心・則祐・義則の3代にわたって隆盛を極め、1441年の嘉吉の乱により一旦滅亡している。その後、1458年に再興されている。しかし、この後期赤松家も1499年に分裂している。

今回の調査では検出された遺構・遺物は、15世紀代なかでも後半（8期）が中心である。したがって、赤松氏再興以後の時期に対応するものと考えられる。赤松氏が隆盛を極めた時期の遺構・遺物は皆無ではないが、わずかである。

①動物遺体 旧河道からアッキ貝科、スズキ・マダイなど、海生生物が出土している。特に、スズキやマダイは加熱処理されない状態で持ち込まれたと推定されるものである（第4章第5節）。当地のように内陸部にあっては、贅沢品であったものと考えられる。これは、宿で一般に供されたと考えるよりも、赤松氏との関連で理解できるのではないかと考えられる。

②輸入陶磁器 多種多様な陶磁器が出土している。これらの中には、白磁杯（167）・灰釉陶器（572）・鉄釉陶器（613）など、類例の少ない器種も少なからず認められる。有力者＝赤松氏との関連で理解できるものと考えられる。

③瓦質土器 先にも記したように、水澤幸一によると、風炉などの大型の瓦質土器は、一般には使用されなかつたものとされている^[2]。先の検討では、寺院との関連で扱ったが、赤松氏との関連で理解することも可能である。

④出土呪符木簡 丹本簡の内容は、武運長久を祈願するものと考えられる。当時の社会情勢を反映したもので、赤松氏との関連が考えられる。

⑤出土漆椀 かなり大型の椀（W4）が出土している。一般的な集落ではあまり例をみないものである。

小 結 以上の検討結果から、直接的ではないが、赤松氏の存在を感じ取ることができる。宿に存在するといわれている「宿の長者」「有徳人」にあたるのではないであろうか。

〔註〕

- (1) 上郡町史編纂専門委員会『上郡町史 第三巻 資料編1』 1999
- (2) 榎原雅治「地域社会における街道と宿の役割－中世山陽道と宿の諸相－」『日本中世地域社会の構造』校倉書房 2000
- (3) 榎原雅治「中世の東海道をゆく」中公新書 2008
- (4) 新城常三「東海道と宿の発達」『鎌倉時代の交通』1967
- (5) 齋藤利男「古代・中世の交通と国家」『日本の社会史 第2巻 境界領域と交通』岩波書店 1987
- (6) 笹本正治「市・宿・町」『岩波講座日本通史 第9巻』岩波書店 1994
- (7) 前掲（2）
- (8) 飯村 均「道と『宿』」『戦国時代の考古学』小野正敏・萩原三雄編 2003
- (9) 五味文彦「中世都市の展開」『新体系日本史6 都市社会史』山川出版社 2001
- (10) 三宅克広「上郡町内の荘園と寺院・神社」『上郡町史 第一巻 本文編』上郡町史編纂専門委員会

2008

(10) 前掲（8）

(11) 水澤幸一「瓦器、その城館的なるもの－北東日本の事例から－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第9集』帝京大学山梨文化財研究所 1999

(12) 桃津宗伸「中世信濃の喫茶－開善寺文書、守矢文書、定勝寺文書、瀬湯瓶および瓦質風炉による考察－」『長野県立歴史館研究紀要』第10号 2004

(13) 桃津宗伸「大鎌清規と五山文学における喫茶の諸形態－中世信濃からの視覚－」『長野県立歴史館研究紀要』第9号 2003

(14) 前掲（9）

(15) 西岡達哉「巻貝から二枚貝へ－アカニシの出土量の減少について－」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要VI』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1998

(16) 岡田章一「兵庫県における古代から中世の古道の調査」「中世のみちと物流」藤原良章・村井章介編 1999

(17) 竹本敬市「文献にみる白旗城」「白旗城跡」兵庫県赤穂郡上郡町教育委員会・白旗城調査委員会 1998
水鳥福太郎「南北朝の動乱」「兵庫県史 第2巻」兵庫県史編集専門委員会 1975

(18) 水澤幸一「瓦器の相貌」『中近世土器の基礎研究22』日本中世土器研究会 2009

(19) 前掲（1）

(20) 前掲（8）

第3節 総括

- 遺跡の性格** 以上の検討結果から、検出遺構・出土遺物等から判断する範囲において、限りなく「宿」に近い状況を示しているものといえよう。調査地が「山野里宿遺跡」の東端にあたることを考えると、西側に「宿」の本体があつた可能性が極めて高いものと考えられる。
- 調査成果** 最後に、今回の調査の成果について列挙し、まとめしたい。
- ①山野里宿遺跡は、安室川によって形成された自然堤防上に立地する遺跡である。この自然堤防は、出土土器から奈良時代以降に形成されたものと考えられる。
 - ②検出された遺構は掘立柱建物跡が中心で、計30棟検出された。これらの掘立柱建物跡は同時に存在したのではなく、数度の建て替えが行われている。時期的には、14世紀中頃から15世紀後半にかけてであるが、15世紀後半が中心と考えられる。
 - ③掘立柱建物以外に目立つ遺構として、旧河道があげられる。これは、今回報告する遺物のほとんどが、ここから出土しているためである。土器をはじめとして、瓦類・木製品・鉄製品などが出土している。掘立柱建物群とほぼ同時期に機能していたものと考えられるものである。
 - ④旧河道から出土した土器は、土師器と備前焼が量的にかなりの比率を占めている。土師器は、椀と皿が中心である。備前焼は、甕・壺・擂鉢・椀が出土している。備前焼については、当概資料の年代を検討する基準となっている。
 - この他、瓦質土器や輸入陶磁器も多く出土している。瓦質土器は、壺類が中心であるが、風炉や火鉢の出土も注目される。輸入陶磁器は、量的には多くはないが、バリエーションに富む。また、類例の少ない陶磁器の出土が目立つ傾向にある。
 - ⑤木製品は、量的には多くないが、呪符木筒や漆椀・下駄等が出土している。
 - ⑥瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦各種が出土している。なかでも注目されるのが、軒丸瓦である。瓦当面が「雲」「法雲禪寺」の文字で飾られており、これは赤松円心が建立した法雲寺と同文である。この瓦の出土から、赤松氏との関連の強さを伺うことができる。

出土土器觀察表

觀察表 1

No.	種別	器種	地区名	遺構名	出土層位・位置	法量(cm)		
						口径	器高	底径
1	土師器	椀	II-2区	S B01-P 10		13.80	3.20	
2	土師器	椀	II-2区	S B03-P 9		11.90	3.05	7.25
3	備前焼	甕	II-2区	S B04-P 12		46.10	8.75	
4	土師器	皿	II-2区	S B04-P 13		7.50	1.90	5.70
5	土師器	皿	II-2区	S B04-P 10		6.60	1.85	4.00
6	土師器	皿	II-2区	S B04-P 12		8.35	1.50	7.40
7	瓦質土器	擂鉢	II-2区	S B05-P 9				
8	土師器	壺	II-2区	S B06-P 12			3.40	
9	須恵器	捏鉢	II-2区	S B06-P 13			2.80	
10	土製品	輪羽口	II-2区	S B06-P 1				
11	備前焼	鉢	II-2区	S B07-P 3			5.55	
12	備前焼	擂鉢	II-2区	S B07-P 3			3.90	
13	備前焼	擂鉢	II-2区	S B07-P 3		26.60	11.30	12.80
14	瓦質土器	壺	II-2区	S B07-P 3		20.90	3.05	
15	土師器	皿	II-2区	S B08-P 5		9.10	1.65	7.50
16	青磁	碗	II-2区	S B09-P 4			2.30	6.30
17	土師器	皿	II-1区	S B12-P 8		8.40	1.70	6.40
18	土師器	椀	II-1区	S B12-P 7			1.70	6.00
19	備前焼	擂鉢	II-1区	S B12-P 11			11.20	13.00
20	土師器	皿	II-1区	S B13-P 9		7.80	1.15	6.50
21	土師器	皿	II-1区	S B13-P 6		7.30	1.00	6.00
22	備前焼	甕	II-1区	S B14-P 12		37.20	4.85	
23	備前焼	擂鉢	II-1区	S B15-P 12		29.40	7.55	
24	土師器	椀	II-1区	S B15-P 5		10.80	3.05	6.10
25	土師器	椀	II-1区	S B15-P 5		10.90	3.40	5.40
26	土師器	皿	II-1区	S B15-P 12		7.15	1.60	5.05
27	土師器	皿	II-1区	S B15-P 12		6.80	1.60	4.80
28	土師器	皿	II-1区	S B15-P 12		7.00	1.40	4.60
29	土師器	皿	II-1区	S B15-P 12		6.80	1.45	4.80
30	土師器	皿	II-1区	S B15-P 12		6.75	1.50	4.85
31	土師器	皿	II-1区	S B15-P 12		6.75	1.45	4.60
32	土師器	皿	II-1区	S B15-P 12		6.60	1.45	4.50
33	土師器	皿	II-1区	S B15-P 12		6.60	1.45	4.80
34	土師器	皿	II-1区	S B15-P 12		6.50	1.55	4.85
35	土師器	皿	II-1区	S B15-P 12		7.00	1.70	5.05
36	瀬戸・美濃	盤	II-1区	S B17-P 11		33.50	4.35	
37	土師器	皿	II-1区	S B18-P 6		10.90	1.45	
38	白磁	碗	II-1区	S B18-P 2		11.85	2.35	
39	青磁	碗	II-1区	S B18-P 17		13.70	1.70	
40	青磁	碗	II-1区	S B18-P 16		13.50	4.05	
41	備前焼	甕	II-1区	S B18-P 19			5.65	
42	石製品	硯	II-1区	S B18-P 10				
43	土師器	皿	II-1区	S B19-P 3		8.40	1.15	7.70
44	土師器	皿	II-1区	S B21-P 12		11.80	2.45	3.40
45	備前焼	擂鉢	II-1区	S B23-P 2			7.95	
46	土師器	皿	II-1区	S B24-P 8		9.60	2.70	6.10
47	土師器	皿	II-1区	S B24-P 8		8.00	1.60	6.00
48	土師器	皿	II-1区	S B24-P 8		9.80	1.60	
49	備前焼	擂鉢	II-1区	S B24-P 8			6.25	
50	土師器	皿	II-1区	S B25-P 1		8.90	1.40	6.80

残存状況	色調	底部	備考	図版	モノクロ 図版	カラー 図版
口縁部1/9	にぶい黄橙～にぶい黄			1		
口縁部1/8・底部1/4	橙～にぶい橙	回転ヘラ切り		1		
口縁部わずか	にぶい橙～灰黄褐			1		
口縁部わずか・底部1/3	橙～黄灰	回転糸切り		1		
口縁部1/12・底部1/10	橙			1		
口縁部～底部1/4	にぶい橙～にぶい黄橙	回転ヘラ切り		1		
体部わずか	暗灰				12	
口縁部わずか	橙			1		
口縁部わずか	灰白			1		
わずか	橙			1		
口縁部わずか	褐灰～にぶい褐			1		
口縁部わずか	灰褐～黄灰			1		
口縁部1/3～底部1/4	灰褐			1	12	
口縁部わずか	灰黄～にぶい橙		種し不十分・筒幅1.35cm	1		
口縁部1/9・底部わずか	橙			1		
底部完存	オリーブ灰～灰白			1		20
口縁部1/12・底部1/4	灰白～黄灰			1		
底部1/4	浅黄橙～浅黄			1		
底部わずか	黒褐～にぶい赤褐	ナデ		1	12	
口縁部1/6・底部1/4	橙			1		
1/12	浅黄	回転ヘラ切り		1		
口縁部わずか	暗褐～灰黄褐			1		
口縁部1/9	黄灰～暗灰黄			1	12	
口縁部1/6・底部1/4	にぶい黄橙	回転糸切り		1		
口縁部1/6・底部1/4	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り		1		
ほぼ完存	にぶい黄橙～にぶい橙	回転ヘラ切り		1	13	
ほぼ完存	橙	回転ヘラ切り		1	13	
ほぼ完存	橙	回転ヘラ切り		1	13	
口縁部1/2・底部ほぼ完存	橙	回転ヘラ切り		1	14	
ほぼ完存	にぶい橙～灰白	回転ヘラ切り		1	13	
口縁部～底部1/2	にぶい橙～橙	ヘラ切り		1	14	
口縁部1/2～底部完存	橙	ヘラ切り		1	14	
ほぼ完存	橙	回転ヘラ切り		1	14	
口縁部5/6～底部完存	にぶい橙～橙	回転ヘラ切り		1	14	
口縁部1/2～底部ほぼ完存	灰白～にぶい橙	回転ヘラ切り		1	14	
口縁部1/12	暗オリーブ～オリーブ黄			1		15
口縁部1/9	褐灰～橙			1		
口縁部1/9	灰白			1		23
口縁部わずか	灰オリーブ			1		
口縁部1/6	オリーブ灰			1		
口縁部わずか	灰			1	12	
1/2				2	15	
口縁部～底部1/8	にぶい橙～にぶい黄橙	ヘラ切り		2		
口縁部1/9	橙			2		
口縁部わずか	灰褐～灰赤			2		
口縁部～底部わずか	橙～にぶい橙	回転ヘラ切り		2		
口縁部1/4・底部1/2	橙	回転ヘラ切り		2		
口縁部1/8	にぶい黄橙			2		
口縁部わずか	灰褐～灰			2		
口縁部わずか・底部1/12	にぶい黄橙	ヘラ切り？		2		

觀察表 2

No.	種別	器種	地区名	遺構名	出土層位・位置	法量 (cm)		
						口径	器高	底徑
51	土師器	皿	II-1区	S B29-P 8		10.75	2.60	7.30
52	漬戸焼	碗	II-1区	S B29-P 7		12.80	2.95	
53	備前焼	壺	II-2区	P 01			3.80	
54	土製品	輪羽口	II-2区	P 04				
55	備前焼	擂鉢	II-2区	P 02		29.20	5.70	
56	土師器	皿	II-2区	P 05		10.00	2.45	6.40
57	備前焼	擂鉢	II-2区	P 06			4.00	
58	土師器	皿	II-2区	P 07		7.40	1.50	5.70
59	土師器	皿	II-2区	P 07		7.40	1.85	6.00
60	備前焼	甕	II-2区	P 08			5.50	
61	備前焼	擂鉢	II-1区	P 10		29.90	7.15	
62	備前焼	擂鉢	II-2区	P 08			6.10	
63	土師器	皿	II-2区	P 09		10.30	2.05	7.40
64	土製品	炉壁	II-2区	P 03				
65	土師器	皿	II-2区	P 12		9.60	1.90	5.40
66	備前焼	擂鉢	II-2区	P 13			4.40	
67	瓦質土器	壺	II-2区	P 14		28.70	3.80	
68	瓦質土器	壺	II-2区	P 15		26.80	4.30	
69	土師器	皿	II-2区	P 14		7.45	1.90	5.50
70	青磁	碗	II-2区	P 16			3.25	5.60
71	土師器	皿	II-2区	P 17		8.00	1.75	6.20
72	土師器	皿	II-2区	P 17		7.00	1.20	5.50
73	土師器	皿	II-2区	P 18		8.00	1.80	6.60
74	土師器	皿	II-2区	P 19		7.70	1.55	5.70
75	土師器	皿	II-2区	P 18		11.70	2.50	7.40
76	土師器	皿	II-2区	P 21		9.90	2.20	
77	土師器	壺	II-2区	P 19			4.50	
78	備前焼	擂鉢	II-1区	P 22			5.90	11.40
79	備前焼 ?	壺	II-1区	P 23			2.10	5.40
80	土師器	皿	II-1区	P 24		9.70	2.40	5.90
81	土師器	皿	II-1区	P 25		11.40	2.40	
82	土師器	皿	II-1区	P 25		9.90	1.85	
83	土師器	皿	II-1区	P 26		8.60	1.40	5.70
84	土師器	皿	II-1区	P 28		8.70	1.45	6.40
85	備前焼	甕	II-1区	P 27			4.45	
86	瓦質土器	壺	II-1区	P 29			4.75	
87	土師器	椀	II-1区	P 32			2.10	6.00
88	備前焼	擂鉢	II-1区	P 33			6.00	
89	土師器	壺	II-1区	P 35			3.80	
90	備前焼	擂鉢	II-1区	P 30		30.60	6.15	
91	備前焼	擂鉢	II-1区	P 36		33.30	5.45	
92	瓦質土器	壺	II-1区	P 38		26.70	9.85	
93	土師器	皿	II-1区	P 37		11.45	2.55	8.05
94	備前焼	擂鉢	II-1区	P 39			5.35	
95	白磁	杯	II-1区	P 40				
96	青磁	碗	II-1区	P 40			2.10	
97	土師器	壺	II-1区	P 42			5.50	
98	土師器	皿	II-1区	P 43		10.90	1.85	8.30
99	土師器	皿	II-1区	P 44		11.70	2.40	8.50
100	瓦質土器	壺	II-1区	P 45		33.20	3.10	

残存状況	色調	底 部	備 考	図版	モノクロ 図版	カラー 図版
口縁部1/3・底部完存	にぶい黄橙	回転ヘラ切り		2	15	
口縁部わずか	オリーブ黄			2		15
口縁部わずか	灰			2		
一部	橙～灰黄褐			2	15	
口縁部1/8	にぶい橙～浅黄橙			2		
口縁部1/2・底部1/2	にぶい橙～橙	回転ヘラ切り		2	15	
口縁部わずか	暗赤灰			2		
口縁部1/4・底部1/3	橙	ヘラ切り		2		
口縁部1/9・底部1/4	橙	回転ヘラ切り		2		
口縁部わずか	暗赤褐			2		
口縁部わずか	黒褐～にぶい赤褐			2	16	
口縁部わずか	灰赤～にぶい褐			2		
口縁部1/9・底部1/4	橙	回転ヘラ切り		2		
一部						
口縁部1/7・底部わずか	橙～にぶい黄橙	回転ヘラ切り		2		
口縁部わずか	灰～暗灰			2		
口縁部1/9	灰白			2		
口縁部1/9	黄灰～灰白			2		
口縁部5/6	にぶい黄橙	回転糸切り		2		
底部1/8	明緑灰			2		19
口縁部2/3・底部3/4	浅黄橙	回転ヘラ切り		2	16	
口縁部1/4・底部1/3	橙	回転糸切り?		2		
口縁部1/3・底部5/8	橙	回転ヘラ切り		2		
口縁部1/6・底部1/4	にぶい黄橙～褐灰	回転ヘラ切り?		2		
口縁部1/7・底部1/10	にぶい黄橙～浅黄橙	回転ヘラ切り		2		
口縁部1/9	浅黄橙			2		
口縁部わずか	にぶい橙			2		
底部1/6・体部わずか	黄灰～灰			2		
底部1/2・体部わずか	褐灰～黄灰	回転糸切り		2		
体部1/5・底部3/4	橙	回転ヘラ切り		2		
口縁部1/6	浅黄橙			2		
口縁部1/8	浅黄橙～褐灰			2		
口縁部1/7・底部わずか	橙～にぶい黄	糸切り		2		
口縁部1/9・底部わずか	にぶい橙～浅黄橙	回転糸切り		2		
口縁部わずか	黄灰～褐灰			2	16	
口縁部わずか	灰～灰白			3		
底部1/6・体部わずか	にぶい橙	回転糸切り		3		
口縁部わずか	暗赤褐			3		
口縁部わずか	にぶい褐			3		
口縁部1/12	赤褐～黄灰			3		
口縁部1/8	暗赤褐			3		
口縁部～体部1/4	灰		燃し不十分	3	16	
口縁部1/10・底部3/4	褐灰～灰黄褐	回転ヘラ切り		3		
口縁部わずか	橙～浅黄橙			3		
口縁部わずか			14世紀・型押し	3		23
底部わずか	暗オリーブ～にぶい褐			3		
口縁部わずか	橙～褐灰			3		
口縁部1/10・底部わずか	にぶい橙			3		
口縁部1/7・底部1/6	橙～灰褐	ヘラ切り		3		
口縁部わずか	黄灰～灰		外面煤付着	3		

觀察表 3

No.	種別	器種	地区名	遺構名	出土層位・位置	法量(cm)		
						口径	器高	底徑
101	瓦質土器	壺	II-1区	P 50		26.80	3.25	
102	土師器	皿	II-1区	P 49		18.90	1.95	
103	土師器	皿	II-1区	P 47		7.80	1.60	5.85
104	土師器	皿	II-1区	P 48		9.40	1.15	
105	青磁	皿	II-1区	P 51		12.60	1.30	
106	備前焼	壺	II-1区	S B24-P 5		7.20	2.65	
107	土師器	皿	II-1区	P 52		7.90	1.60	5.80
108	土師器	皿	II-1区	P 53		11.50	2.25	7.90
109	瓦質土器	壺	II-1区	P 54		24.40	4.30	
110	土師器	皿	II-1区	P 55		7.40	1.05	6.00
111	土師器	皿	II-1区	P 56		8.05	1.30	6.80
112	土師器	壺	II-1区	P 57		41.40	5.60	
113	土師器	皿	II-1区	P 57		9.80	1.40	
114	土師器	皿	II-1区	P 58		7.20	1.15	6.10
115	土師器	皿	II-1区	P 59		7.70	1.30	6.00
116	土師器	皿	II-1区	P 60		7.60	1.45	5.40
117	土師器	皿	II-1区	P 60		12.10	2.30	9.40
118	漁戸焼	壺	II-1区	P 61			7.40	
119	常滑焼	甕	II-1区	P 62				
120	土師器	皿	II-1区	P 63		7.90	0.80	
121	備前焼	擂鉢	II-1区	S B30-P 3			12.30	
122	土師器	椀	II-1区	P 64		12.90	3.00	
123	土師器	椀	II-1区	P 64		11.80	2.85	
124	土師器	皿	II-1区	P 64		11.95	2.70	
125	土師器	皿	II-1区	P 64		7.80	1.30	5.80
126	青磁	皿	II-1区	P 64			1.75	4.00
127	唐津焼	皿	II-2区	S E01		12.80	2.90	5.25
128	唐津焼	碗	II-2区	S E01			2.00	4.40
129	備前焼	擂鉢	I区	S K01		32.70	4.00	
130	備前焼	擂鉢	II-2区	S K02		25.55	6.30	
131	備前焼	擂鉢	II-2区	S K03			6.90	
132	備前焼	甕	II-2区	S K05			10.20	46.70
133	土師器	皿	II-2区	S K06			10.90	2.60
134	土師器	皿	II-2区	S K06			10.40	2.55
135	土師器	皿	II-2区	S K06			9.90	2.75
136	土師器	皿	II-2区	S K06			7.70	1.80
137	土師器	皿	II-2区	S K06			7.35	1.65
138	土師器	皿	II-2区	S K06			7.25	1.65
139	土師器	皿	II-2区	S K06			7.05	1.55
140	土師器	皿	II-2区	S K06			6.75	1.85
141	土師器	皿	II-2区	S K06			6.90	1.75
142	青磁	盤	II-2区	S K06			22.90	3.80
143	備前焼	壺	II-2区	S K06			28.20	9.20
144	土師器	壺	II-2区	S K06			32.80	5.90
145	土師器	壺	II-2区	S K06			30.15	12.85
146	備前焼	擂鉢	II-2区	S K06			25.90	10.50
147	備前焼	擂鉢	II-2区	S K06			24.10	10.85
148	備前焼	擂鉢	II-2区	S K06				7.05
149	土師器	皿	II-1区	S K07			9.80	2.50
150	土師器	皿	II-1区	S K07			7.20	1.70

残存状況	色調	底 部	備 考	図版	モノクロ 図版	カラー 図版
口縁部わずか	灰～暗灰		鈎幅9mm・焼し不十分	3		
口縁部1/5	にぶい黄橙～灰黄褐			3		
口縁部5/6・底部完存	にぶい橙	回転ヘラ切り		3	16	
口縁部1/7	にぶい黄橙～褐灰			3		
口縁部1/9	灰			3		19
口縁部1/4	にぶい橙～灰オーリーブ			3		
口縁部1/9・底部わずか	にぶい橙			3		
口縁部1/7・底部1/8	にぶい黄橙	回転糸切り		3		
口縁部わずか	灰白～暗灰黄		焼し不十分	3		
口縁部～底部1/4	にぶい黄橙～にぶい橙	回転糸切り		3		
口縁部1/4・底部1/3	にぶい黄橙	静止糸切り		3		
口縁部わずか	にぶい橙			3		
口縁部1/4	橙～にぶい黄橙			3		
口縁部～底部1/3	にぶい橙	回転ヘラ切り		3		
口縁部～底部1/5	にぶい橙	回転ヘラ切り		3		
口縁部～底部わずか	橙	回転ヘラ切り		3		
口縁部1/7・底部1/4	灰白～黄灰	回転ヘラ切り		3		
肩部1/7	灰白			3		15
体部わずか					17	
口縁部1/12・底部1/8	にぶい橙	手づくね		3		
口縁部～底部わずか	にぶい橙～褐灰			3		
口縁部1/6	橙	ヘラ切り？		4	17	
口縁部1/5	にぶい黄橙			4	17	
口縁部1/7	橙	回転ヘラ切り		4		
口縁部1/9・底部1/4	橙～にぶい黄橙	回転糸切り		4		
底部1/2	灰白	回転糸切り		4		23
口縁部1/9・底部1/3	灰オーリーブ～にぶい橙			4		16
底部1/3弱	灰黄～灰白			4		16
口縁部わずか	黒褐～灰赤			4		
口縁部1/9	褐灰			4		
口縁部わずか	橙			4		
底部1/4	にぶい褐～褐			4	18	
口縁部1/4・底部1/3	にぶい橙～浅黄橙	回転ヘラ切り？		4	18	
口縁部1/4・底部1/3	にぶい橙～橙	回転ヘラ切り		4		
口縁部1/4・底部わずか	にぶい橙～にぶい黄橙	回転ヘラ切り		4		
ほぼ完存	橙～にぶい橙	回転ヘラ切り		4	18	
口縁部～底部1/2	橙	回転ヘラ切り		4		
ほぼ完存	黄橙	回転ヘラ切り		4	18	
ほぼ完存	橙	回転ヘラ切り		4	17	
口縁部1/2・底部5/6	橙	回転ヘラ切り		4	17	
口縁部1/4・底部完存	にぶい黄橙～浅黄橙	回転ヘラ切り		4		
口縁部1/5	灰オーリーブ			4		19
口縁部1/7	黒褐～灰褐			4	17	
口縁部1/7	橙～灰黄褐			4	18	
口縁部1/2弱・底部1/6	にぶい橙～褐灰			4		
口縁部1/3・底部わずか	にぶい赤褐～灰赤			4	18	
口縁部1/7・底部1/10	赤褐～にぶい赤褐			4		
底部1/5	灰白～にぶい赤褐			5		
1/2	にぶい橙～橙	回転ヘラ切り		5	18	
ほぼ完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転ヘラ切り		5	17	

觀察表 4

No.	種別	器種	地区名	遺構名	出土層位・位置	法量(cm)		
						口径	器高	底徑
151	土師器	皿	II-1区	S K07		7.05	1.65	4.20
152	土師器	皿	II-1区	S K07		7.30	1.70	4.60
153	土師器	皿	II-1区	S K07		7.00	1.45	5.00
154	土師器	皿	II-1区	S K08		8.10	1.40	6.05
155	土師器	皿	II-2区	S D02		11.80	2.60	8.50
156	土師器	皿	II-2区	S D02		11.45	2.05	8.40
157	土師器	皿	II-2区	S D02		8.70	1.95	5.40
158	土師器	皿	II-2区	S D02		8.60	1.30	7.00
159	土師器	皿	II-2区	S D02		7.50	1.55	4.90
160	土師器	壺	II-2区	S D02		27.20	4.10	
161	須恵器	搗鉢	II-2区	S D02		24.40	4.30	
162	瓦質土器	壺	II-2区	S D02		26.80	5.05	
163	瓦質土器	壺	II-2区	S D02		21.60	2.90	
164	瓦質土器	鉢	II-2区	S D02		26.00	4.30	
165	瓦質土器	蓋	II-2区	S D02		14.60	2.30	
166	青磁	碗	II-2区	S D02		11.50	2.40	
167	白磁	杯	II-2区	S D02			2.05	
168	備前焼	甕	II-2区	S D02		37.50	5.65	
169	備前焼	甕	II-2区	S D02			4.85	
170	備前焼	搗鉢	II-2区	S D02		30.40	8.20	
171	備前焼	搗鉢	II-2区	S D02			11.25	
172	備前焼	搗鉢	II-2区	S D02		25.50	9.05	
173	備前焼	搗鉢	II-2区	S D02		17.80	7.90	11.60
174	土師器	椀	II-1区	旧河道		12.05	3.75	5.90
175	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	12.00	3.60	6.20
176	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	12.00	3.70	5.90
177	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	12.00	4.05	5.70
178	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.95	3.75	5.95
179	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.85	3.50	6.40
180	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.85	3.50	6.15
181	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.85	3.30	6.00
182	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.80	3.70	6.15
183	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.80	3.90	6.40
184	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.80	3.60	5.40
185	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.80	3.95	6.75
186	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.75	3.55	6.05
187	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層	11.75	3.45	6.10
188	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.75	3.45	6.05
189	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.70	3.60	5.50
190	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.70	3.70	5.80
191	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.70	3.55	5.80
192	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.70	3.25	5.75
193	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.70	3.80	6.00
194	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.70	3.65	5.65
195	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.65	3.60	5.65
196	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.65	3.50	5.70
197	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.65	3.85	6.30
198	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.60	3.45	5.65
199	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.60	3.35	5.60
200	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.60	3.50	6.50

残存状況	色調	底 部	備 考	図版	モノクロ 図版	カラー 図版
口縁部3/4・底部完存	橙～灰白	回転ヘラ切り		5	18	
口縁部1/3・底部1/6	にぶい橙	回転ヘラ切り		5	19	
口縁部～底部1/2	にぶい橙	回転ヘラ切り		5		
口縁部1/9・底部1/5	にぶい橙	回転ヘラ切り		5		
ほぼ完存	にぶい橙	回転ヘラ切り		5	19	
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙	回転ヘラ切り		5	19	
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙	回転ヘラ切り		5	19	
口縁部～底部1/7	にぶい橙	回転系切り?		5		
口縁部1/6・底部1/2	にぶい黄橙～にぶい橙	回転ヘラ切り		5		
口縁部わずか	にぶい橙～褐			5		
口縁部わずか	灰白～灰黄			5		
口縁部1/5	灰		鶴巾12cm	5		
口縁部1/8	灰		鶴巾1cm	5		
口縁部1/12	灰白		焼し不十分	5		
口縁部1/4	暗灰～灰白		焼し不十分	5	19	
口縁部わずか	灰白			5	20	
口縁部わずか	灰白		中国四都窯産	5		23
口縁部1/9	にぶい赤褐～黒褐			5		
口縁部わずか	灰白～灰褐			5	19	
口縁部1/8	灰褐～赤褐			5		
口縁部わずか	褐灰～にぶい赤褐			5		
口縁部1/9	灰～暗褐			5		
口縁部1/6・底部1/4	灰褐～灰			5		
口縁部6/7・底部完存	にぶい橙	回転系切り		6		
ほぼ完存	にぶい黄橙～灰黄	回転系切り		6	19	
口縁部1/2	にぶい黄橙～灰白	回転系切り		6	19	
口縁部1/2・底部2/3	にぶい黄橙～灰白	回転系切り		6		
口縁部1/2・底部ほぼ完存	にぶい黄橙	回転系切り		6		
3/4	にぶい橙～にぶい黄橙	回転系切り		6		
口縁部1/2・底部完存	浅黄橙	回転系切り		6		
口縁部1/3・底部1/2	にぶい橙	回転系切り		6		
ほぼ完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転系切り		6	19	
1/2	橙～にぶい橙	回転系切り		6		
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙	回転系切り		6		
口縁部1/4・底部完存	にぶい橙	回転系切り		6		
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転系切り		6	20	
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙	回転系切り		6		
口縁部4/5・底部完存	灰黄褐～にぶい橙	回転系切り		6		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転系切り		6	20	
口縁部ほぼ完存	にぶい橙	回転系切り		6		
口縁部1/3	にぶい橙	回転系切り		6		
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙～黄灰	回転系切り		6		
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転系切り		6		
口縁部2/3・底部完存	にぶい黄橙	回転系切り		6		
11/12	にぶい橙	回転系切り		6		
ほぼ完存	にぶい黄橙～橙	回転系切り		6	20	
口縁部1/2・底部完存	灰白	回転系切り		6		
口縁部2/3・底部完存	浅黄橙～にぶい橙	回転系切り		6		
口縁部1/3・底部完存	にぶい橙～浅黄橙	回転系切り		6		
ほぼ完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転系切り		6		

觀察表 5

No.	種別	器種	地区名	遺構名	出土層位・位置	法量(cm)		
						口径	器高	底徑
201	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.60	3.90	6.05
202	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.60	3.50	5.60
203	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.60	3.60	5.65
204	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.55	3.55	5.75
205	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.55	3.60	5.70
206	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.55	3.40	5.95
207	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.55	3.85	6.00
208	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.55	3.55	5.45
209	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.50	3.40	6.05
210	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.50	3.55	5.50
211	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.50	3.80	5.75
212	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.50	3.70	5.80
213	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.50	3.55	5.30
214	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.45	3.45	6.15
215	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.45	3.50	5.80
216	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.45	3.60	6.15
217	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.45	3.70	5.50
218	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.45	3.40	5.90
219	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.45	3.15	5.95
220	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.45	3.15	5.90
221	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.40	3.20	6.10
222	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層	11.75	3.20	6.15
223	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.60	3.75	6.45
224	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.55	3.50	6.60
225	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.55	3.35	6.15
226	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.40	3.20	5.95
227	土師器	椀	II-1区	旧河道	護岸施設下層	11.40	3.50	5.80
228	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.40	3.40	5.30
229	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.40	3.40	7.15
230	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.35	3.50	5.35
231	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.35	3.35	5.80
232	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.35	3.55	5.95
233	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.30	3.45	5.65
234	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.30	3.60	6.20
235	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.30	3.60	5.65
236	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.30	3.75	5.75
237	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.30	3.25	5.30
238	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.30	3.75	5.70
239	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.25	3.45	5.95
240	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.25	3.80	5.70
241	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.20	3.65	5.35
242	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.20	3.25	5.90
243	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.15	3.65	6.35
244	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.15	3.55	5.55
245	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.50	5.75	5.80
246	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.15	3.20	5.40
247	土師器	椀	II-1区	旧河道		10.80	3.45	6.10
248	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.80	3.80	5.20
249	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	12.90	3.00	8.25
250	土師器	椀	II-1区	旧河道		12.40	3.10	7.65

残存状況	色 調	底 部	備 考	図版	モノクロ 図版	カラー 図版
口縁部1/4・底部完存	浅黄橙～にぶい橙	回転糸切り		6		
口縁部1/2・底部2/3	浅黄橙～にぶい橙	回転糸切り		6		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転糸切り		6		
口縁部1/2・底部2/3	にぶい黄橙	回転糸切り		6		
口縁部2/3・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		6		
口縁部2/3・底部完存	浅黄橙～にぶい橙	回転糸切り		6		
口縁部1/2・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		6		
口縁部1/2・底部1/4	にぶい黄橙	回転糸切り		6		
3/4	にぶい橙～灰	回転糸切り		6	20	
口縁部～底部1/2	にぶい橙～浅黄橙	回転糸切り		6		
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		6		
口縁部1/3・底部5/6	浅黄橙～にぶい橙	回転糸切り		6		
ほぼ完存	にぶい橙	回転糸切り		6		
口縁部1/2・底部3/4	橙～にぶい橙	回転糸切り		6		
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙～浅黄橙	回転糸切り		6		
口縁部2/3・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		6	21	
口縁部6/7・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		6		
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙～浅黄橙	回転糸切り		6		
口縁部2/3・底部完存	浅黄橙～にぶい橙	回転糸切り		6	21	
口縁部2/3・底部5/6	灰黄褐～にぶい橙	回転糸切り		6		
口縁部5/6・底部7/8	灰白～灰黄褐	回転糸切り		6	20	
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り		6	21	
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転糸切り		6	21	
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		6	22	
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		6	22	
ほぼ完存	浅黄橙～にぶい橙	回転糸切り		7		
ほぼ完存	にぶい黄橙～浅黄橙	回転糸切り		7		
口縁部1/2	浅黄橙～灰白	回転糸切り		7		
ほぼ完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り		7	22	
口縁部1/2・底部ほぼ完存	浅黄橙～にぶい橙	回転糸切り		7		
口縁部1/2・底部3/4	にぶい橙	回転糸切り		7		
完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り		7		
口縁部3/4・底部完存	浅黄橙～にぶい黄橙	回転糸切り		7		
口縁部1/2・底部3/4	にぶい橙～灰黄	回転糸切り		7		
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙～灰白	回転糸切り		7		
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		7		
口縁部2/3・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		7		
口縁部1/2・底部完存	浅黄橙～橙	回転糸切り		7	23	
口縁部1/2・底部ほぼ完存	にぶい黄橙	回転糸切り		7		
口縁部1/2・底部ほぼ完存	にぶい橙～褐灰	回転糸切り		7		
ほぼ完存	浅黄橙	回転糸切り		7	22	
口縁部5/6・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		7	23	
ほぼ完存	浅黄橙～灰黄	回転糸切り		7	23	
口縁部6/7・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		7		
3/4	浅黄橙	回転糸切り		7	23	
口縁部1/3・底部完存	にぶい黄橙～浅黄橙	回転糸切り		7	23	
口縁部1/2・底部4/5	灰白	回転糸切り		7		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転糸切り	回転ヘラ切り	7	24	
口縁部1/2弱	にぶい橙～灰黄橙	ヘラ切り		7		
口縁部2/3・底部完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転ヘラ切り		7		

觀察表 6

No.	種別	器種	地区名	遺構名	出土層位・位置	法量(cm)		
						口径	器高	底徑
251	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	12.25	3.05	9.40
252	土師器	椀	II-1区	旧河道		12.10	3.30	9.20
253	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	12.10	3.30	9.05
254	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	12.05	3.10	9.10
255	土師器	椀	II-1区	旧河道		12.05	3.00	8.25
256	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	12.00	3.40	9.20
257	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.90	2.90	8.60
258	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.70	3.00	8.75
259	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.60	3.15	8.40
260	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.40	2.95	8.60
261	土師器	椀	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	11.40	3.70	6.20
262	土師器	椀	II-1区	旧河道	護岸施設下層	12.20	3.20	7.10
263	土師器	椀	II-1区	旧河道	護岸施設下層	11.80	3.70	8.60
264	土師器	椀	II-1区	旧河道		12.00	3.55	5.30
265	土師器	椀	II-1区	旧河道		11.70	3.45	6.00
266	土師器	椀	II-1区	旧河道			1.30	7.80
267	土師器	皿	II-1区	旧河道		15.20	2.70	
268	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.50	1.95	5.65
269	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.50	1.60	6.85
270	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.35	2.20	5.50
271	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.35	1.95	5.80
272	土師器	皿	II-1区	旧河道	W11下層	8.30	1.40	6.80
273	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.25	2.20	5.30
274	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.25	2.05	5.95
275	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.25	2.00	5.70
276	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.25	2.00	5.20
277	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.25	1.90	5.55
278	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.20	1.95	5.35
279	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.20	2.00	5.85
280	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.20	2.00	5.00
281	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.15	1.95	5.45
282	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.10	2.10	5.75
283	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.10	1.80	4.85
284	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.10	2.25	5.45
285	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.10	2.15	5.20
286	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.10	1.95	5.45
287	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.10	2.05	5.95
288	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.05	2.10	5.25
289	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.05	2.10	5.45
290	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.05	1.95	5.50
291	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.05	2.15	5.40
292	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.20	2.50	5.40
293	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.05	1.75	5.85
294	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.00	2.00	5.45
295	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.00	1.80	5.70
296	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.00	2.15	5.50
297	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.00	1.85	5.55
298	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層	8.00	2.00	5.15
299	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.00	1.95	5.20
300	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.00	1.60	5.50

残存状況	色調	底 部	備 考	図版	モノクロ 図版	カラー 図版
口縁部1/4・底部ほぼ完存	にぶい橙	回転ヘラ切り		7	24	
口縁部1/4・底部3/4	にぶい橙	回転ヘラ切り		7		
口縁部3/4・底部完存	橙～にぶい黄橙	回転ヘラ切り		7	24	
口縁部5/6・底部完存	にぶい橙～橙	回転ヘラ切り		7	25	
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙～橙	回転ヘラ切り		7	24	
口縁部1/2・底部3/4	にぶい橙～黄灰	回転ヘラ切り		7		
口縁部1/3・底部5/6	浅黄橙～にぶい黄橙	回転ヘラ切り		7		
完存	にぶい橙～橙	回転ヘラ切り		7	25	
口縁部1/3・底部5/6	灰白～黄灰	回転ヘラ切り		7	25	
ほぼ完存	橙	回転ヘラ切り		7		
口縁部5/8・底部完存	にぶい黄橙	回転ヘラ切り		7		
ほぼ完存	にぶい褐～にぶい橙	静止ヘラ切り		7		
口縁部3/4・底部完存	にぶい褐～にぶい黄橙	静止ヘラ切り		7		
ほぼ完存	にぶい黄橙	手づくね		7		
口縁部1/6・底部3/4	灰白	静止糸切り		7	26	
底部1/3弱	にぶい黄橙	ヘラ切り		7		
口縁部1/2・底部1/4	灰白	ヘラ削り		7	26	
完存	にぶい黄橙	回転糸切り		7		
完存	にぶい橙	回転糸切り		7	25	
ほぼ完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り		7		
完存	橙～にぶい橙	回転糸切り		7	26	
口縁部1/4・底部1/2	灰白	回転糸切り		7		
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		7		
口縁部5/6・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		7		
口縁部5/6・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		7		
口縁部3/4・底部完存	橙	回転糸切り		7		
口縁部5/6・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		7		
口縁部2/3・底部完存	にぶい橙～黄灰	回転糸切り		7	27	
口縁部1/5・底部ほぼ完存	にぶい橙	回転糸切り		7		
ほぼ完存	にぶい橙	回転糸切り		7		
口縁部1/2・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		7		
口縁部4/5・底部完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り		7		
ほぼ完存	にぶい橙	回転糸切り		7		
完存	にぶい橙	回転糸切り		7		
ほぼ完存	にぶい橙	回転糸切り		7		
口縁部4/5・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		7		
口縁部1/2・底部完存	浅黄橙～橙	回転糸切り		7		
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙～にぶい橙	回転糸切り		7		
ほぼ完存	橙～にぶい橙	回転糸切り		7		
口縁部1/4・底部6/7	にぶい橙	回転糸切り		7		
口縁部2/3・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		7		
ほぼ完存	にぶい橙	回転糸切り		7	27	
完存	橙	回転糸切り		8		
完存	にぶい橙	回転糸切り		8	27	
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部2/3・底部完存	橙	回転糸切り		8		
口縁部4/5・底部完存	にぶい黄橙～にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部2/3・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		8		
完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8	27	
ほぼ完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り	口縁部外面煤付着	8		

觀察表 7

No.	種別	器種	地区名	遺構名	出土層位・位置	法量(cm)		
						口径	器高	底徑
301	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.00	2.10	5.40
302	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.00	1.95	5.60
303	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.00	2.25	5.30
304	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.00	2.00	5.50
305	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.00	2.30	5.10
306	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.00	2.10	5.00
307	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.00	1.40	5.40
308	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.95	1.70	5.25
309	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.95	2.00	5.95
310	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.95	1.90	5.45
311	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.95	1.90	5.40
312	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.95	2.30	5.55
313	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.95	1.95	6.00
314	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.95	2.35	5.55
315	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.95	1.85	5.20
316	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.95	1.95	5.55
317	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層	7.90	2.10	4.85
318	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層	7.90	2.00	5.55
319	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.90	2.10	5.25
320	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.90	1.75	5.20
321	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.90	2.10	5.55
322	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.85	2.00	5.90
323	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.85	1.95	5.60
324	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.85	2.00	5.50
325	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.85	1.95	5.35
326	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.85	1.60	5.75
327	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.85	2.05	5.50
328	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.85	2.10	4.95
329	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.80	2.35	5.25
330	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層	7.80	2.15	5.40
331	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.80	2.10	5.80
332	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.80	1.70	5.70
333	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.80	2.20	4.60
334	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.80	1.85	5.60
335	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.80	2.00	5.80
336	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.80	2.10	5.50
337	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.80	1.65	6.00
338	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.80	2.30	5.60
339	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.80	1.80	5.90
340	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.80	2.10	5.55
341	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.75	2.10	5.20
342	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.75	1.90	5.35
343	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.75	1.80	5.80
344	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.75	2.00	5.35
345	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.75	2.05	5.35
346	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.75	2.05	5.60
347	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.75	2.00	5.50
348	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.75	2.00	4.95
349	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.75	1.80	5.75
350	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.70	2.00	5.20

残存状況	色調	底 部	備 考	図版	モノクロ 図版	カラー 図版
ほぼ完存	にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部1/3	にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙～にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部5/6・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
ほぼ完存	にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部4/5・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		8		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部6/7・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部4/5・底部完存	にぶい橙～灰白	回転糸切り		8		
口縁部4/5・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		8		
ほぼ完存	にぶい橙～浅黄橙	回転糸切り		8		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部7/8・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8	26	
口縁部4/5・底部ほぼ完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部1/2・底部完存	灰黄褐色～にぶい黄橙	回転糸切り		8		
ほぼ完存	にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部1/2・底部完存	灰白	回転糸切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部1/2・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8	28	
口縁部2/3・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部1/3・底部3/4	にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部1/5	にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部1/2・底部3/4	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部1/2・底部完存	灰黄	回転糸切り		8	28	
口縁部5/6・底部完存	にぶい黄橙～にぶい橙	回転糸切り		8	29	
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		8		
完存	にぶい橙	回転糸切り		8	28	
口縁部～底部1/2	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部2/3・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部2/3・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8	28	
口縁部6/7・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部2/3・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部7/8・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部5/6・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙～橙	回転糸切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部7/8・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部1/8・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部7/8・底部完存	橙	回転糸切り		8		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転糸切り		8		
ほぼ完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り		8		
口縁部2/3・底部完存	にぶい黄橙～にぶい橙	回転糸切り		8		
口縁部2/3・底部完存	にぶい黄橙～橙	回転糸切り		8		

觀察表 8

No.	種別	器種	地区名	遺構名	出土層位・位置	法量(cm)		
						口径	器高	底徑
351	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.70	190	5.30
352	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.70	190	5.25
353	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.70	200	5.40
354	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層	7.70	195	5.35
355	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.70	190	5.30
356	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.70	200	5.45
357	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.65	200	5.40
358	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.65	205	5.40
359	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.65	195	5.15
360	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.65	175	5.75
361	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.60	195	5.75
362	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.60	200	5.50
363	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.60	200	5.80
364	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.60	195	5.15
365	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.60	195	5.05
366	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.60	220	5.60
367	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.60	210	5.95
368	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.60	210	5.70
369	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.60	215	5.60
370	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.60	205	5.25
371	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.55	200	5.50
372	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層	7.55	195	5.30
373	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.55	210	5.40
374	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.55	170	5.60
375	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.50	170	5.30
376	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.50	180	5.60
377	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.45	175	5.00
378	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.05	200	5.50
379	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	8.00	215	5.70
380	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.00	215	5.75
381	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.90	175	5.85
382	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.85	195	6.10
383	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.45	210	5.00
384	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.45	180	5.55
385	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.45	205	5.30
386	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.45	185	5.40
387	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.45	200	5.25
388	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.45	185	5.80
389	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.45	175	5.80
390	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.45	210	5.15
391	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.40	180	5.30
392	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.40	190	5.00
393	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層	7.40	210	5.00
394	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.40	175	5.80
395	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.40	175	5.40
396	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.40	185	5.75
397	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.35	170	5.95
398	土師器	皿	II-1区	旧河道	護岸施設下層	7.35	205	4.70
399	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.35	180	5.80
400	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.35	215	4.50

残存状況	色調	底 部	備 考	図版	モノクロ 図版	カラー 図版
口縁部2/3・底部完存	にぶい橙	回転系切り		8		
完存	灰黄褐	回転系切り		8		
口縁部3/4・底部完存	橙	回転系切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙	回転系切り		8		
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙	回転系切り		8		
ほぼ完存	にぶい橙	回転系切り		8		
ほぼ完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転系切り		8		
口縁部4/5・底部完存	にぶい黄橙～浅黄橙	回転系切り		8		
口縁部1/4・底部完存	にぶい橙	回転系切り		8		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転系切り		8		
完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転系切り		8	29	
口縁部6/7・底部完存	にぶい黄橙～浅黄橙	回転系切り		8	29	
口縁部5/6・底部完存	にぶい黄橙	回転系切り		8		
口縁部2/3・底部完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転系切り		8		
口縁部2/3・底部完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転系切り		8		
口縁部1/2弱・底部3/4	橙～にぶい橙	回転系切り		8		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転系切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄橙	回転系切り		8		
ほぼ完存	にぶい橙～橙	回転系切り		8		
口縁部4/5・底部完存	にぶい黄橙	回転系切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙	回転系切り		8		
完存	にぶい橙	回転系切り		8	29	
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙	回転系切り		8		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転系切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙	回転系切り		8		
完存	橙	回転系切り		8	29	
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙	回転系切り		8		
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙	回転系切り		8		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転系切り		8	29	
口縁部6/7・底部完存	にぶい黄橙	回転系切り		8	30	
口縁部5/6・底部完存	にぶい黄橙	回転系切り		8		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転系切り		8	30	
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転系切り		8	30	
口縁部3/4・底部完存	浅黄橙～にぶい黄橙	回転系切り		9		
口縁部3/4強・底部ほぼ完存	にぶい黄橙	回転系切り		9		
完存	にぶい黄橙	回転系切り		9	30	
口縁部1/2強・底部完存	にぶい橙	回転系切り		9		
ほぼ完存	灰黄	回転系切り		9		
完存	浅黄橙	回転系切り		9		
ほぼ完存	にぶい橙	回転系切り		9		
口縁部3/4・底部完存	橙～浅黄橙	回転系切り		9		
口縁部1/2・底部完存	にぶい橙	回転系切り		9		
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙	回転系切り		9		
口縁部5/6・底部完存	にぶい橙	回転系切り		9		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転系切り		9		
完存	にぶい橙	回転系切り		9		
ほぼ完存	にぶい橙～浅黄橙	回転系切り		9		
口縁部3/4・底部ほぼ完存	にぶい黄橙	回転系切り		9		
口縁部1/2・底部完存	黄灰～にぶい橙	回転系切り		9		
口縁部4/5・底部完存	にぶい橙～浅黄橙	回転系切り		9		
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙	回転系切り		9		

觀察表 9

No.	種別	器種	地区名	遺構名	出土層位・位置	法量(cm)		
						口径	器高	底徑
401	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.35	2.15	4.70
402	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.35	2.00	5.05
403	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.35	1.80	4.85
404	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.35	1.95	5.15
405	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.30	1.80	4.80
406	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.30	2.20	5.40
407	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.30	1.95	5.00
408	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.30	1.75	5.55
409	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.30	2.00	5.50
410	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.30	1.70	5.30
411	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.30	2.00	5.20
412	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層	7.30	1.75	5.25
413	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.20	1.95	5.20
414	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.20	1.90	5.55
415	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層	7.20	2.10	5.15
416	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.20	1.85	5.35
417	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.20	1.40	6.10
418	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.15	1.85	5.25
419	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.15	2.00	5.35
420	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.10	1.90	5.25
421	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.05	1.80	5.20
422	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層	6.70	1.55	5.20
423	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.60	1.95	5.85
424	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.80	2.10	5.80
425	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.50	1.95	5.35
426	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.45	1.95	5.70
427	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.15	1.85	4.95
428	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.30	1.80	6.60
429	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.85	1.30	6.85
430	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.05	1.55	7.10
431	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層	8.00	1.85	7.70
432	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.80	1.60	7.30
433	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.80	1.50	6.70
434	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.75	1.60	7.60
435	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層	7.65	1.55	6.75
436	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.60	1.25	6.60
437	土師器	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	7.60	1.50	6.90
438	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.45	1.20	6.80
439	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.45	1.25	6.40
440	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.35	1.40	6.55
441	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.45	1.50	6.55
442	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.10	1.25	5.50
443	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.05	1.80	5.85
444	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.00	1.35	5.80
445	土師器	皿	II-1区	旧河道		8.00	1.50	6.10
446	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.90	1.60	5.65
447	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.75	1.75	5.70
448	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.75	1.45	6.25
449	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.75	1.80	5.30
450	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.70	1.40	5.90

残存状況	色 調	底 部	備 考	図版	モノクロ 図版	カーラー 図版
完存	橙～にぶい黄橙	回転糸切り		9		
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙～灰黄	回転糸切り		9		
完存	にぶい黄橙～浅黄橙	回転糸切り		9		
口縁部6/7・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		9		
ほぼ完存	にぶい橙～橙	回転糸切り		9	31	
口縁部1/5・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		9		
ほぼ完存	にぶい橙	回転糸切り		9		
口縁部2/3・底部完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り		9		
口縁部1/2・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		9		
ほぼ完存	にぶい橙～灰白	回転糸切り		9		
口縁部1/2・底部5/6	にぶい黄橙	回転糸切り		9		
口縁部1/3・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		9		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転糸切り		9		
完存	にぶい黄橙	回転糸切り		9		
口縁部1/3・底部完存	にぶい橙	回転糸切り		9	31	
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転糸切り		9		
口縁部1/3・底部1/2	せ	回転糸切り		9		
口縁部1/2・底部完存	にぶい黄橙～浅黄橙	回転糸切り		9		
口縁部2/3・底部完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り		9		
口縁部4/5・底部完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り	外面に煤付着	9		
口縁部1/2弱・底部完存	にぶい橙～橙	回転糸切り		9		
1/3	にぶい黄橙	回転糸切り		9		
ほぼ完存	にぶい橙～灰灰	回転糸切り		9	31	
口縁部7/8・底部完存	にぶい黄橙	回転糸切り		9		
口縁部3/4・底部完存	にぶい黄～灰灰	回転糸切り		9		
ほぼ完存	にぶい黄橙	回転糸切り		9	31	
ほぼ完存	にぶい橙～にぶい黄橙	回転糸切り	底部にヘラ記号	9	31	
口縁部1/2弱・底部完存	浅黄橙	回転糸切り 静止ヘラ切り		9	31	
口縁部1/2	にぶい黄橙	ヘラ切り		9	32	
口縁部1/2・底部3/4	橙～にぶい橙	回転ヘラ切り		9	32	
ほぼ完存	橙～にぶい橙	回転ヘラ切り		9	32	
1/2	にぶい赤橙～にぶい橙	回転ヘラ切り		9	32	
1/2弱	浅黄橙～にぶい黄橙	回転ヘラ切り		9	32	
口縁部5/6	にぶい橙	回転ヘラ切り		9	33	
口縁部1/3・底部3/4	橙	回転ヘラ切り		9	33	
1/5	灰黄～にぶい橙	回転ヘラ切り		9		
完存	にぶい橙	回転ヘラ切り	口縁部煤付着	9	33	
ほぼ完存	橙	回転ヘラ切り		9	33	
口縁部2/3・底部3/4	にぶい黄橙	回転ヘラ切り		9	34	
口縁部1/2・底部1/3	にぶい黄橙～黄灰	回転ヘラ切り		9		
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙～橙	回転ヘラ切り		9		
1/2	浅黄橙	回転ヘラ切り		9		
口縁部5/6・底部完存	にぶい橙	回転ヘラ切り		9	34	
ほぼ完存	浅黄橙～にぶい橙	回転ヘラ切り		9		
完存	にぶい橙	回転ヘラ切り		9	34	
口縁部3/4・底部完存	にぶい橙～浅黄橙	回転ヘラ切り		9		
ほぼ完存	にぶい橙	回転ヘラ切り		9	34	
ほぼ完存	にぶい橙～浅黄橙	回転ヘラ切り		9	35	
完存	橙～にぶい橙	回転ヘラ切り		9	35	
口縁部5/6・底部完存	にぶい橙	回転ヘラ切り		9	35	

觀察表10

No.	種別	器種	地区名	遺構名	出土層位・位置	法量(cm)		
						口径	器高	底徑
451	土師器	皿	II-1区	旧河道		9.20	1.60	7.50
452	土師器	皿	II-1区	旧河道		9.95	1.80	5.90
453	土師器	皿	II-1区	旧河道		9.30	1.80	5.75
454	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.45	1.90	4.75
455	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.25	1.45	4.80
456	土師器	皿	II-1区	旧河道		7.90	1.10	
457	土師器	壺	II-1区	旧河道		32.60	5.85	
458	土師器	壺	II-1区	旧河道		25.00	3.80	
459	土師器	壺	II-1区	旧河道		25.30	5.50	
460	土師器	壺	II-1区	旧河道		27.30	6.30	
461	土師器	壺	II-1区	旧河道		34.30	5.05	
462	土師器	壺	II-1区	旧河道		27.80	8.10	
463	土師器	壺	II-1区	旧河道		20.90	9.05	
464	土師器	壺	II-1区	旧河道			3.95	
465	土師器	羽釜	II-1区	旧河道			3.60	
466	土師器	鉢	II-1区	旧河道		31.50	3.75	
467	須恵器	捏鉢	II-1区	旧河道		30.80	4.80	
468	須恵器	捏鉢	II-1区	旧河道		29.00	7.05	
469	須恵器	捏鉢	II-1区	旧河道		26.40	7.35	
470	須恵器	捏鉢	II-1区	旧河道		27.20	7.30	
471	須恵器	捏鉢	II-1区	旧河道			8.85	10.80
472	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		47.20	6.45	
473	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		32.90	3.10	
474	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		33.80	5.35	
475	瓦質土器	鉢	II-1区	旧河道		22.50	4.65	
476	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		31.00	10.80	
477	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		25.60	3.70	
478	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		38.60	5.65	
479	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		26.10	5.30	
480	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		25.20	6.80	
481	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		26.30	4.95	
482	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		27.50	5.05	30.80
483	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		34.40	7.20	
484	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		33.20	4.75	
485	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		30.80	4.50	
486	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		25.50	3.75	
487	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		29.80	6.10	
488	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		24.70	3.40	
489	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		35.20	5.40	
490	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	33.10	5.50	
491	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		31.90	6.35	
492	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		22.50	10.00	
493	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		26.20	10.00	
494	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		27.90	10.35	
495	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道	最下層一括土器群	26.75	13.90	
496	瓦質土器	壺	II-1区	旧河道		12.30	4.65	
497	瓦質土器	鉢	II-1区	旧河道		31.80	6.65	
498	瓦質土器	火鉢	II-1区	旧河道		51.90	10.90	
499	瓦質土器	火鉢	II-1区	旧河道		34.60	9.65	
500	瓦質土器	火鉢	II-1区	旧河道	北側護岸施設下層	11.70	24.70	

残存状況	色 調	底 部	備 考	図版	モノクロ 図版	カラー 図版
1/3	浅黄橙～にぶい黄橙	回転ヘラ切り		9		
1/2	浅黄橙	ヘラ切り		9	36	
口縁部2/3・底部完存	橙	ヘラ切り		9	35	
口縁部3/4・底部完存	橙～にぶい橙	回転ヘラ切り		9	36	
口縁部1/3・底部1/5	橙～灰白	ヘラ切り		9		
口縁部1/3	浅黄橙	ユビオサエ		9		
口縁部1/10	にぶい黄橙～にぶい褐			9		
口縁部1/11	橙～にぶい橙			9	36	
口縁部わずか	灰黄褐		外面煤付着	9		
口縁部1/7	にぶい橙～橙			9	36	
口縁部わずか	橙～にぶい橙			10		
口縁部1/8	にぶい黄褐～橙		体部外面煤付着	10	36	
口縁部1/4	灰黄褐～浅黄		外面煤付着	10		
口縁部わずか	浅黄		口縁部外面煤付着	10		
口縁部わずか	浅黄～暗灰黄		口縁部内外面煤付着	10		
口縁部わずか	灰白～橙			10		
口縁部わずか	灰			10		
口縁部1/4	灰白～オリーブ黒			10		
口縁部1/5	灰			10		
口縁部1/3	灰～暗灰			10	36	
底部1/4	灰	回転糸切り		10		
口縁部～体部わずか	灰			10		
口縁部1/10	暗灰～灰		口縁部外面煤付着	10		
口縁部わずか	灰			10		
口縁部1/10	灰～黒		外面煤付着	10		
口縁部～体部1/12	黒～暗灰		鈍以下外面煤付着	10		
口縁部1/8	灰～黄灰		体部外面煤付着	10		
口縁部1/8	灰		鈍～体部外面煤付着	11		
鈍1/8・口縁部わずか	灰～灰白		外面に煤付着	11		
口縁部1/6鈍	暗灰～灰			11		
口縁部1/12・鈍1/8	灰		鈍～体部外面煤付着	11		
口縁部1/3	黒		鈍～体部外面煤付着	11		
口縁部～体部わずか	灰		鈍～体部外面煤付着	11		
口縁部1/9	黒～灰		鈍以下外面煤付着	11		
口縁部1/10	黒～暗灰黄		鈍以下外面煤付着	11		
口縁部1/12	灰白			11		
口縁部1/8	暗灰～黒		鈍以下外面煤付着	11		
口縁部1/7	黒～暗灰			11		
口縁部1/12	黒～灰		鈍以下外面煤付着	11		
口縁部1/8	暗灰～黒		鈍以下外面煤付着	11		
口縁部1/4・体部わずか	黒～灰白			11	36	
				11	37	
口縁部1/7・体部1/12	黒～灰		鈍以下外面煤付着	12		
口縁部1/12・体部1/4	灰～黒		鈍以下外面煤付着	12		
口縁部5/6・底部2/3	黒～暗灰		鈍以下外面煤付着	12	37	
口縁部1/12	暗灰		頸部径13cm	12		
口縁部～体部1/12	灰			12		
口縁部1/10	暗灰～灰白			12	37	
口縁部～体部わずか	暗灰～灰白			12	37	
体部1/6・底部1/3	黒～暗灰	3脚	極不十分(部分的)	12	37	

觀察表11

No.	種別	器種	地区名	遺構名	出土層位・位置	法量(cm)		
						口径	器高	底徑
501	瓦質土器	火鉢	II-1区	旧河道			14.60	
502	瓦質土器	風炉	II-1区	旧河道		28.10	8.80	
503	瓦質土器	風炉	II-1区	旧河道		29.00	7.10	
504	瓦質土器	風炉	II-1区	旧河道			6.30	24.20
505	備前焼	壺	II-1区	旧河道		17.40	4.85	
506	備前焼	壺	II-1区	旧河道		12.70	22.40	
507	備前焼	壺	II-1区	旧河道		23.30	9.85	
508	備前焼	壺	II-1区	旧河道			10.60	
509	備前焼	壺	II-1区	旧河道			10.45	11.30
510	備前焼	壺	II-1区	旧河道		13.30	6.45	
511	備前焼	壺	II-1区	旧河道		10.50	3.70	
512	備前焼	壺	II-1区	旧河道			7.00	7.00
513	備前焼	壺	II-1区	旧河道		7.60	4.55	
514	備前焼	壺	II-1区	旧河道			5.60	5.80
515	備前焼	壺	II-1区	旧河道				
516	備前焼	甕	II-1区	旧河道		27.75	4.45	
517	備前焼	甕	II-1区	旧河道			3.65	
518	備前焼	甕	II-1区	旧河道			2.70	
519	備前焼	甕	II-1区	旧河道		47.70	9.20	
520	備前焼	甕	II-1区	旧河道		47.00	7.10	
521	備前焼	甕	II-1区	旧河道		39.70	7.35	
522	備前焼	甕	II-1区	旧河道		39.80	4.85	
523	備前焼	甕	II-1区	旧河道			5.75	
524	備前焼	甕	II-1区	旧河道			8.80	
525	備前焼	甕	II-1区	旧河道		54.30	10.95	
526	備前焼	甕	II-1区	旧河道		50.10	12.65	
527	備前焼	甕	II-1区	旧河道		48.50	14.00	
528	備前焼	甕	II-1区	旧河道		38.80	16.60	
529	備前焼	甕	II-1区	旧河道	最下層	44.20	8.35	
530	備前焼	甕	II-1区	旧河道		37.80	10.35	
531	備前焼	甕	II-1区	旧河道		30.20	4.95	
532	備前焼	甕	II-1区	旧河道		62.50	9.05	
533	備前焼	甕	II-1区	旧河道	最下層		68.80	47.10
534	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		33.10	14.45	12.80
535	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		33.70	5.05	
536	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		32.40	4.85	
537	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		31.80	3.50	
538	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		29.50	7.55	
539	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		30.80	11.60	17.20
540	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道	北側護岸施設下層	28.60	6.00	
541	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		28.80	7.85	
542	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		27.60	6.85	
543	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		27.70	8.50	
544	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		25.00	9.70	
545	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		30.00	11.50	
546	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道	北側護岸施設下層	29.00	10.65	11.50
547	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		29.90	10.35	12.90
548	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		27.40	9.25	13.80
549	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		29.00	12.35	15.90
550	備前焼	擂鉢	II-1区	旧河道		30.00	7.75	

残存状況	色調	底 部	備 考	図版	モノクロ 図版	カラー 図版
隅部わずか	灰白～暗灰			12		
口縁部わずか・肩部1/12	暗灰～灰白			12	37	
口縁部～肩部1/4	灰～灰白			13	37	
底部1/4	灰～暗灰			13	38	
口縁部1/6	灰白～黒			13	38	
口縁部1/5～体部1/8	黒褐			13	38	
口縁部～肩部1/12	灰～黄灰			13	38	
肩部1/5・体部1/12	灰～黒			13	39	
体部1/12・底部1/8	黒褐～にぶい赤褐	ヘラ切り		13		
口縁部1/2強	黒褐～にぶい黄褐			13	39	
口縁部1/4	暗赤褐			13	39	
体部1/4・底部わずか	灰褐～暗灰黄			13		
口縁部1/6	暗灰黄～黄灰			13	39	
体部～底部1/4	灰褐～にぶい赤褐			13		
体部わずか	灰黄褐～赤灰			13		
口縁部1/12	灰白			13		
口縁部わずか	灰～オリーブ黒			13	39	
口縁部わずか	暗赤褐～灰白			13	39	
口縁部1/6	灰白～褐灰			13	40	
口縁部1/12	灰白～褐灰			13		
口縁部1/10	黒褐～灰黄褐			14	40	
口縁部1/10	灰白			14		
口縁部わずか	暗赤褐～灰白			14	40	
口縁部～肩部わずか	灰			14		
口縁部わずか・肩部1/8	灰褐			14		
口縁部～肩部1/12	灰褐～にぶい赤褐			14		
口縁部～肩部1/12	にぶい褐～灰褐			14		
口縁部1/3	黒褐～にぶい赤褐			14	40	
口縁部1/8	黒褐			15		
口縁部1/12・肩部1/5	にぶい赤褐～褐			15		
口縁部1/6	灰黄褐～にぶい黄褐			15		
口縁部～肩部わずか	灰オリーブ～黒褐			15		
体部1/4強・底部わずか	黒褐～灰褐			15		
1/4	黒褐～明赤褐			16	40	
口縁部1/10	褐灰～灰			16		
口縁部わずか	にぶい赤褐～灰白			16	41	
口縁部わずか	オリーブ黒			16		
口縁部1/9	にぶい褐～にぶい黄褐			16	41	
口縁部～底部1/4	にぶい黄褐～にぶい褐			16	40	
口縁部1/12	灰			16		
口縁部1/5	暗灰黄			16		
口縁部1/6	褐灰			16	41	
口縁部1/9	灰			16		
口縁部1/7	黄褐～褐灰			16		
口縁部～体部1/5・底部わずか	黒褐～灰褐			17	42	
口縁部～体部1/6・底部わずか	にぶい赤褐			17	42	
口縁部～体部1/7・底部わずか	にぶい赤褐～灰褐			17		
口縁部～体部1/7・底部1/5	明赤褐～にぶい赤褐			17		
1/5	オリーブ黒～褐			17	41	
口縁部～体部1/8	黒褐～灰黄褐			17	43	

觀察表12

No	種別	器種	地区名	遺構名	出土層位・位置	法量(cm)		
						口径	器高	底徑
551	備前燒	擂鉢	II-1区	旧河道		29.80	5.40	
552	備前燒	擂鉢	II-1区	旧河道		30.30	11.35	12.20
553	備前燒	擂鉢	II-1区	旧河道		29.70	9.70	18.40
554	備前燒	擂鉢	II-1区	旧河道		29.50	10.00	16.30
555	備前燒	擂鉢	II-1区	旧河道		29.80	10.90	15.20
556	備前燒	擂鉢	II-1区	旧河道		32.60	7.60	
557	備前燒	鉢	II-1区	旧河道		19.70	2.75	
558	備前燒	椀	II-1区	旧河道		9.20	3.50	4.90
559	備前燒	椀	II-1区	旧河道		9.10	2.75	5.50
560	備前燒似陶器	擂鉢	II-1区	旧河道		29.40	5.75	
561	備前燒似陶器	捏鉢	II-1区	旧河道		27.20	6.90	
562	瀬戸美濃	碗	II-1区	旧河道		11.90	3.45	
563	瀬戸美濃	壺	II-1区	旧河道		9.50	2.20	
564	瀬戸美濃	壺	II-1区	旧河道			5.00	
565	無軸陶器	碗	II-1区	旧河道		11.60	4.80	3.65
566	志野焼	碗	II-1区	旧河道		12.20	3.15	
567	唐津燒?	皿	II-1区	旧河道		11.80	2.20	
568	唐津燒	碗	II-1区	旧河道			1.30	4.05
569	備前燒似陶器	甕	II-1区	旧河道			6.45	
570	瓦器	椀	II-1区	旧河道		15.40	3.40	
571	中国製陶器	壺	II-1区	旧河道			3.75	7.55
572	灰釉陶器	洗	II-1区	旧河道		28.20	8.65	24.00
573	白磁	皿	II-1区	旧河道		10.10	1.50	
574	白磁	碗	II-1区	旧河道			2.50	6.30
575	白磁	碗	II-1区	旧河道		8.00	3.10	
576	白磁	皿	II-1区	旧河道	最下層一括土器群		0.90	5.50
577	青磁	碗	II-1区	旧河道		17.50	5.05	
578	青磁	碗	II-1区	旧河道		13.50	4.30	
579	青磁	碗	II-1区	旧河道		13.80	2.85	
580	青磁	碗	II-1区	旧河道		11.70	2.85	
581	青磁	碗	II-1区	旧河道		15.75	4.35	
582	青磁	碗	II-1区	旧河道		14.90	3.30	
583	青磁	皿	II-1区	旧河道		10.40	2.30	
584	青磁	碗	II-1区	旧河道		13.80	3.90	
585	青磁	碗	II-1区	旧河道		13.60	4.05	
586	青磁	碗	II-1区	旧河道		13.00	4.40	
587	青磁	碗	II-1区	旧河道			5.70	5.70
588	青磁	碗	II-1区	旧河道			2.70	6.30
589	青磁	碗	II-1区	旧河道			3.00	7.40
590	青磁	碗	II-1区	旧河道			2.30	
591	白磁	皿	II-1区	旧河道		10.90	3.65	5.30
592	青花	皿	II-1区	旧河道		9.30	1.80	
593	青磁	碗	II-1区	旧河道				
594	土師器	椀	II-1区	包含層		10.60	3.20	
595	土師器	皿	II-1区	包含層		12.00	2.25	7.85
596	土師器	皿	II-1区	包含層		8.05	1.95	5.95
597	土師器	皿	II-1区	包含層		7.70	1.85	5.65
598	土師器	皿	II-1区	包含層		7.00	1.60	6.00
599	土師器	壠	II-1区	包含層		29.00	5.60	
600	備前燒	椀	II-2区	包含層		11.20	2.60	5.50

残存状況	色 調	底 部	備 考	図版	モノクロ 図版	カラー 図版
口縁部1/9	褐色～灰黄褐色			17	42	
口縁部～体部1/7・底部わずか	にぶい褐色～灰黄褐色			17		
口縁部～体部1/5・底部1/8	にぶい赤褐色～赤灰			17	42	
口縁部1/4・底部わずか	赤褐色～にぶい赤褐色			17	43	
口縁部1/11	にぶい橙～にぶい赤橙			18		
口縁部1/5	にぶい赤褐色～灰黄褐色			18		
口縁部1/10	褐色～灰黄褐色			18		
口縁部～底部1/3	褐色～赤灰			18	43	
口縁部1/4・底部1/2	灰褐色～にぶい赤褐色	回転糸切り	見込みにヘラ記号	18	44	
口縁部1/12	灰黄			18		
口縁部1/7	褐色～にぶい黄褐色			18	43	
口縁部1/6	灰白色～にぶい橙			18		15
口縁部1/9	明オリーブ灰			18		15
体部1/4	灰白色～灰オリーブ			18		15
口縁部1/10・底部完存	灰白色～にぶい赤褐色	回転糸切り		18	44	
口縁部わずか	貴灰～暗貴灰			18		16
口縁部～体部1/9	明オリーブ灰			18		16
底部完存	灰白			18		16
口縁部わずか	灰			18	44	
口縁部1/11	灰白		炭素吸着不十分	18		
底部1/6	灰白～にぶい黄			18		25
口縁部1/5・体部1/2・底部1/4	にぶい赤褐色～黄灰	ヘラ切り	華南産	18		17
口縁部1/7	灰白～明オリーブ灰			18		24
底部1/4	灰白			18		24
口縁部1/9	灰白			18		24
底部1/2	灰白			18		24
口縁部1/10	暗オリーブ～灰オリーブ			18		21
口縁部1/9	オリーブ灰			18		21
口縁部1/9	灰白～オリーブ灰			18		21
口縁部1/18	灰白～明緑灰			18		21
口縁部1/11	明オリーブ灰			18		21
口縁部1/6	灰白～オリーブ灰			18		21
口縁部1/12	明オリーブ灰			18		21
口縁部1/9	灰白～灰オリーブ			18		21
口縁部1/9	オリーブ灰～灰白			18		21
口縁部1/12	オリーブ灰			18		21
底部～体部完存	灰白～オリーブ			18		18
底部2/3	明緑灰		焼成やや不良	18		21
底部1/4	灰～灰白			19		21
底部1/2	褐色～オリーブ灰			19		21
口縁部～底部1/9	灰白～明オリーブ灰			19		21
口縁部1/4弱	灰白			19		18
体部わずか						21
口縁部～底部1/4	にぶい黄橙～灰黄褐色	手づくね		19	44	
口縁部1/8・底部1/2	浅黄橙～にぶい橙	回転ヘラ切り		19	44	
口縁部3/4・底部5/6	にぶい橙～灰黄褐色	回転糸切り		19	45	
完存	にぶい橙～褐色	回転糸切り		19	45	
口縁部1/4・底部ほぼ完存	浅黄橙	回転ヘラ切り		19	45	
口縁部わずか	橙～にぶい橙		外面に煤付着	19		
口縁部1/4・底部1/10	にぶい赤褐色～赤黒	回転糸切り		19	45	

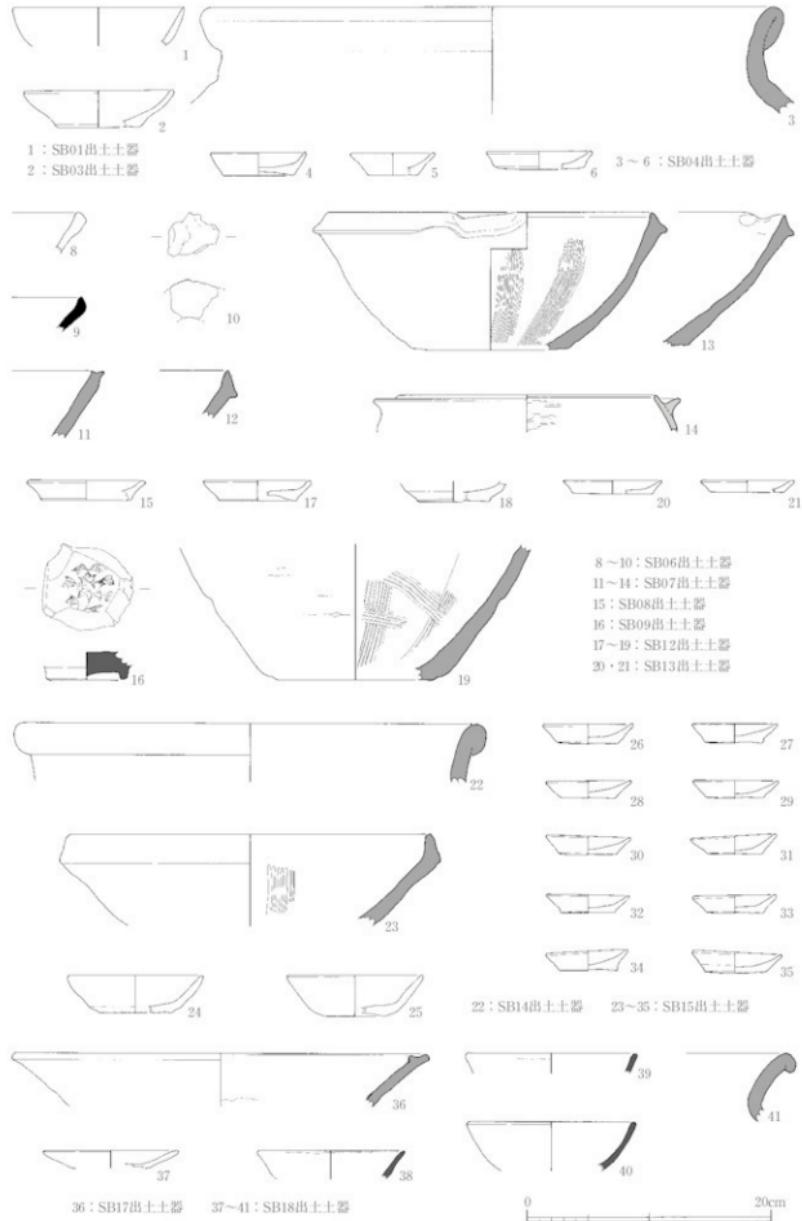
觀察表13

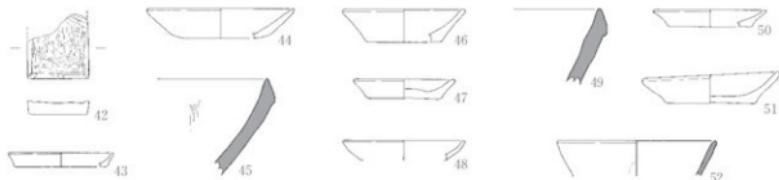
No	種別	器種	地區名	遺構名	出土層位・位置	法量(cm)		
						口径	器高	底徑
601	備前燒	壺	II-1区	包含層			2.40	5.70
602	備前燒	壺	II-2区	包含層		18.30	4.55	
603	備前燒	壺	II-2区	包含層			8.10	13.65
604	備前燒	壺	II-2区	包含層			3.65	
605	備前燒	甕	II-1区	包含層			6.45	
606	備前燒	擂鉢	II-1区	包含層		29.80	8.15	
607	備前燒？	擂鉢	II-1区	包含層		28.50	6.10	
608	備前燒	擂鉢	II-2区	包含層		33.30	6.65	
609	備前燒	擂鉢	II-1区	包含層		30.30	12.30	15.00
610	備前燒	擂鉢	II-1区	包含層		28.00	12.25	12.00
611	備前燒	擂鉢	II-1区	包含層			8.00	14.20
612	備前燒	擂鉢	II-1区	包含層				
613	趺軸陶器	外耳壺	II-2区	包含層				
614	白磁	皿	II-2区	包含層		15.70	2.75	
615	青磁	瓶	II-1区	包含層		2.40	3.70	
616	青磁	皿	II-1区	包含層		14.90	2.40	
617	青磁	盤	II-1区	包含層			2.90	
618	青磁	碗	II-1区	包含層		13.70	2.85	
619	青磁	碗	II-1区	包含層		14.20	3.95	
620	青磁	碗	II-1区	包含層		14.60	4.80	
621	青磁	碗	II-2区	包含層		14.50	3.50	
622	青磁	碗	II-1区	包含層		15.00	3.65	
623	白磁	碗	II-1区	包含層		14.40	3.70	
624	青磁	碗	II-1区	包含層			2.65	5.95
625	青磁	碗	II-1区	包含層			2.30	5.60
626	青磁	碗	II-1区	包含層			1.75	5.40
627	唐津	皿	II-1区	包含層				
628	須恵器	杯H	II-1区	基盤層		13.10	2.80	
629	須恵器	杯A	II-1区	基盤層		12.80	3.35	9.60
630	須恵器	杯B	II-2区	基盤層		14.60	3.90	11.80
631	土製品	土鍤	II-1区	旧河道				
632	土製品	土鍤	II-1区	旧河道				
633	土製品	土鍤	II-1区	旧河道				
634	土製品	土鍤	II-1区	旧河道				
635	土製品	土鍤	II-1区	旧河道				
636	土製品	土鍤	II-1区	旧河道				
637	石製品	石獅	II-1区	旧河道		19.40	4.00	

残存状況	色調	底 部	備 考	図版	モノクロ 図版	カラー 図版
底部1/3	灰褐色	回転糸切り		19		
口縁部1/12	にぶい赤褐色～にぶい橙			19	45	
底部1/4弱	灰～灰褐色			19		
体部1/4	灰黄褐色～褐色			19	45	
口縁部わずか	灰～灰白色			19	46	
口縁部1/7	灰～灰白			19		
口縁部1/9	黄灰			19		
口縁部わずか	灰赤			19		
口縁部1/5・底部わずか	灰赤			19		
口縁部1/4・底部1/3	灰～褐色			19	46	
底部1/8	灰～灰白	ナデ		19		
口縁部わずか	灰褐色～赤褐色			19		
耳部わずか	黒褐色～灰白			19	18	
口縁部1/7	明緑灰～灰白			19	23	
口縁部1/3～肩部1/5	灰オリーブ～灰白			19	20	
口縁部わずか	灰白～オリーブ灰			19	20	
体部わずか	灰白～オリーブ灰			19	20	
口縁部わずか	灰白～オリーブ灰			19	20	
口縁部1/10	灰白～オリーブ灰			20	20	
口縁部1/8	灰～灰白			20	20	
口縁部わずか	明緑灰～灰白			20	20	
口縁部わずか	灰～灰オリーブ			20	20	
口縁部わずか	灰白			20	20	
底部1/3	灰白～暗緑灰			20	20	
底部1/3	灰白～オリーブ灰			20	20	
底部1/3	灰白～オリーブ灰			20	20	
体部わずか						
口縁部1/9	黄灰～灰白			20		
口縁部1/4・底部1/3	灰白	回転ヘラ切り		20		
口縁部1/4・底部完存	灰～青灰			20	46	
完存	にぶい赤褐色			20	47	
完存	明褐色～にぶい橙			20	47	
ほぼ完存	黄灰			20	47	
完存	にぶい橙			20	47	
一部欠損	明赤褐色～にぶい黄橙			20	47	
一部欠損	にぶい赤褐色			20	47	
口縁部1/11				20	46	

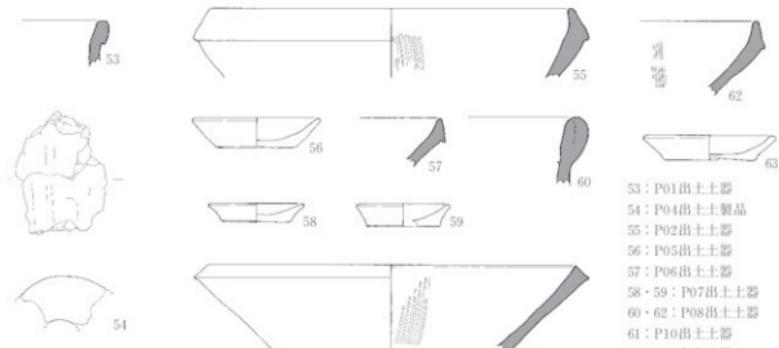
図 版

図版1

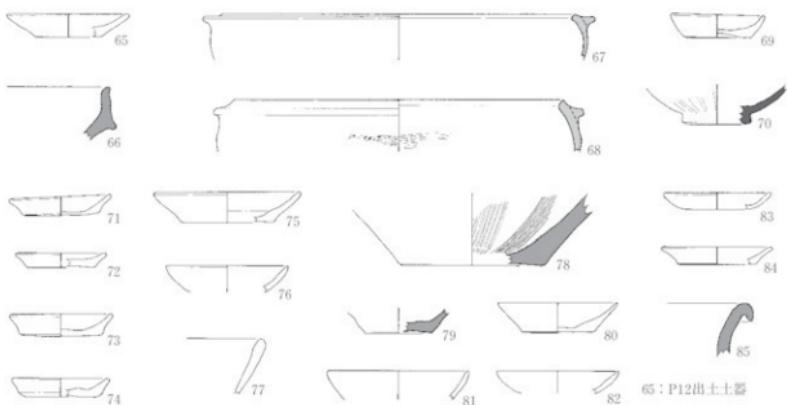




42: SB18出土石製品 43: SB19出土土器 44: SB21出土土器 45: SB23出土土器
46~49: SB24出土土器 50: SB25出土土器 51・52: SB29出土土器



53: P01出土土器
54: P04出土土製品
55: P02出土土器
56: P05出土土器
57: P06出土土器
58・59: P07出土土器
60・62: P08出土土器
61: P10出土土器
63: P09出土土器



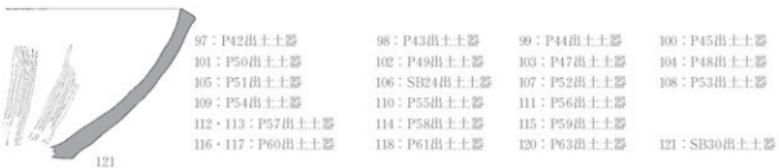
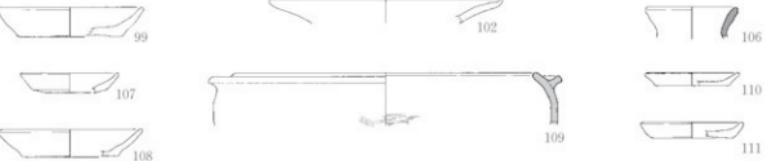
66: P13出土土器 67・69: P14出土土器 68: P15出土土器
71・72: P17出土土器 73・75: P18出土土器 74・77: P19出土土器
78: P22出土土器 79: P23出土土器 80: P24出土土器
81・82: P25出土土器 84: P28出土土器 85: P27出土土器

0 20cm

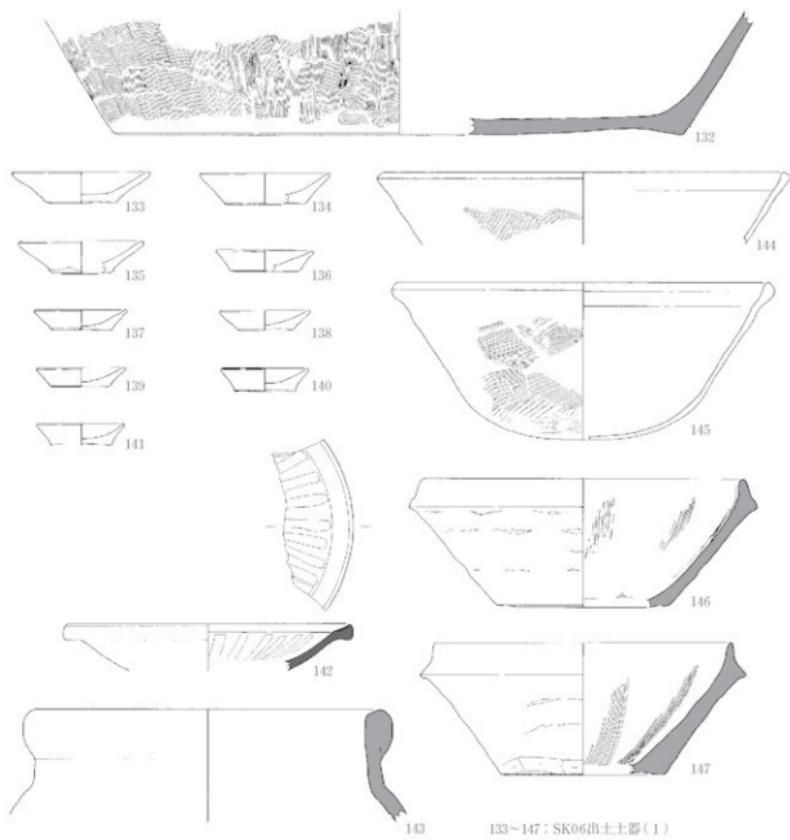
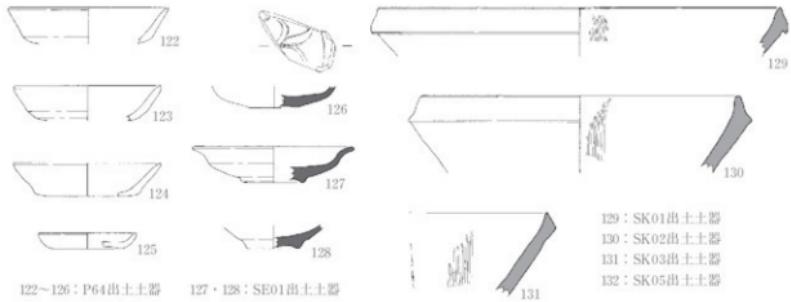
図版3



86 : P29出土土器 87 : P32出土土器
88 : P33出土土器 89 : P35出土土器 90 : P30出土土器 91 : P36出土土器
92 : P38出土土器 93 : P37出土土器 94 : P39出土土器 95・96 : P40出土土器

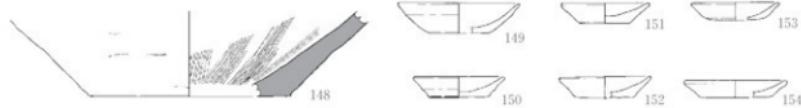


0 20cm

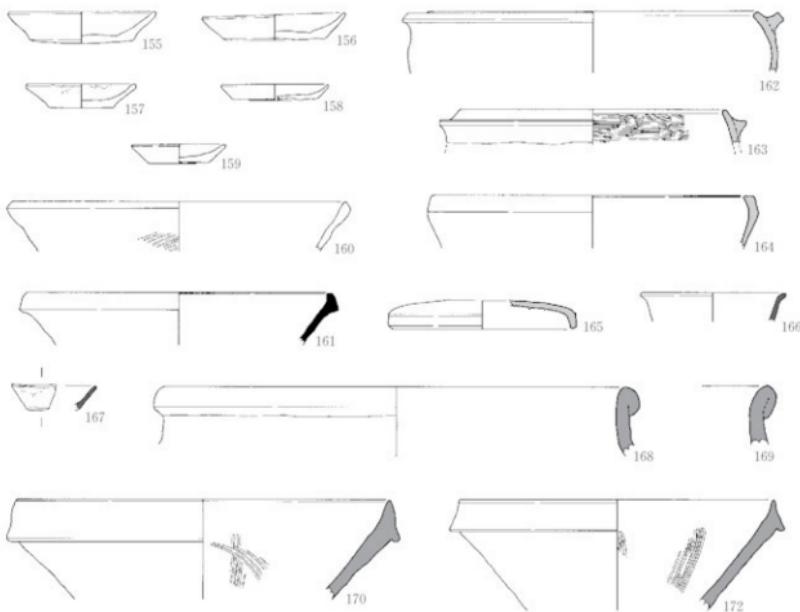


0 20cm

図版5

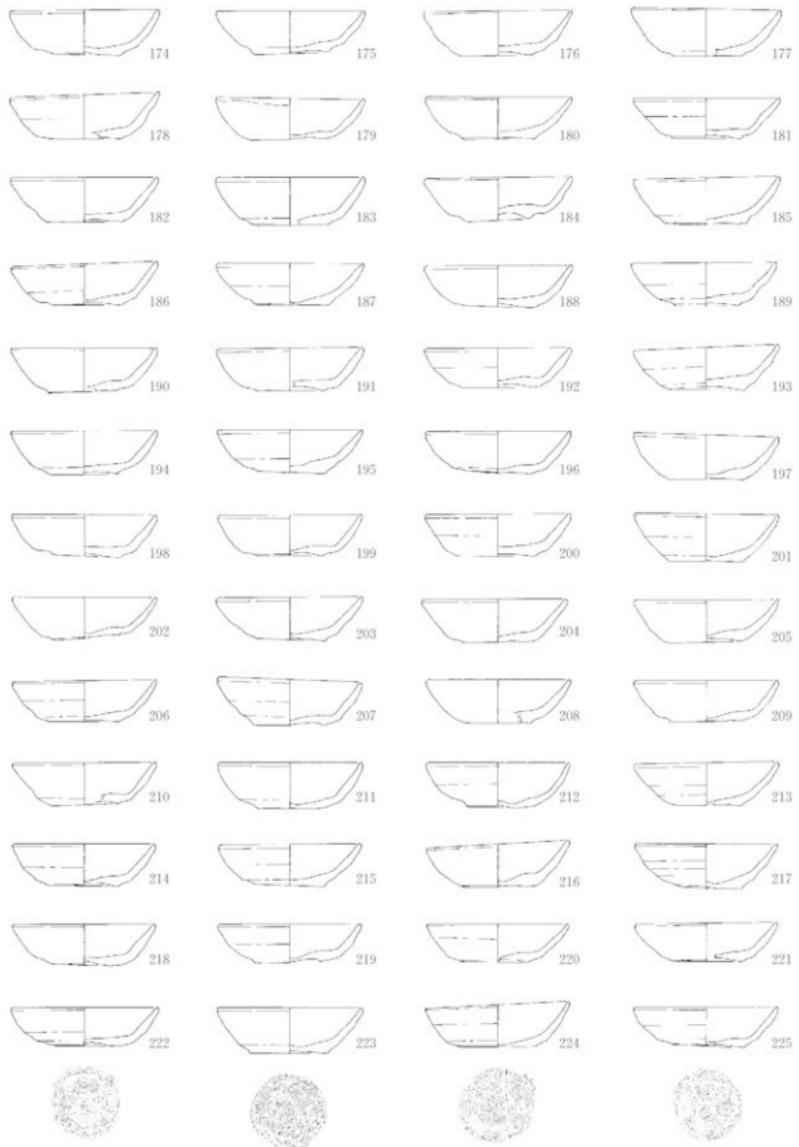


148: SK06出土土器(2) 149~153: SK07出土土器 154: SK08出土土器



155~173: SD02出土土器

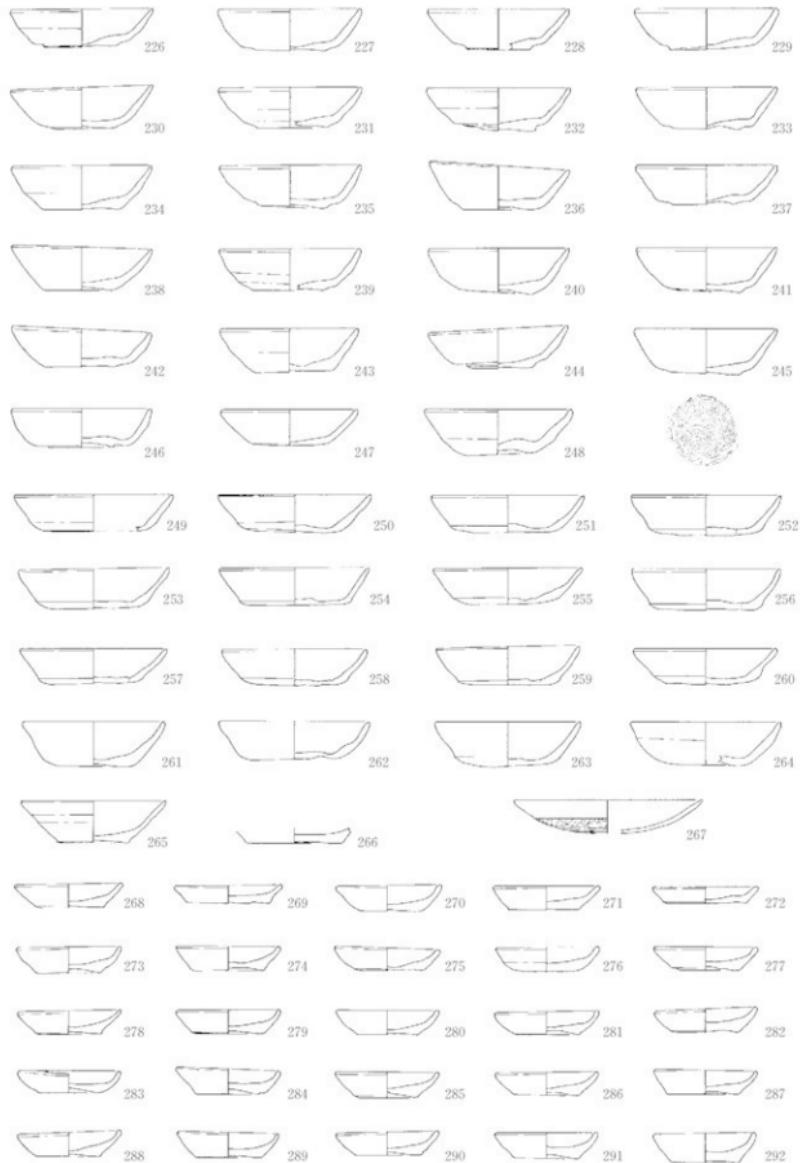
0 20cm



174~225：旧河道出土土器(1)

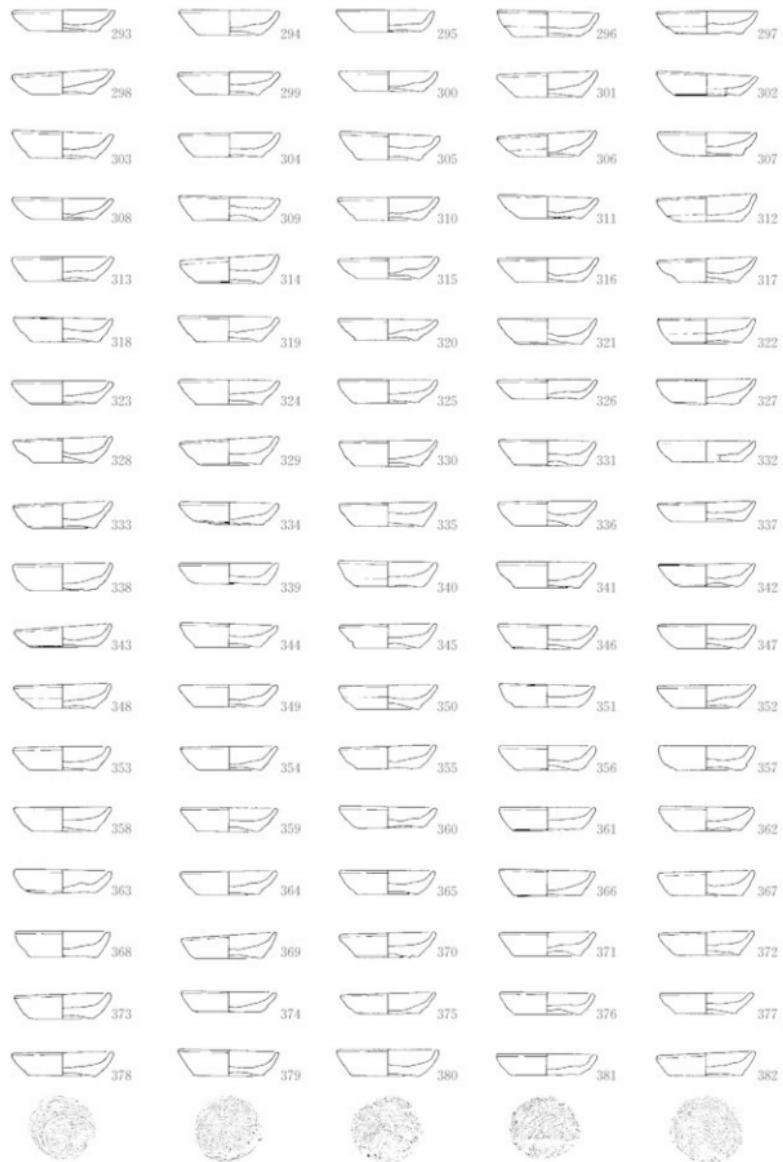
0
20cm

図版7



226~292：旧河道出土土器（2）

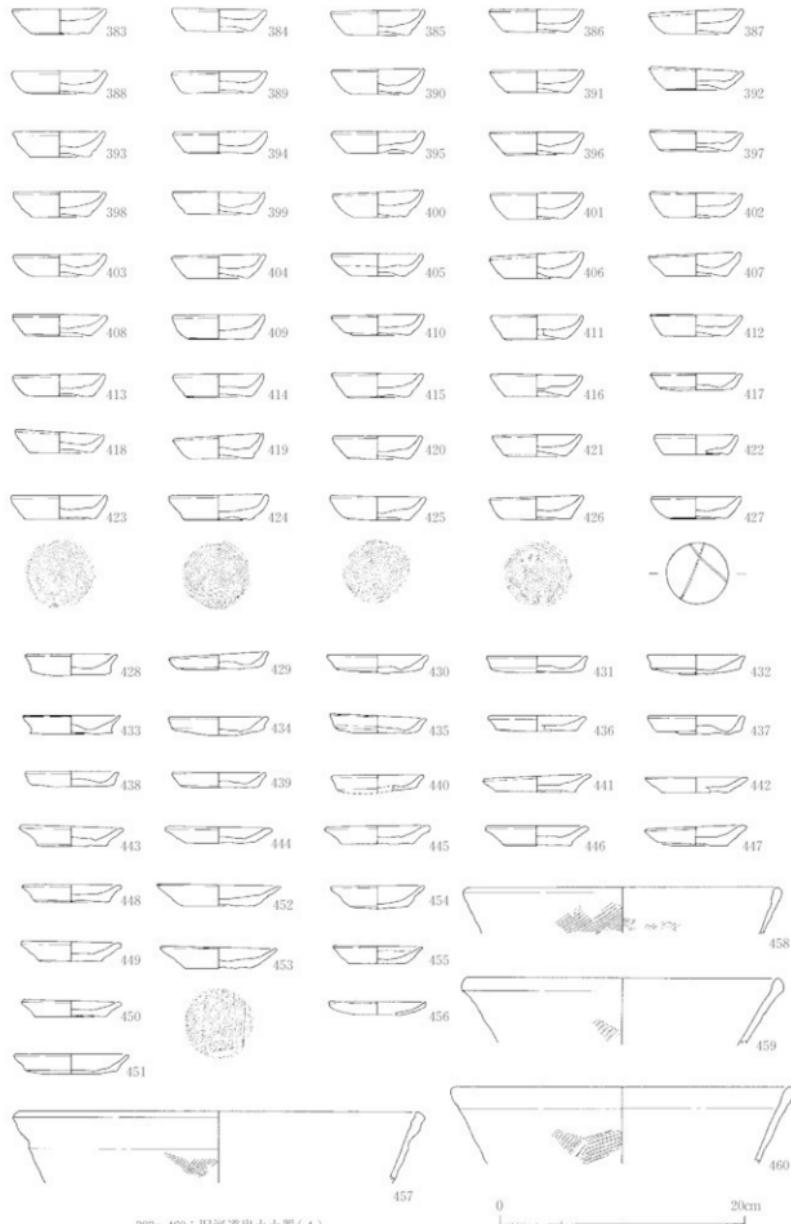
0 20cm



293~382：旧河道出土土器(3)

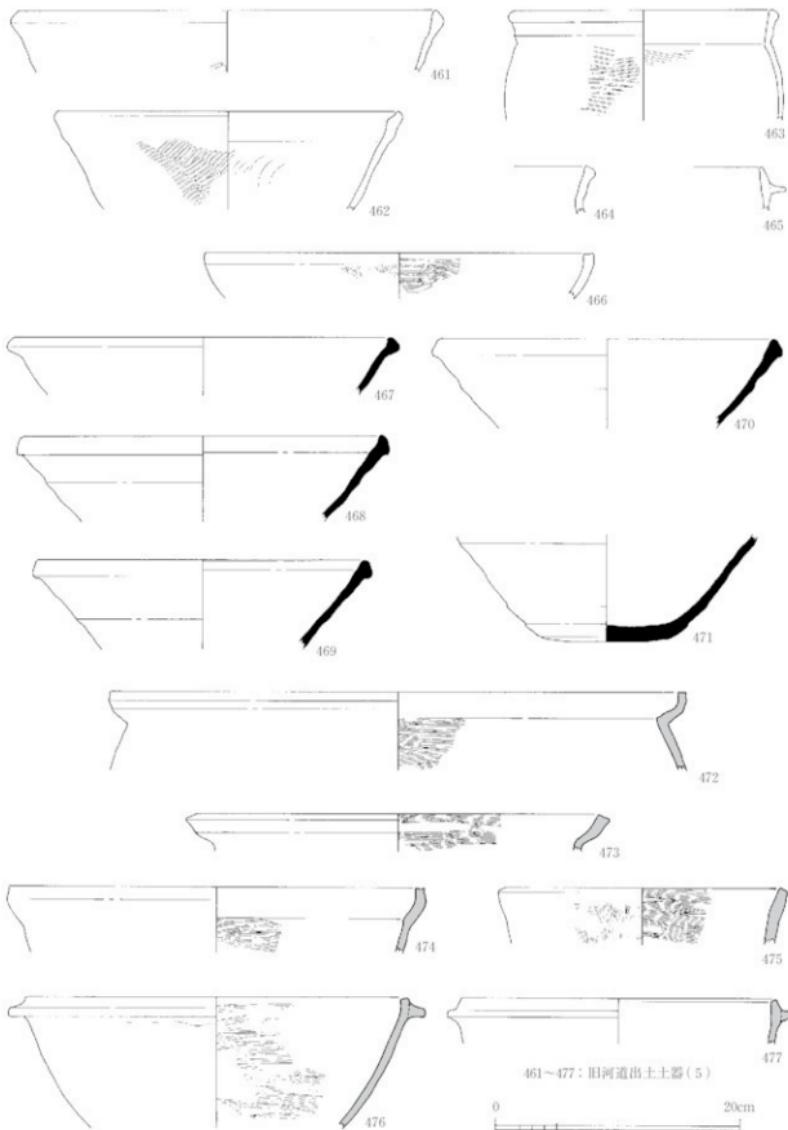
0 20cm

図版9



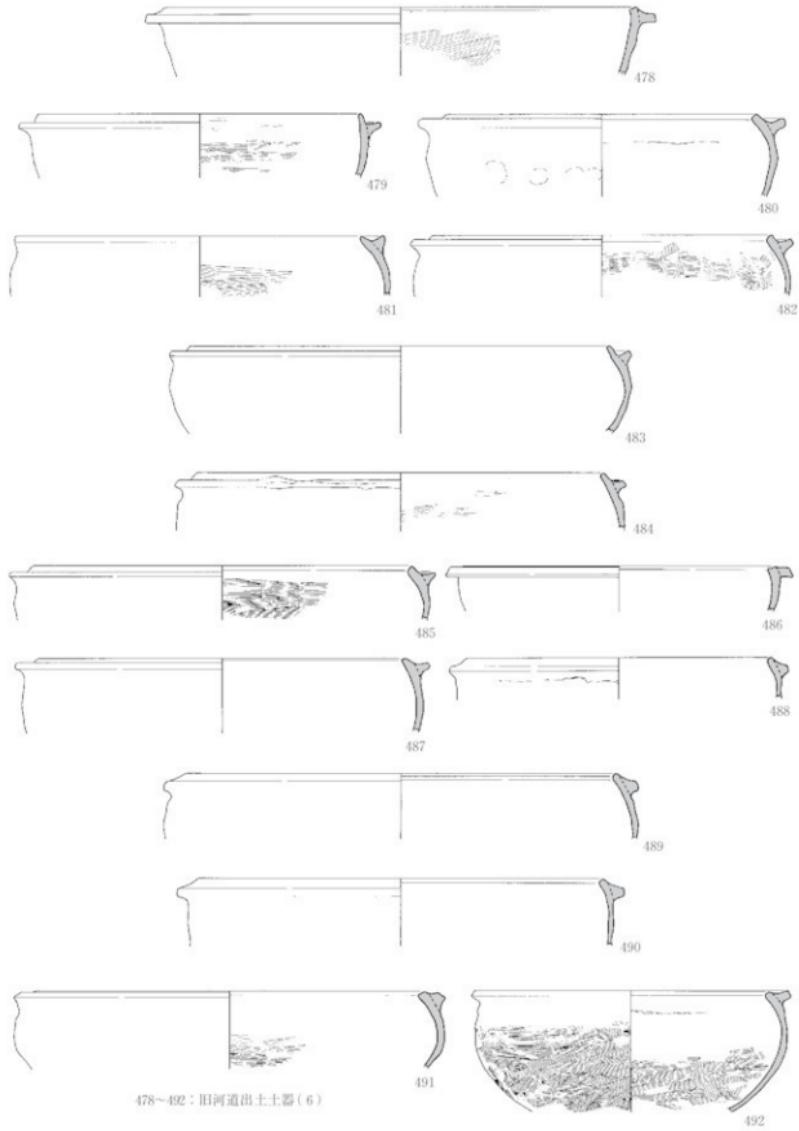
383~460：旧河道出土土器(4)

0 20cm



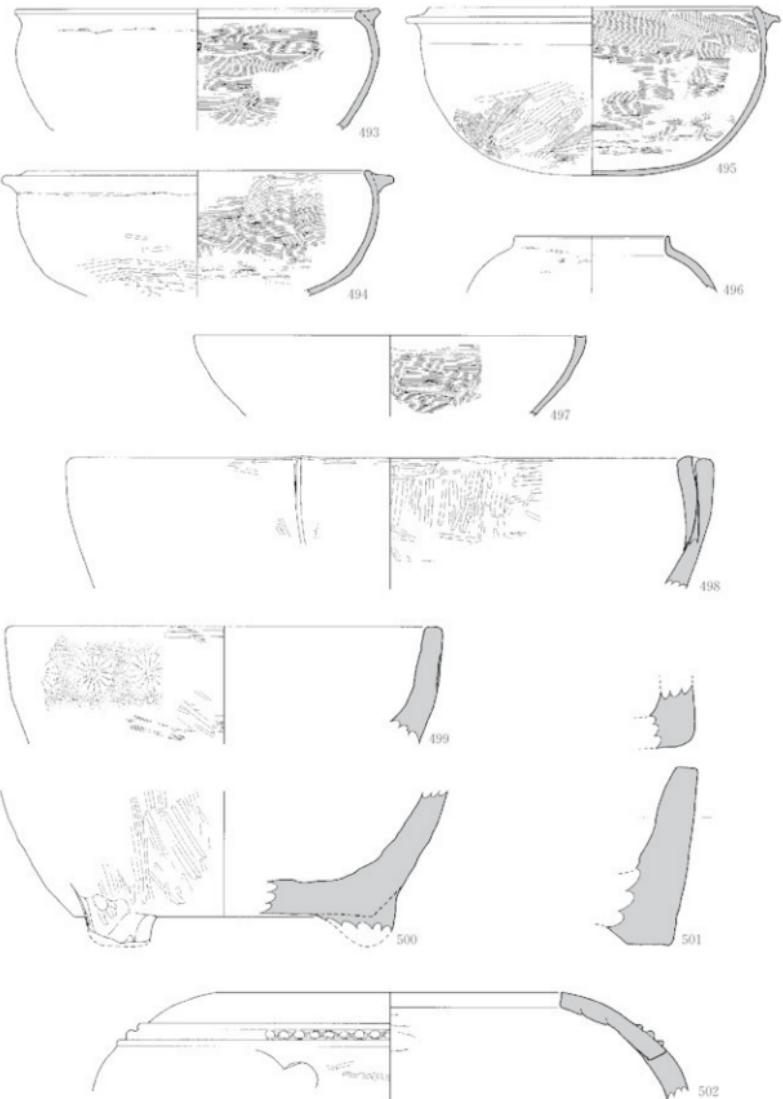
461~477: 旧河道出土土器 (5)

図版11



478~492：旧河道出土土器（6）

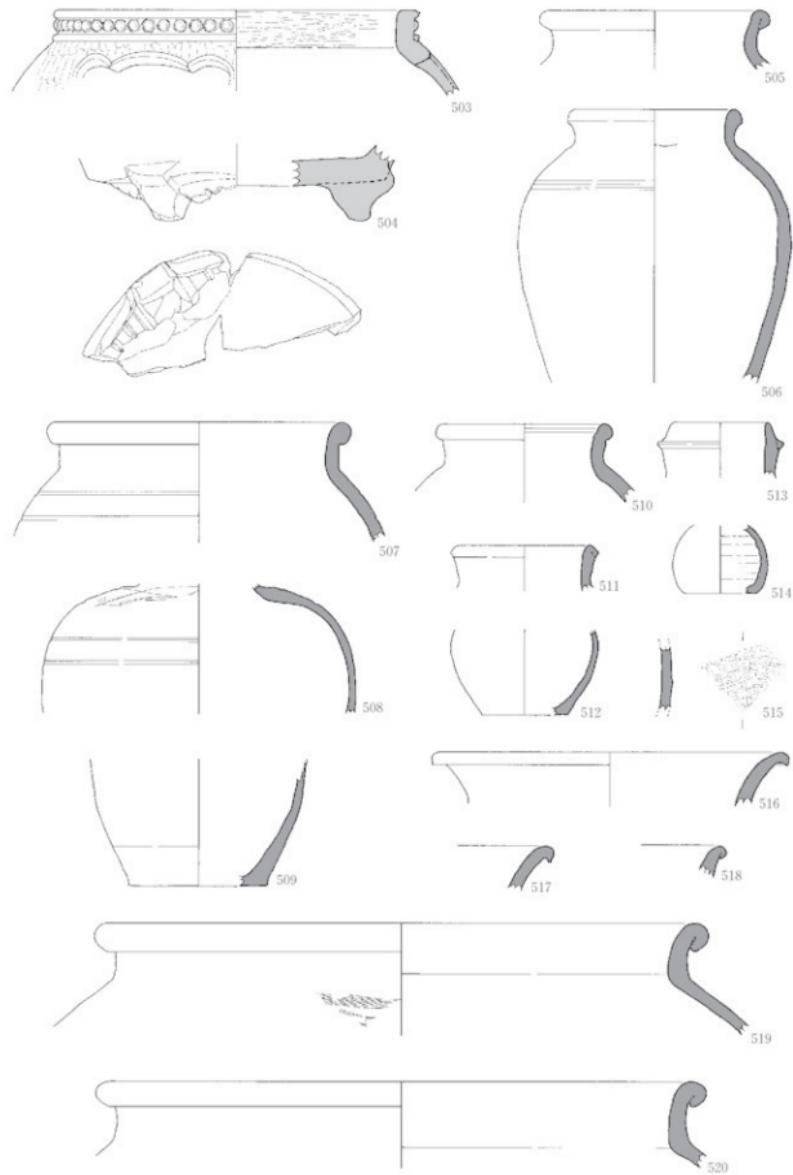
0 20cm



493~502：旧河道出土器（7）

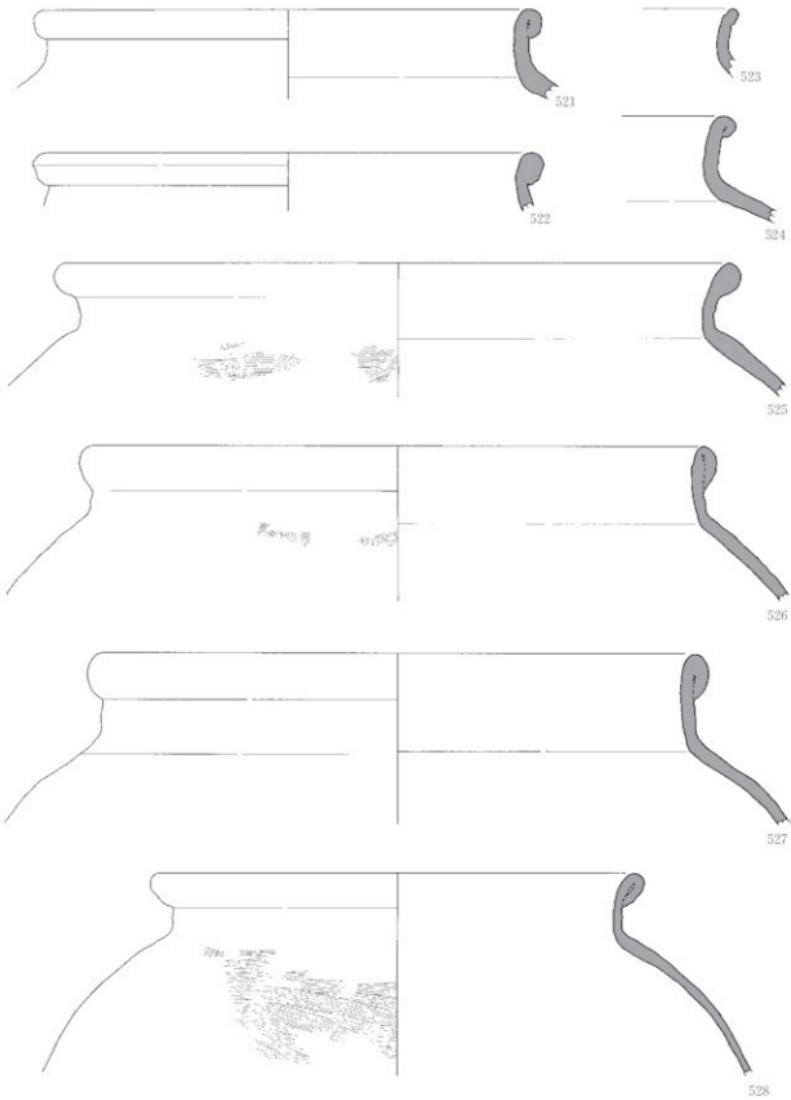


図版13



0 20cm

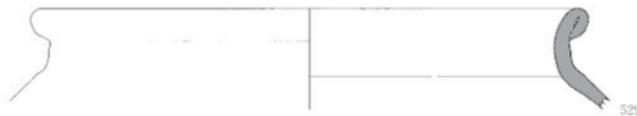
503-520: 旧河道出土土器(8)



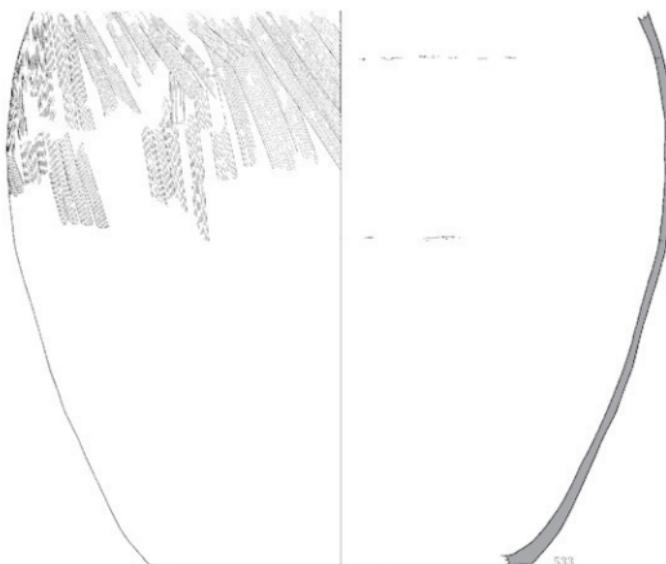
521~528：旧河道出土土器(9)

0 20cm

図版15

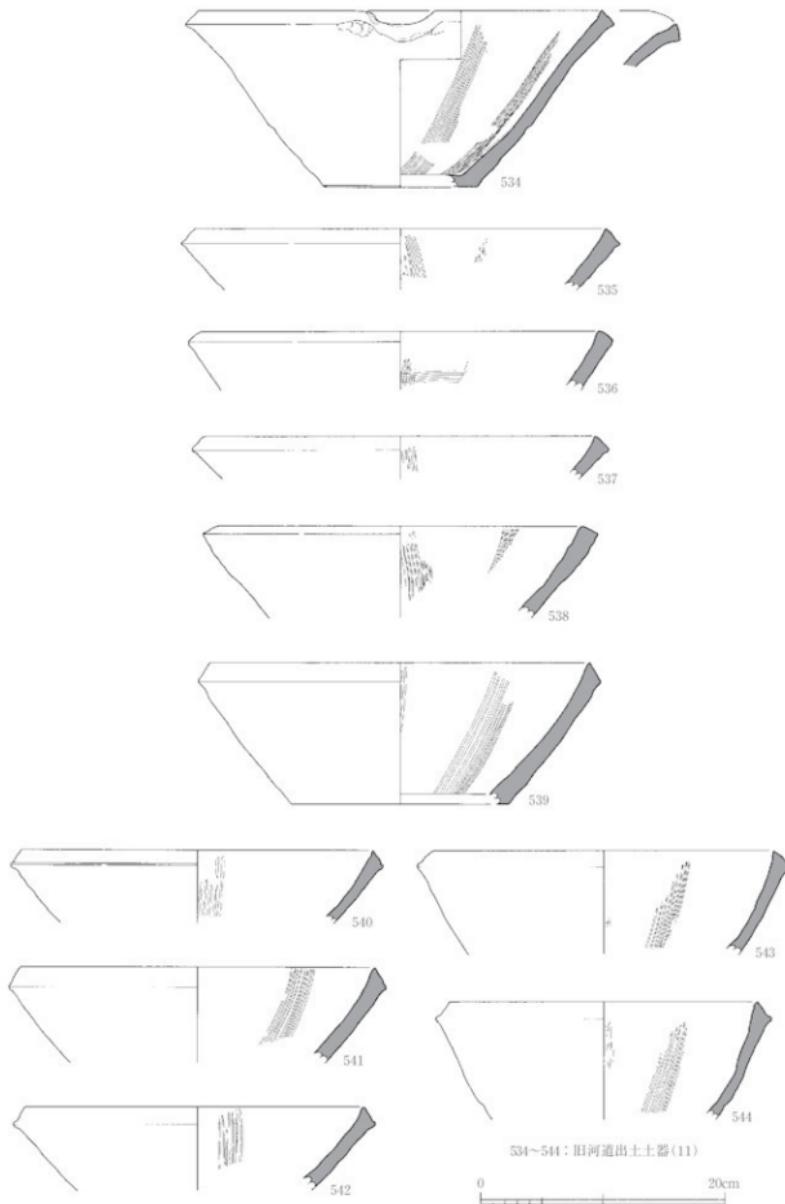


0 20cm

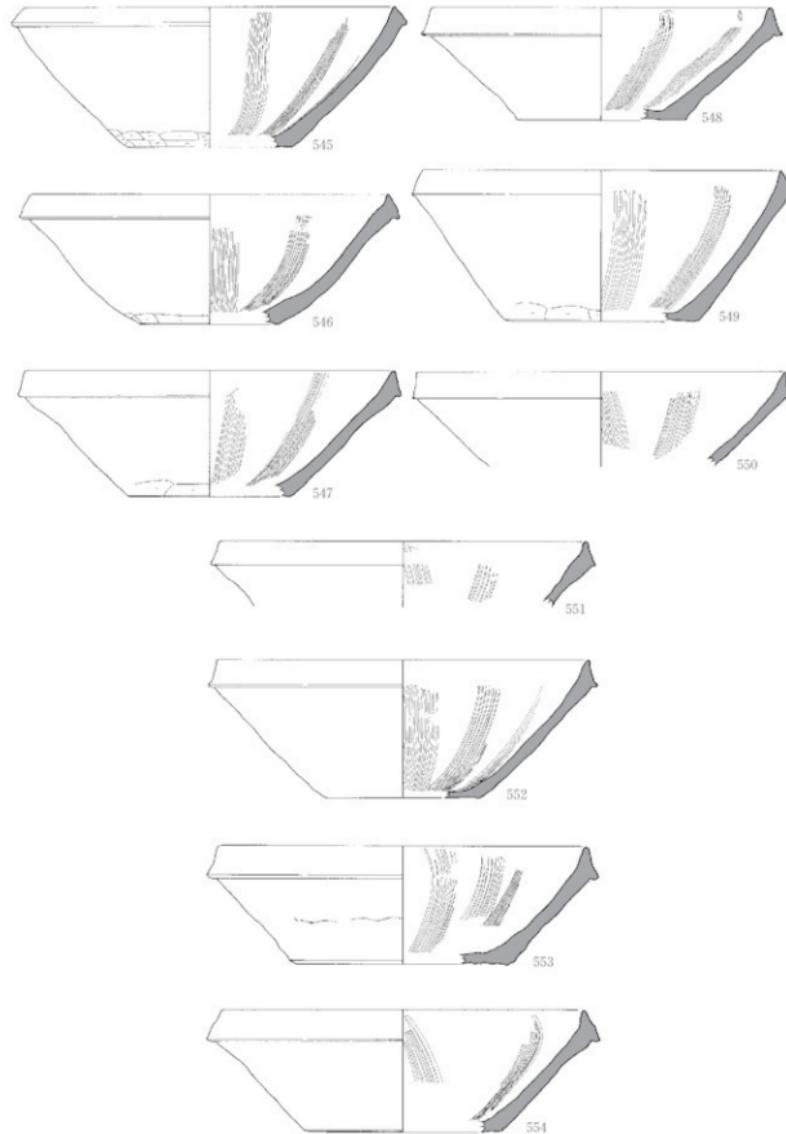


0 30cm

529~533: 旧河道出土土器 (10)

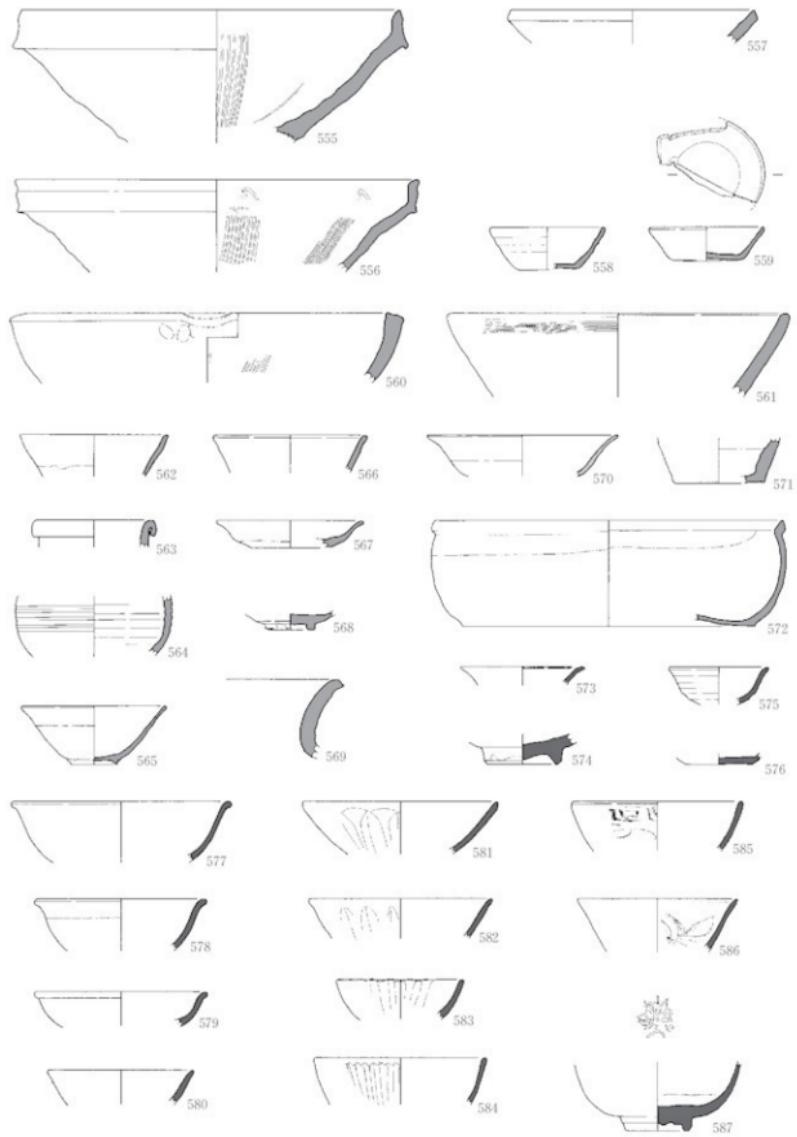


図版17



545～554：旧河道出土土器(12)



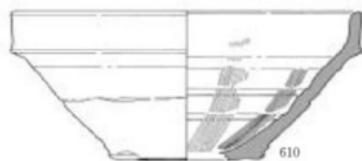
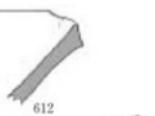
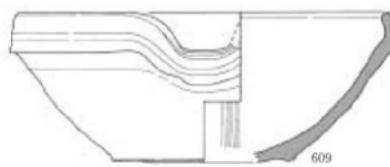
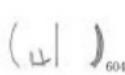
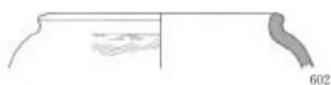
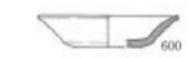
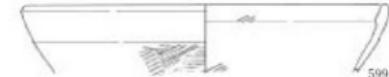
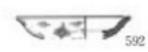
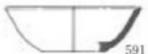


555～588：旧河道出土土器(13)

0 20cm

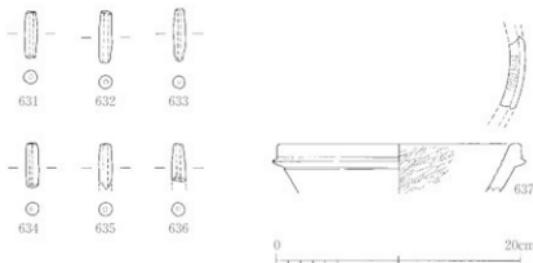
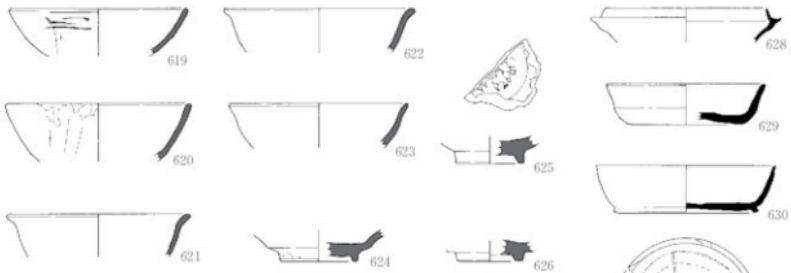


図版19

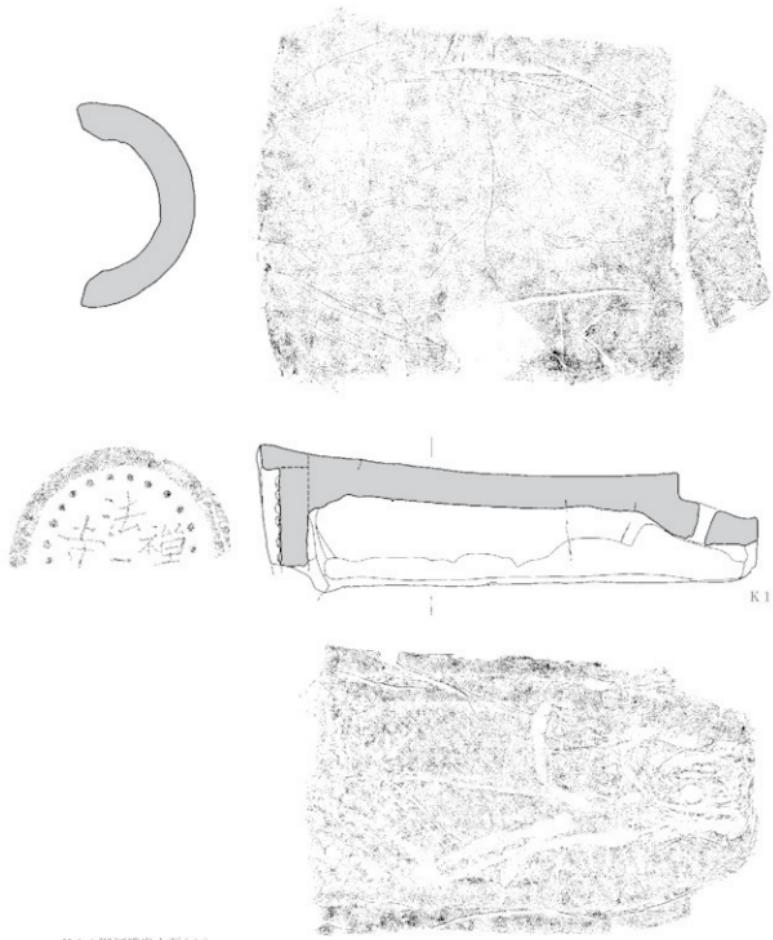


594~618：包含層出土土器(1)

0 20cm

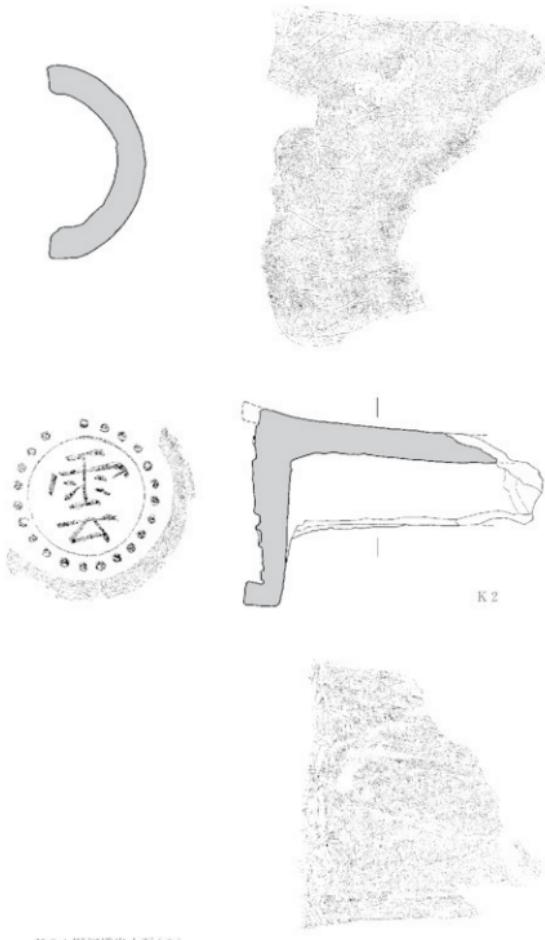


図版21



K1：旧河道出土瓦(1)

0 20cm



K 2 : 旧河道出土瓦(2)

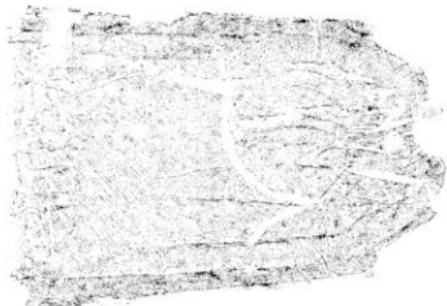
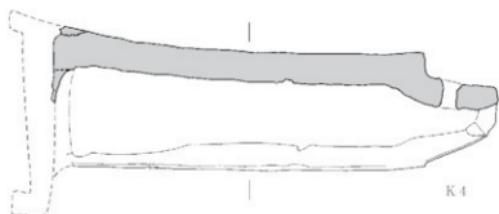
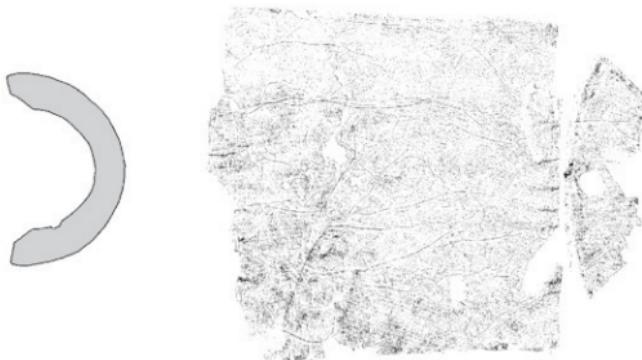
0 20cm

図版23



K 3 : 旧河道出土瓦(3)

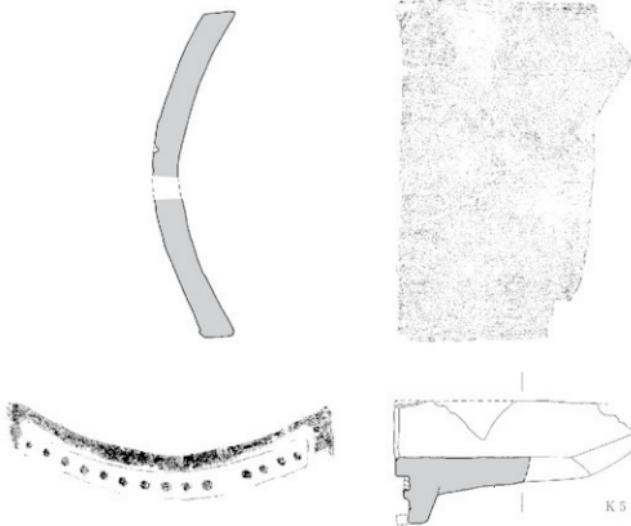
0 20cm



K 4 : 旧河道出土瓦(4)

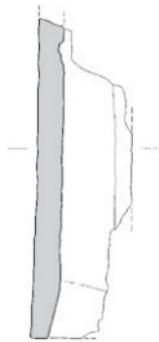
0 20cm

図版25

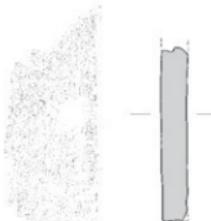


K 5：旧河道出土瓦(5)

0 20cm



K 6



K 7



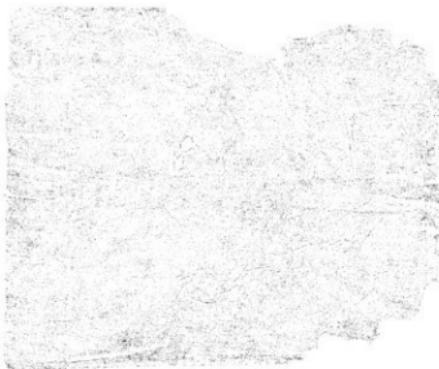
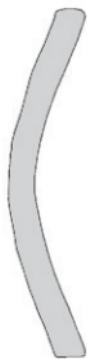
K 8



K 6 ~ K 8 : 旧河道出土瓦(6)



図版27

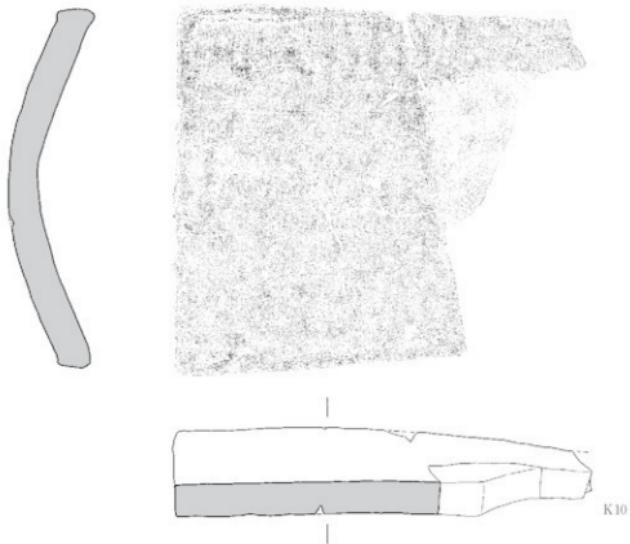


K 9



K 9 : 旧河道出土瓦(7)

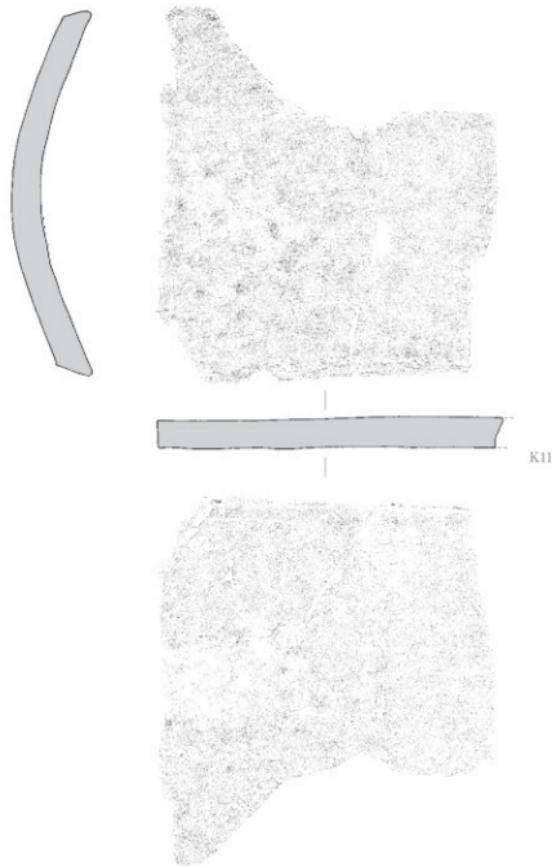




K10：旧河道出土瓦(8)

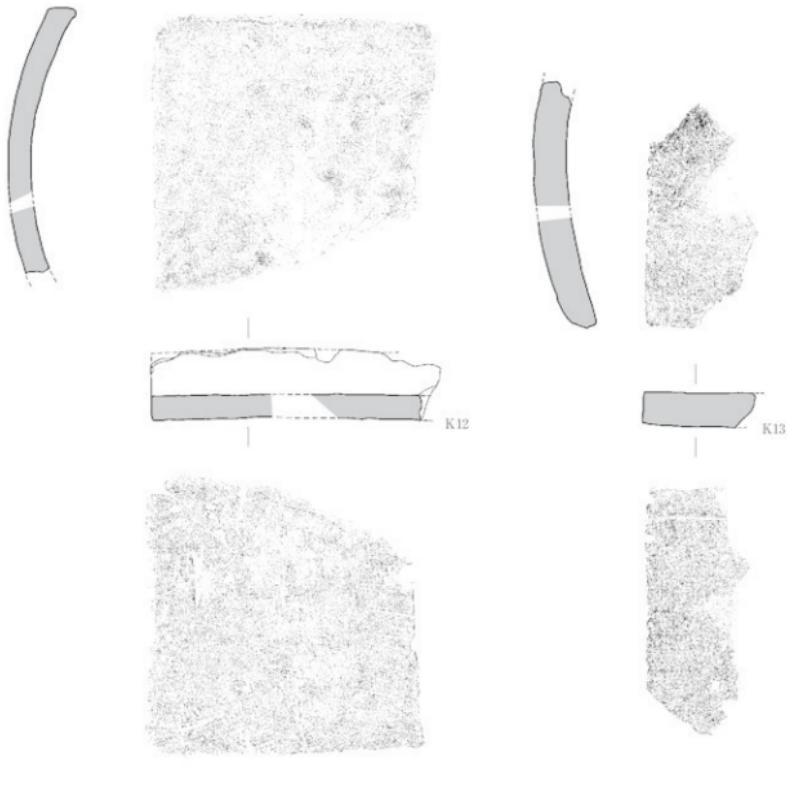


図版29



K11：旧河道出土瓦(9)

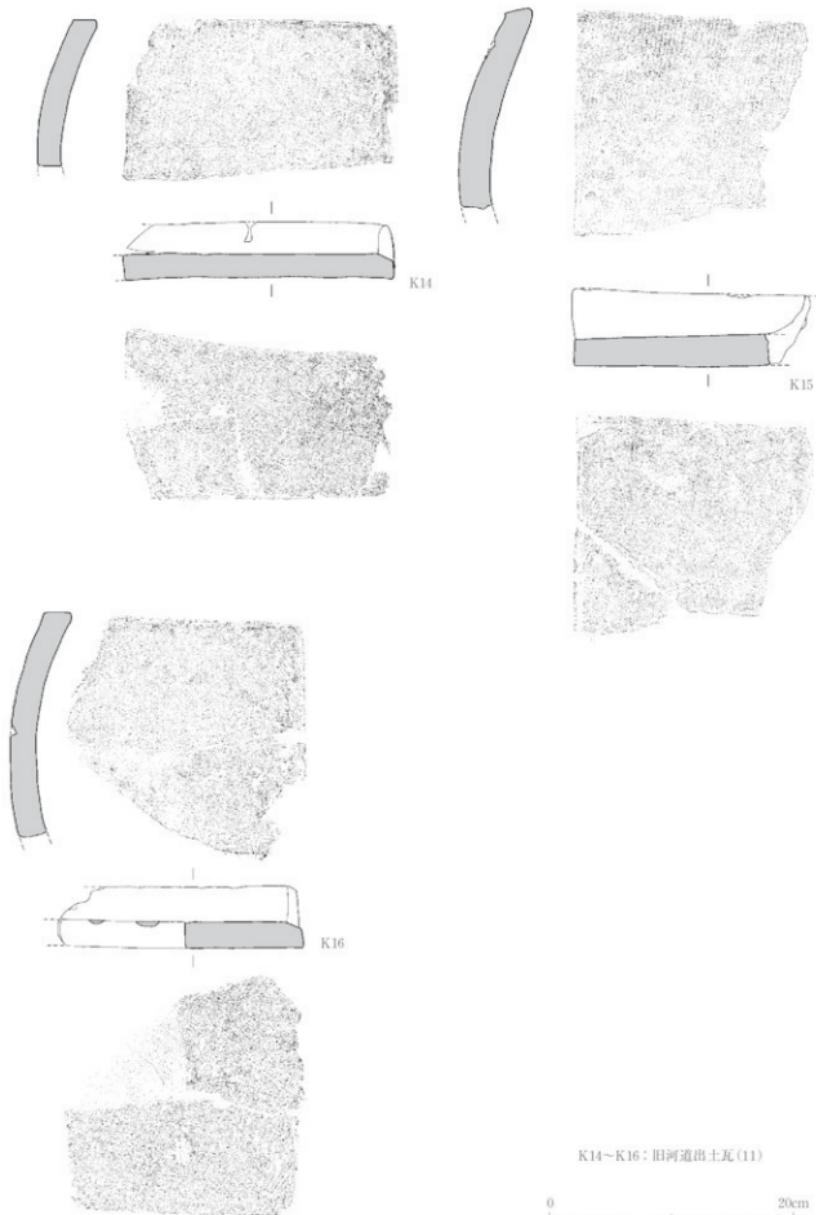




K12・K13：旧河道出土瓦(10)

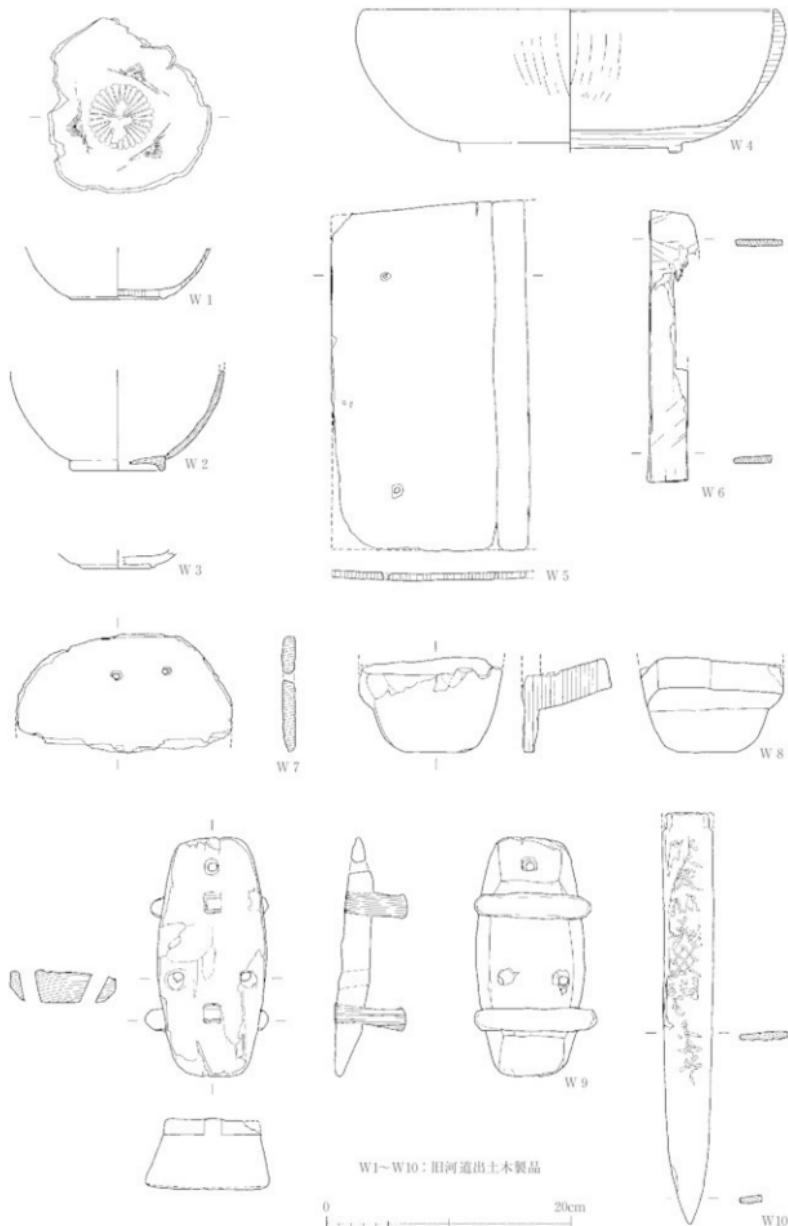


図版31

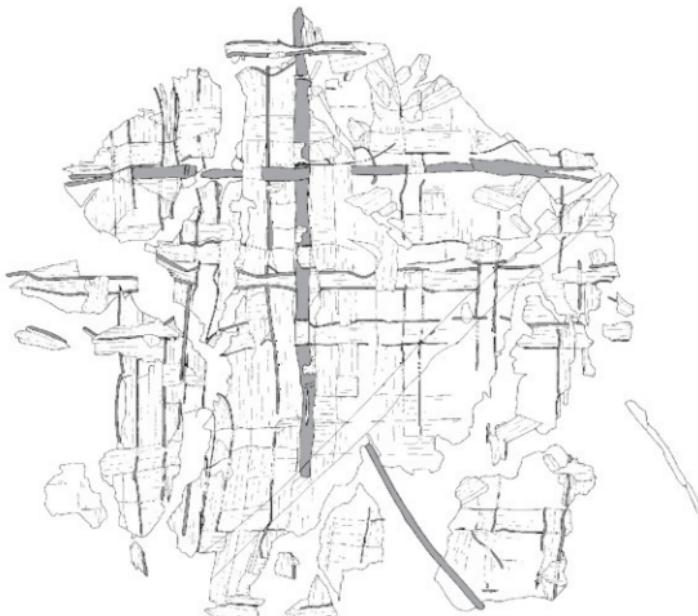


K14~K16: 旧河道出土瓦(11)

0 20cm



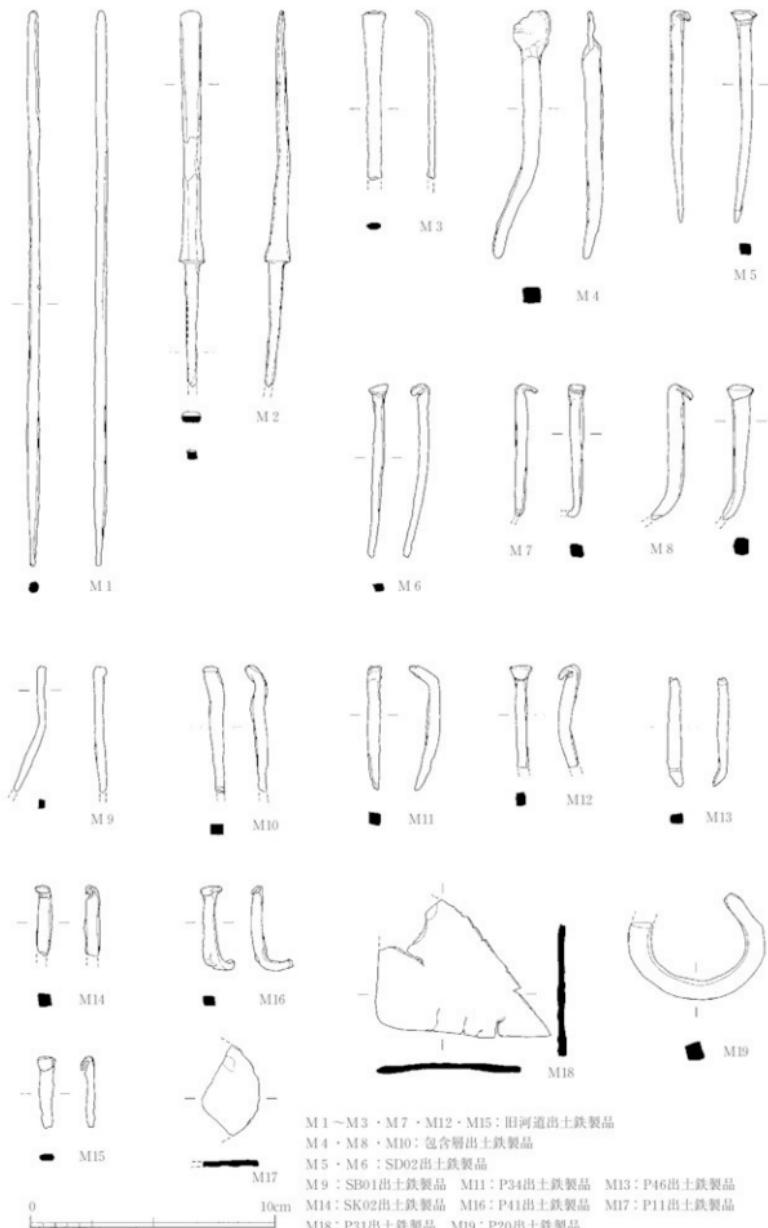
図版33



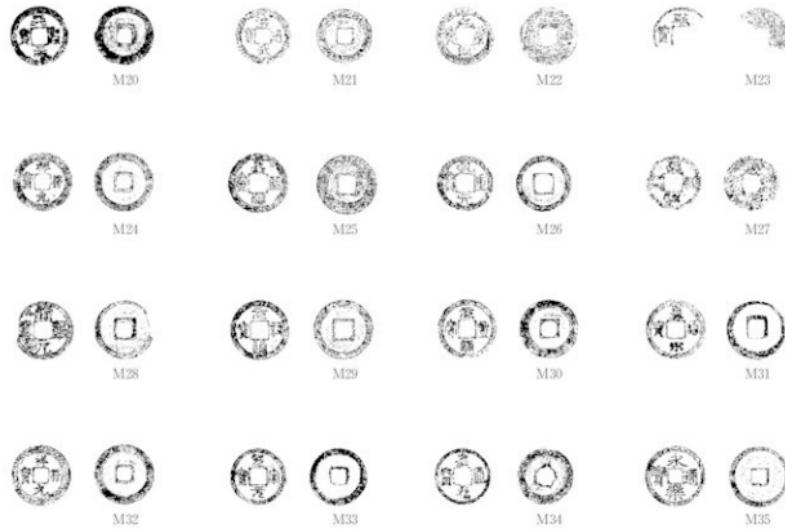
W11



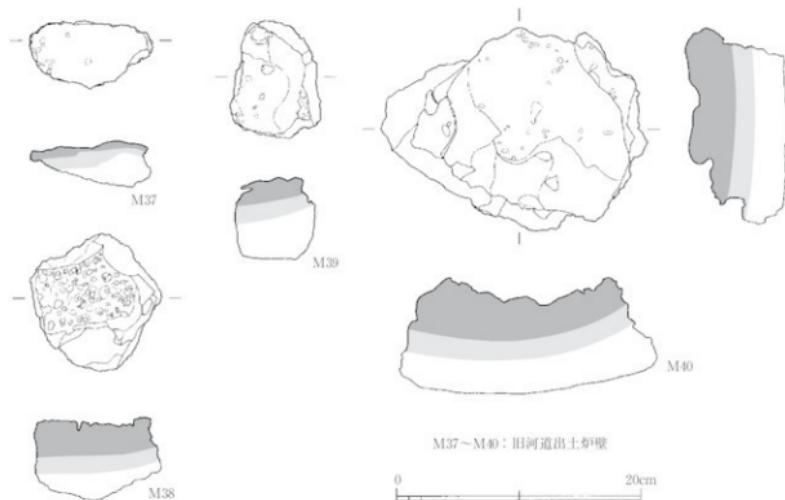
W11：旧河道出土木製品



図版35



M20: SB15出土銅錢 M21~M36: 旧河道出土銅錢



写 真 図 版



カラー図版1 遺跡



遺跡遠景 東上空から



遺跡近景 西上空から



遺跡近景 北西上空から



遺跡近景 南上空から

カラー図版3 遺構



調査地近景 西上空から



調査地近景 東上空から



調査地近景 南上空から



II-1区全景 南東上空から

カラー図版5 遺構



I区・II-2区全景 北西上空から



I区・II-2区全景 西上空から



II-1区近景 南東上空から



II-1区近景 西上空から

カラー図版7 遺構



旧河道断面



旧河道内
編物出土状況



旧河道内
漆碗(W1)出土状況



山野里宿遺跡出土土器・瓦

カラー図版9 遺物



山野里宿遺跡出土土器



山野里宿遺跡出土瓦質土器（風炉・火鉢）



出土土師器（楕・皿）

カラー図版11



出土土器椀（内面）



出土土器底（底部）

カラー図版13



出土土師器皿（内面）



出土土師器皿（底部）

カラー図版15



出土瀬戸・美濃焼



出土唐津焼・志野焼



中国製灰釉陶器(572)



出土青磁碗(587)



592



613

輸入陶磁器

カラー図版19



柱穴・土坑出土青磁



柱穴・溝・包含層出土青磁

カラー図版21



旧河道出土青磁

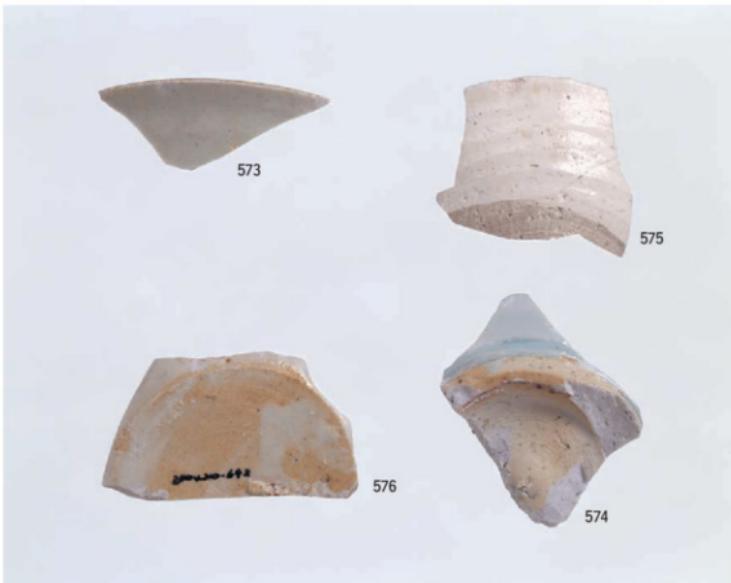


旧河道出土青磁

カラー図版23



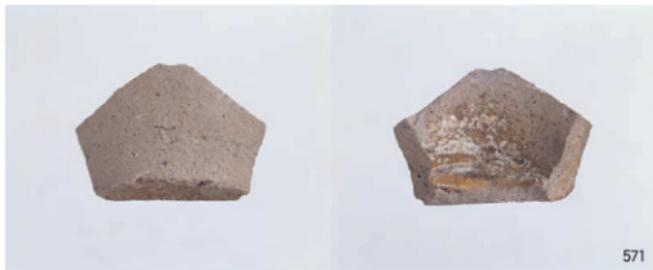
柱穴・溝・包含層出土白磁・青磁



旧河道出土白磁



出土備前焼



571



出土瓦



出土木筒



出土漆椀(W1)



出土編物(W11)



出土橢形鉄滓



I区全景 南から



II-1区全景
東から

モノクロ図版2 遺構



II-2区全景 西から



II-1区 俯瞰

モノクロ図版4 遺構



II-1区全景
南西から



II-1区全景
南西から

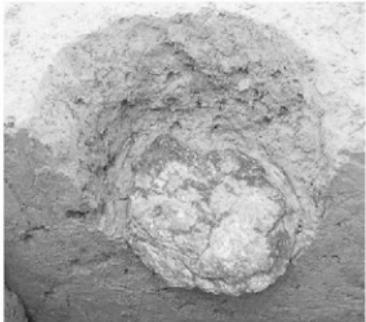


掘立柱建物群 I
北から

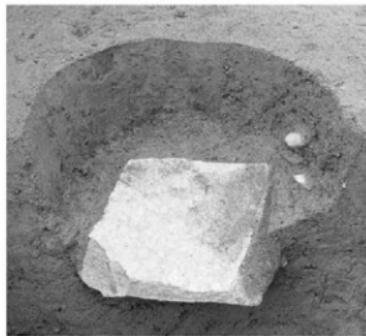


掘立柱建物群 II
南東から

モノクロ図版6 遺構



(左)SB15-P12
土器出土状況 南から
(右)SB18
P18底部 東から



(左)SB18
P19底部 西から
(右)SB18
P21底部 北から



(左)SB21
P11底部 東から
(右)SB21
P8底部 西から

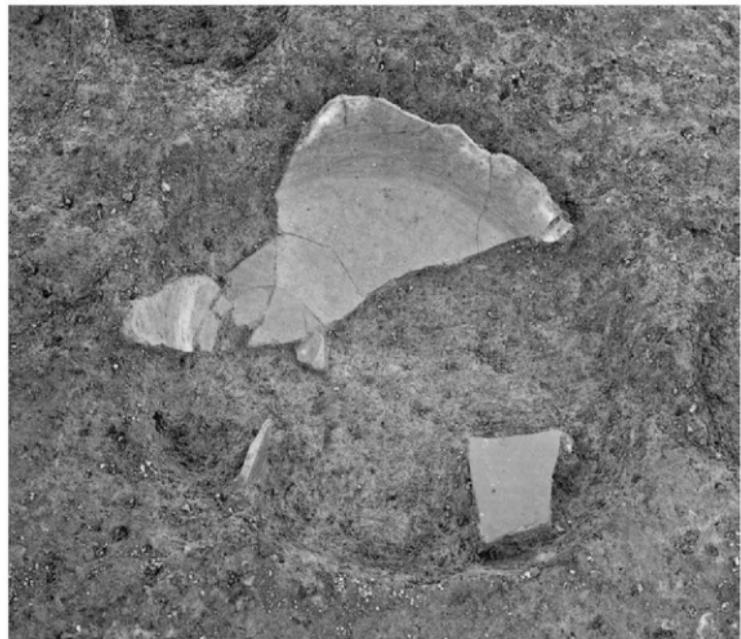


SE01全景 北から

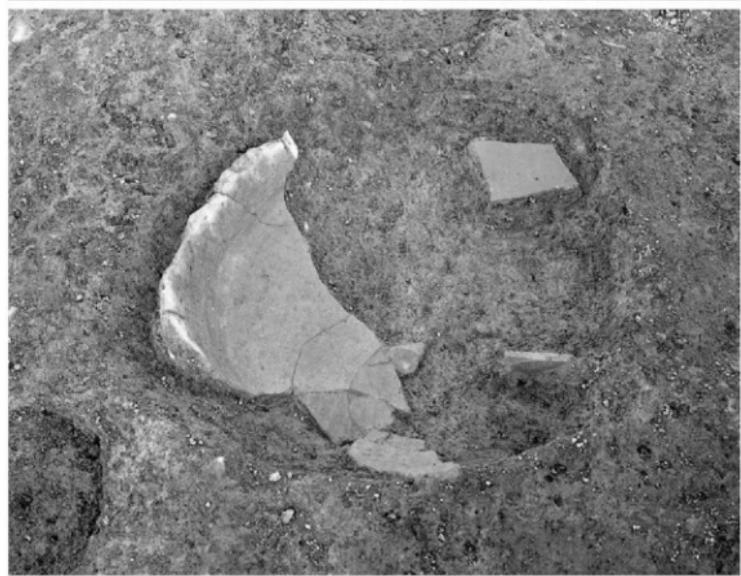


SK02全景 南東から

モノクロ図版8 遺構



SK05全景 南から



SK05全景 西から



SK06全景 北から



SK06全景 北東から

モノクロ図版10 遺構



旧河道内杭例
北東から



旧河道内石組み遺構
南西から



旧河道内石組み遺構
南東から



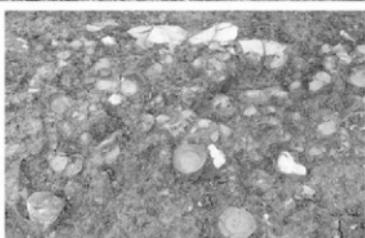
旧河道断面 東から



旧河道 土師器
出土状況 南から



(左)旧河道 土師器
出土状況 西から
(右)旧河道 土師器
出土状況 北から



モノクロ図版12 遺物



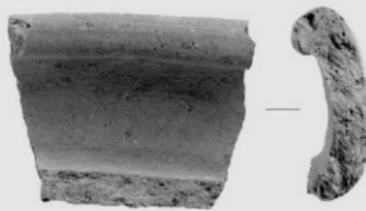
7



19



13



41



—



23

7 : SB05出土土器 13 : SB07出土土器 19 : SB12出土土器 23 : SB15出土土器 41 : SB18出土土器



26



28



27



30



26~28・30 : SB15出土土器

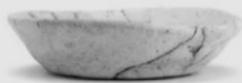
モノクロ図版14 遺物



29



31



35



33



32



34





56



51



42



54

42 : SB18出土石製品 51 : SB29出土土器 54 : P04出土土製品 56 : P05出土土器

モノクロ図版16 遺物



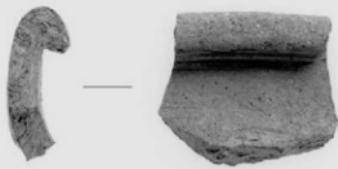
71



103



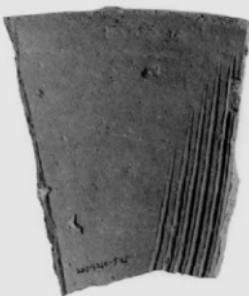
92



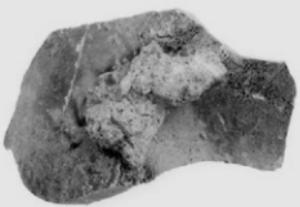
85



61



61 : P10出土土器 71 : P17出土土器 85 : P27出土土器 92 : P38出土土器 103 : P47出土土器



119



139



122



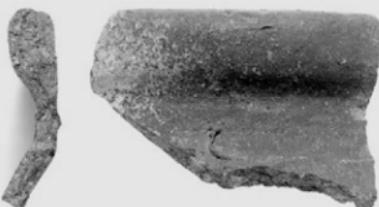
150



123



140



143



119:P62出土土器 122・123:P64出土土器 139・140・143:SK06出土土器 150:SK07出土土器

モノクロ図版18 遺物



132



146



133



149



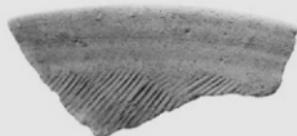
136



151

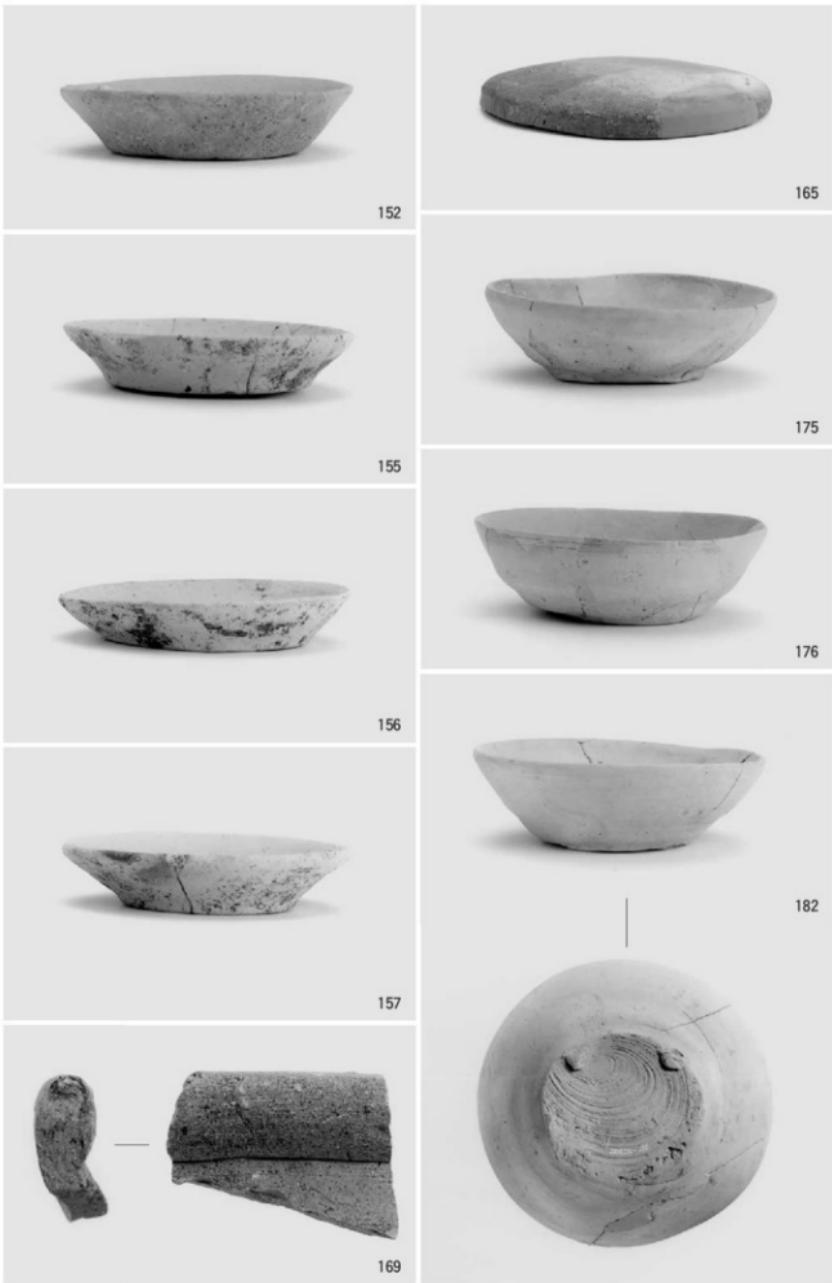


138



144

132 : SK05出土土器 133・136・138・144・146 : SK06出土土器 149・151 : SK07出土土器



152 : SK07出土土器 155~157・165・169 : SD02出土土器 175・176・182 : 旧河道出土土器

モノクロ図版20 遺物



186



196



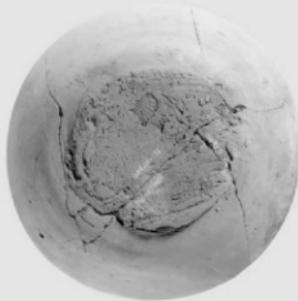
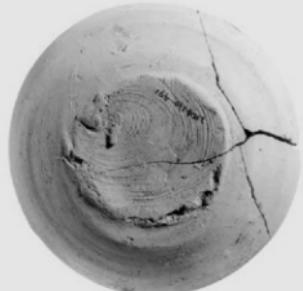
221



189

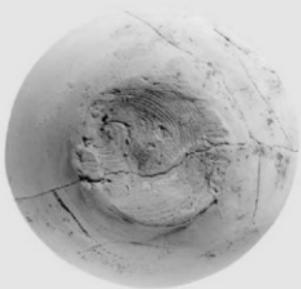


209

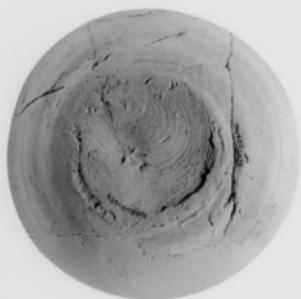




216



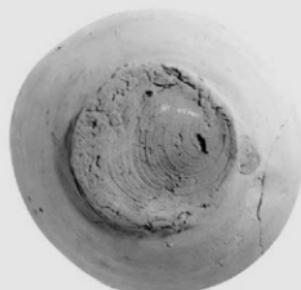
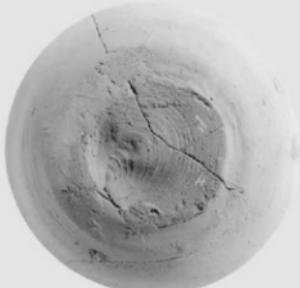
222



219



223

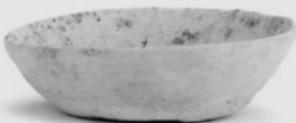


モノクロ図版22 遺物



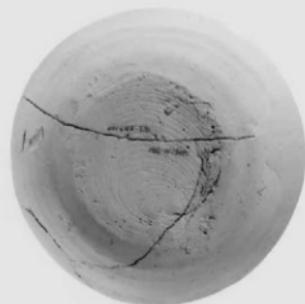
|

224



|

229



|

225



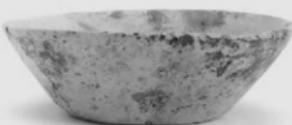
|

241

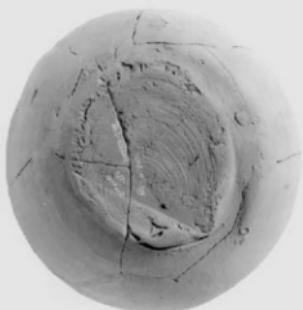




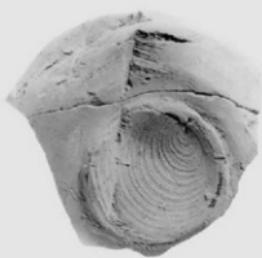
242



238



246



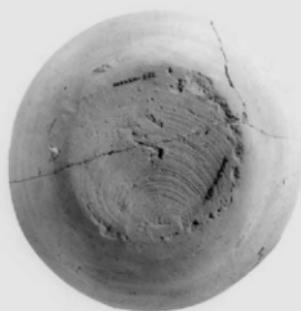
246



243



245



モノクロ図版24 遺物



248



251



253



255

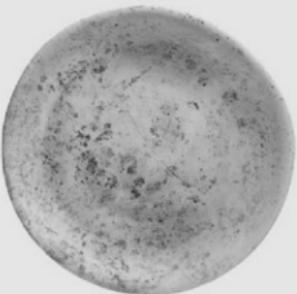




254



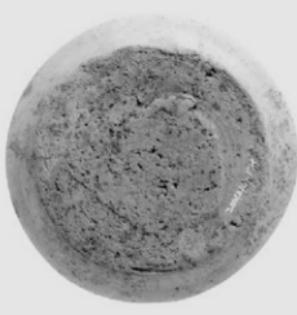
259



258



269



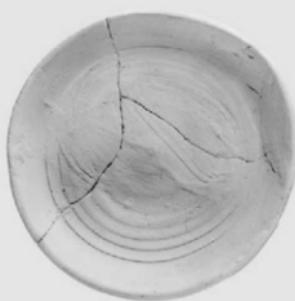
モノクロ図版26 遺物



265



267



271



314

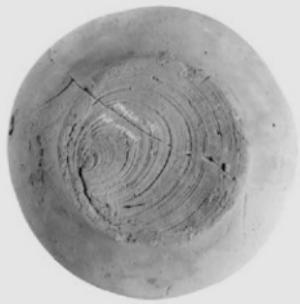




278



294



292



299



モノクロ図版28 遺物



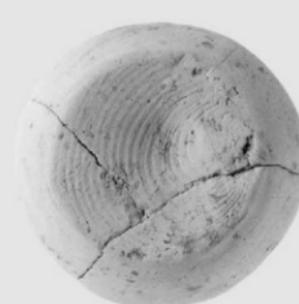
|

323



|

331



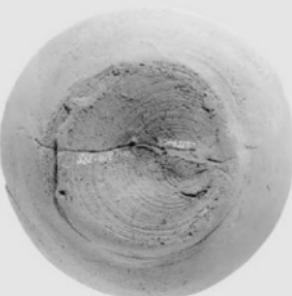
|

328



|

334





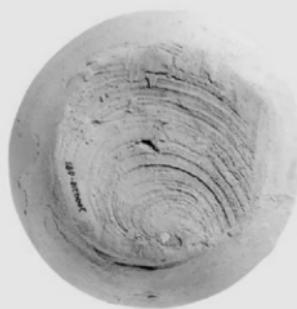
329



362



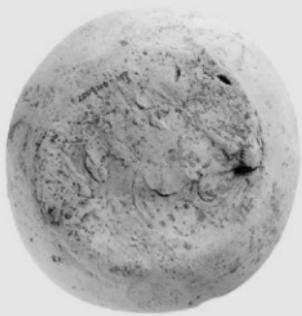
375



361



378



329・361・362・375・378：旧河道出土土器

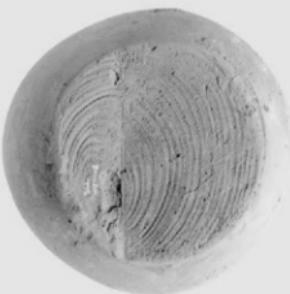
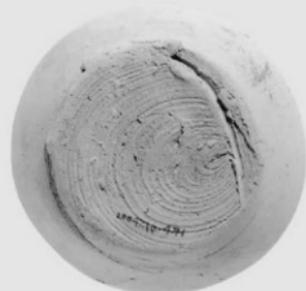
モノクロ図版30 遺物



379



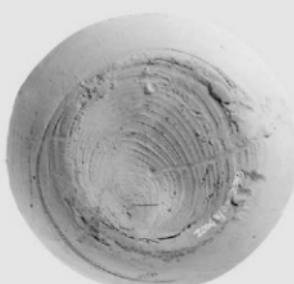
382



381



385



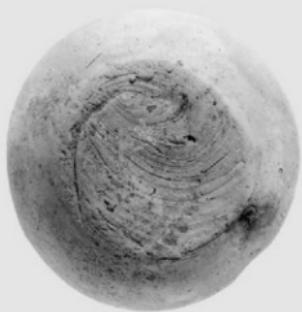
379・381・382・385：旧河道出土土器



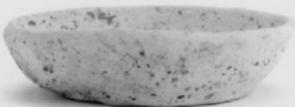
405



415



427



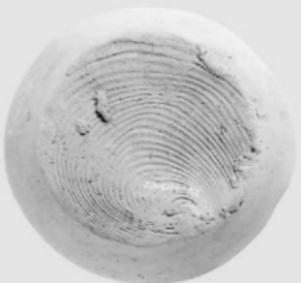
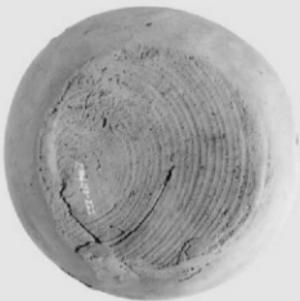
428



423



426



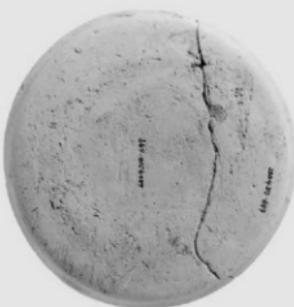
モノクロ図版32 遺物



429



431



430



432



433

429～433：旧河道出土土器



434



437



435



438



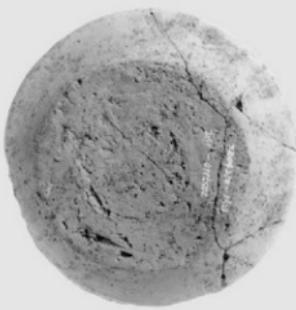
モノクロ図版34 遺物



439



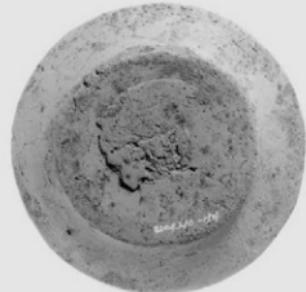
445



443



447





448



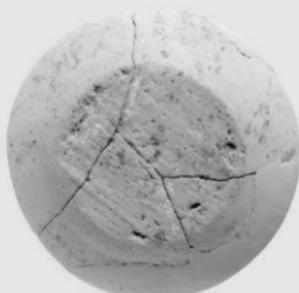
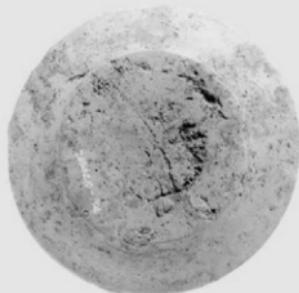
450



449



453

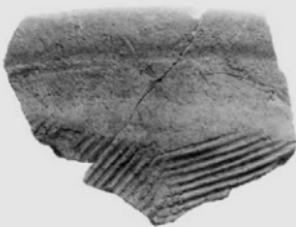


448～450・453：旧河道出土土器

モノクロ図版36 遺物



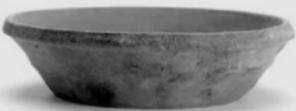
452



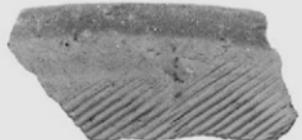
460



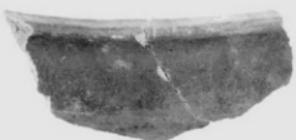
462



470



458



491

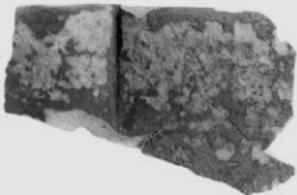
452・454・458・460・462・470・491：旧河道出土土器



492



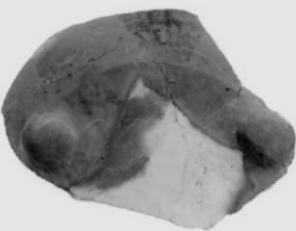
495



498



500



499

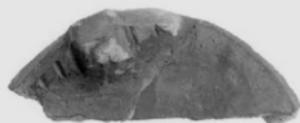


503

モノクロ図版38 遺物



504



506

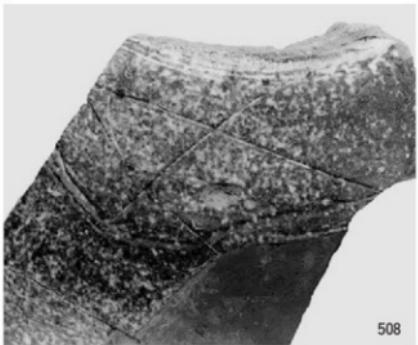


505



507

504～507：旧河道出土土器



508



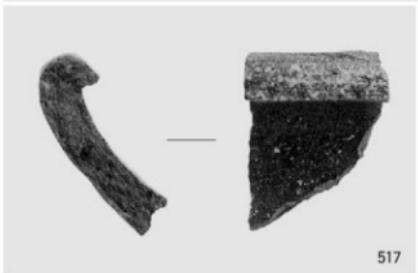
513



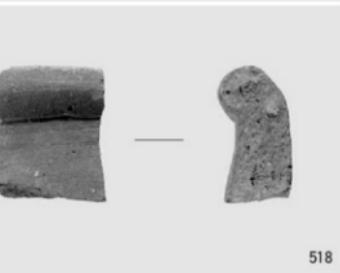
510



511



517



518

508・510・511・513・517・518：旧河道出土土器

モノクロ図版40 遺物



519



521



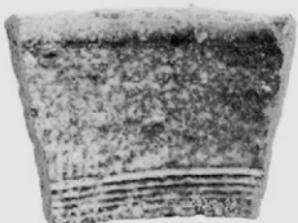
523

528

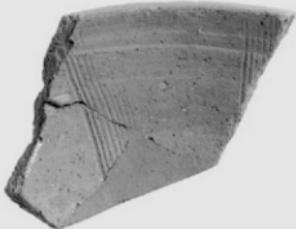


534

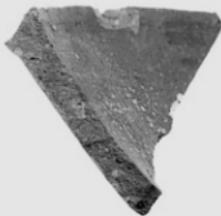
539



536



538



542

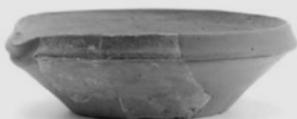
549

536・538・542・549：旧河道出土土器

モノクロ図版42 遺物



545



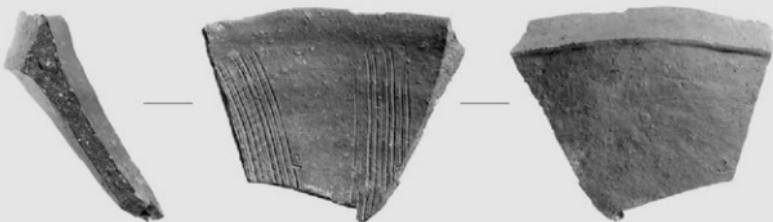
553



546



551



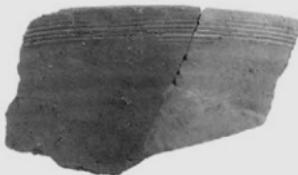
550



554



558



561

550・554・558・561：旧河道出土土器

モノクロ図版44 遺物



559



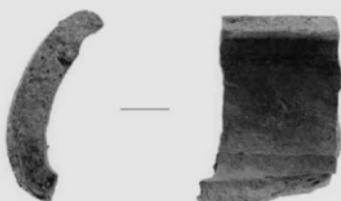
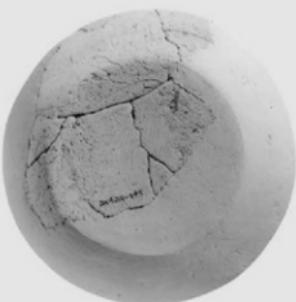
594



595



569



569



594

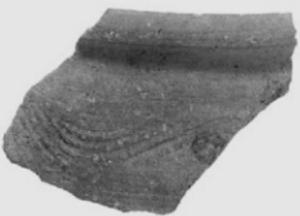
559・565・569：旧河道出土土器 594・595：包含層出土土器



596



600



602



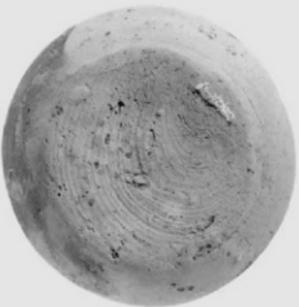
604



597

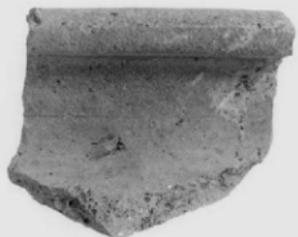


598

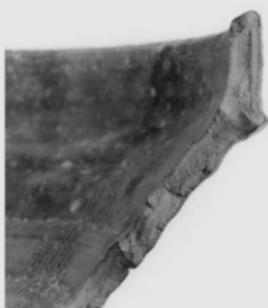


596～598・600・602・604：包含層出土土器

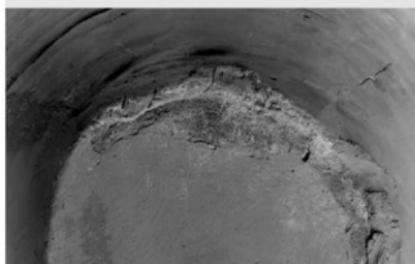
モノクロ図版46 遺物



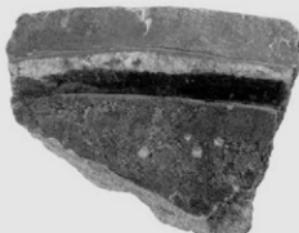
605



610



630



637

605・610：包含層出土土器 630：基盤層出土土器 637：旧河道出土石製品



631



632



633



634



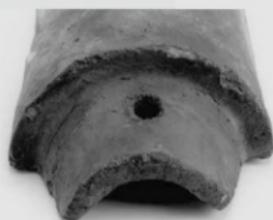
635



636

631～636：日河道出土土製品

モノクロ図版48 遺物



K1



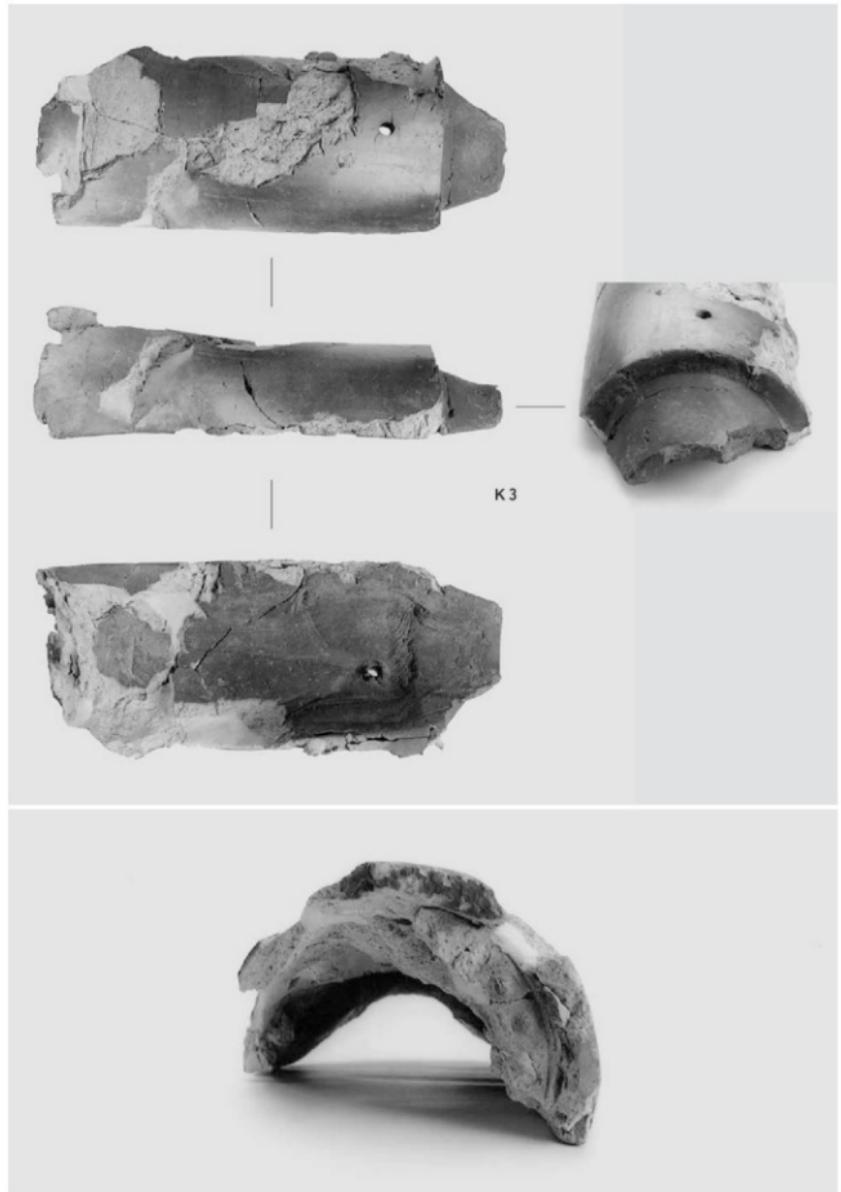
K1

K1：旧河道出土瓦

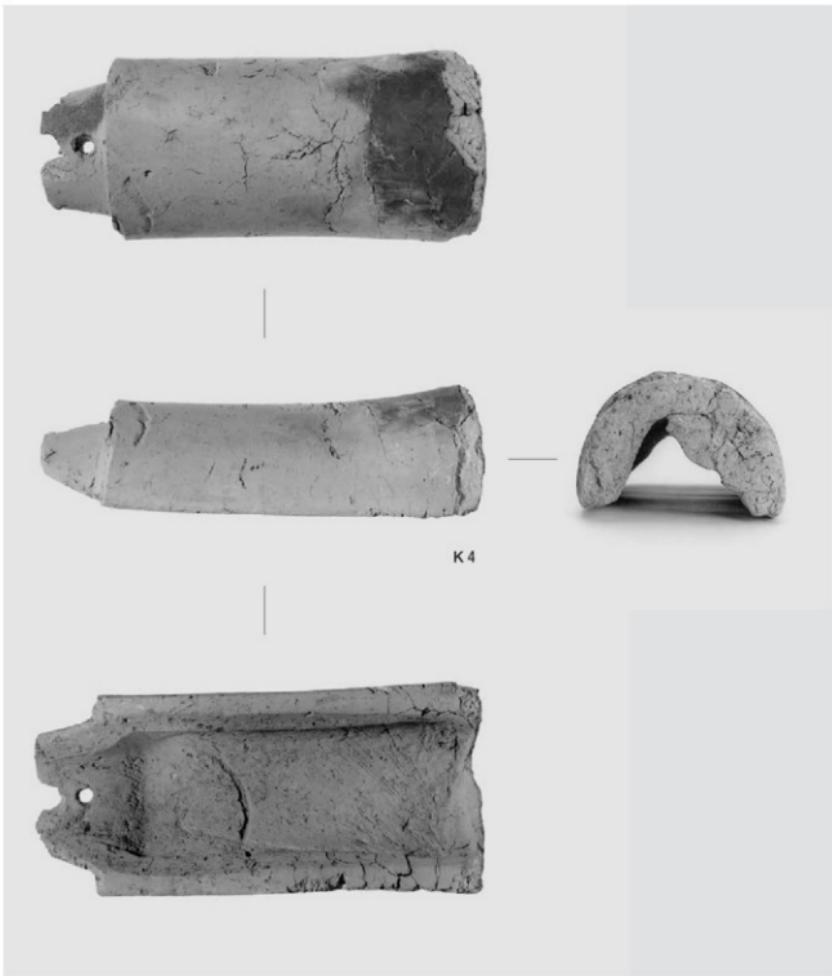


K 2：旧河道出土瓦

モノクロ図版50 遺物

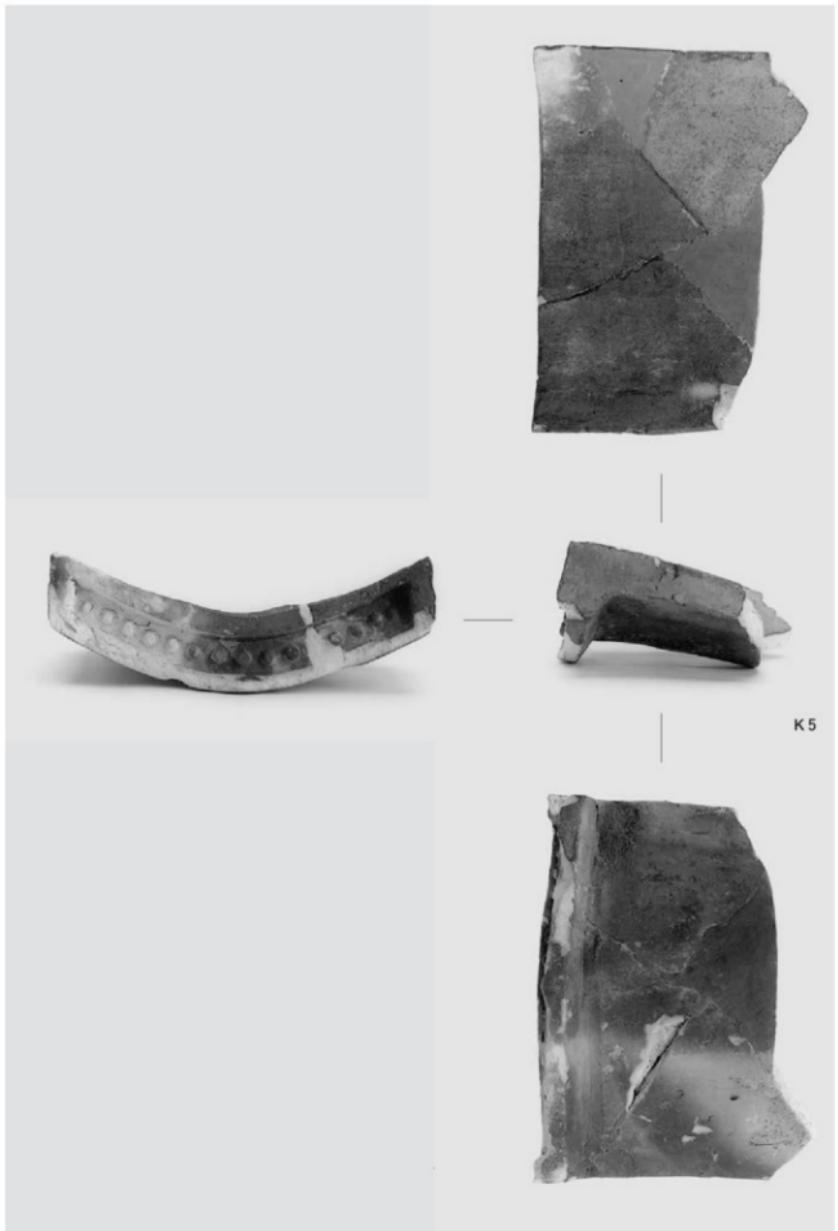


K 3 : 旧河道出土瓦



K 4：旧河道出土瓦

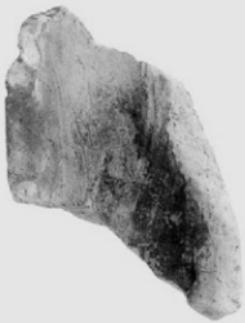
モノクロ図版52 遺物



K5：旧河道出土瓦



K6



K7

K6・K7：旧河道出土瓦

モノクロ図版54 遺物



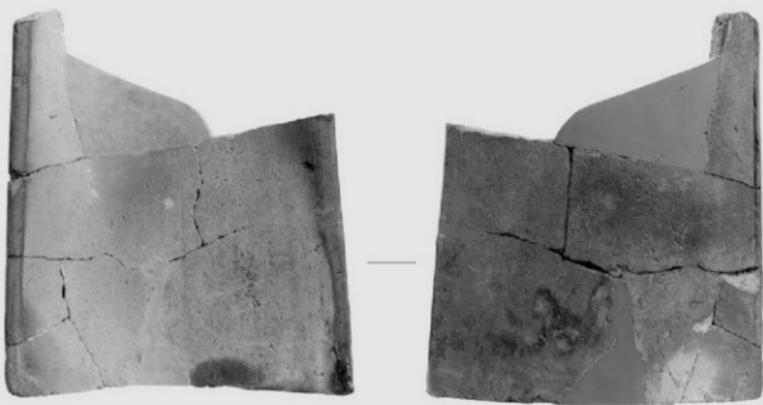
K 8



K 9



K 8・K 9：旧河道出土瓦



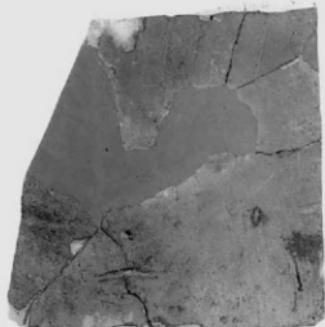
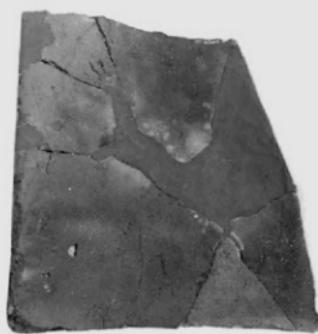
K10



K11

K10・K11：旧河道出土瓦

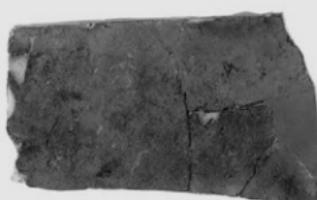
モノクロ図版56 遺物



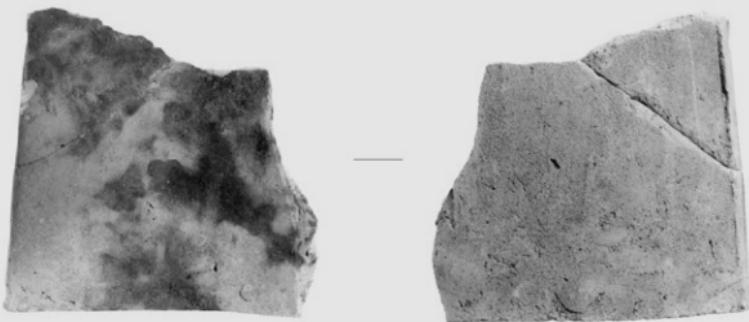
K12



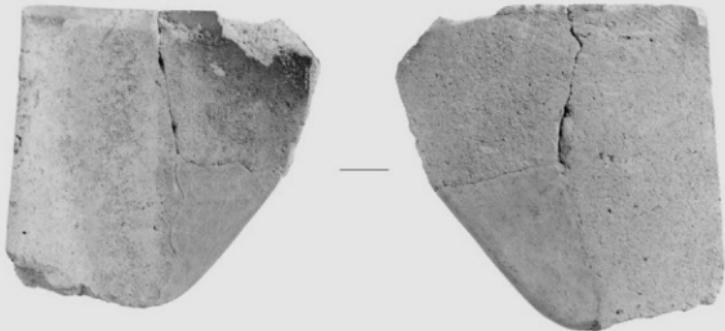
K13



K14



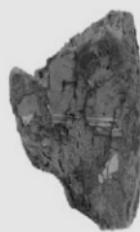
K15



K16

K15・K16：旧河道出土瓦

モノクロ図版58 遺物



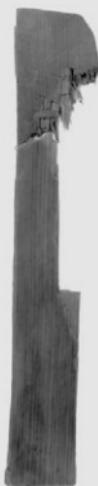
W 3



W 4



W 5



W 6

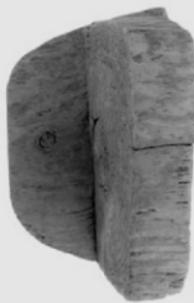


W 7

W 3～W 7：旧河道出土木製品

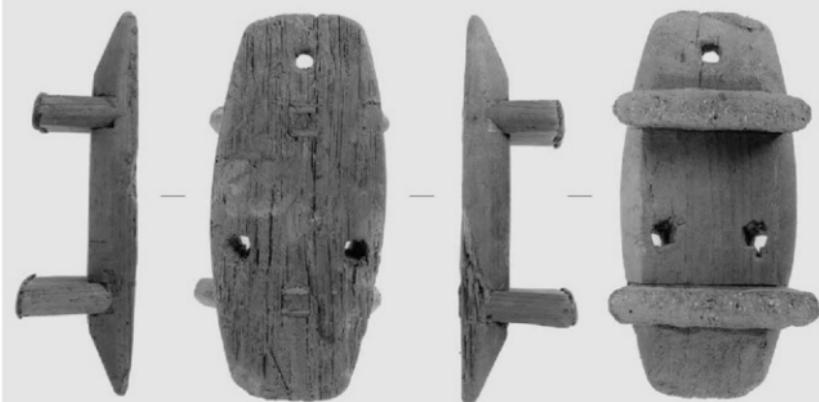


W10



W 8

モノクロ図版60 遺物



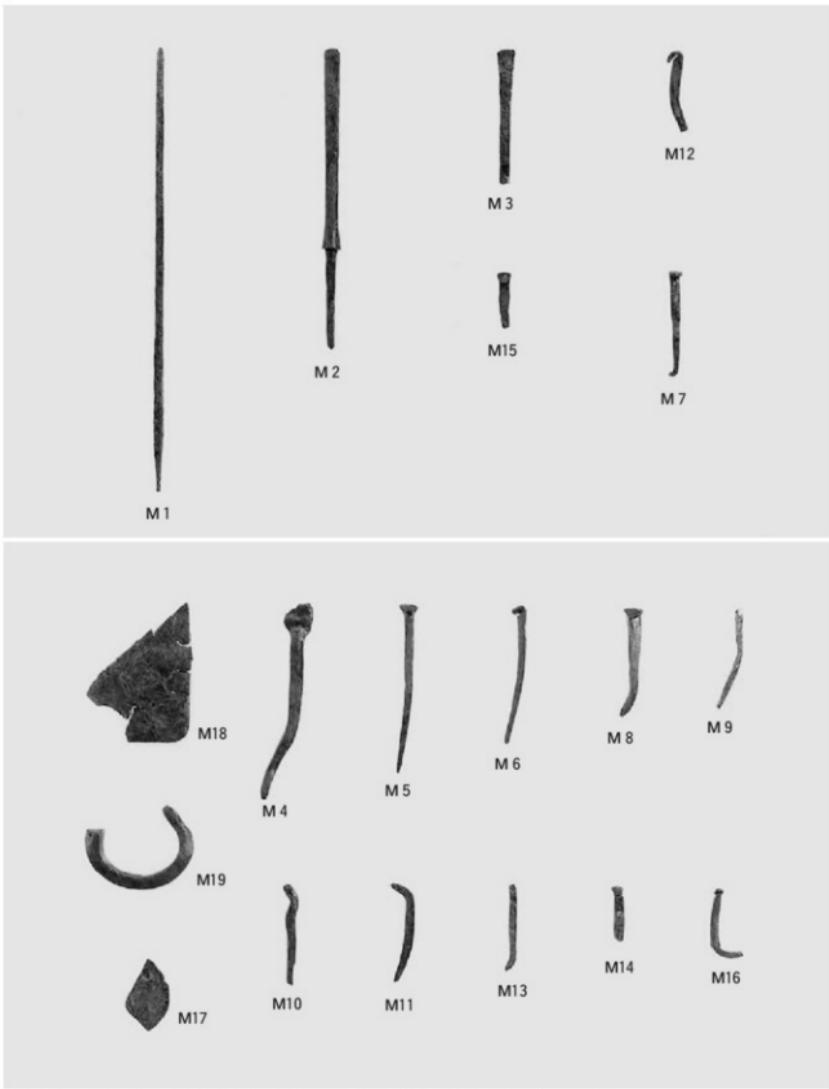
W9



a

b

W9：旧河道出土木製品 a：W9 前歯接合部 b：W9 後歯接合部



M1～M3・M7・M12・M15：旧河道出土鉄製品 M4・M8・M10：包含層出土鉄製品
 M5・M6：SD02出土鉄製品 M9：SB01出土鉄製品 M11：P34出土鉄製品 M13：P46出土鉄製品
 M14：SK02出土鉄製品 M16：P41出土鉄製品 M17：P11出土鉄製品 M18：P31出土鉄製品
 M19：P20出土鉄製品

モノクロ図版62 遺物



M20



M21



M22



M23



M24



M25



M26



M27



M28



M29



M30



M31



M32



M33



M34

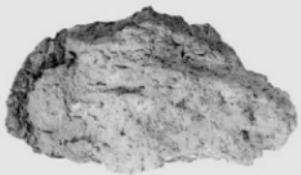
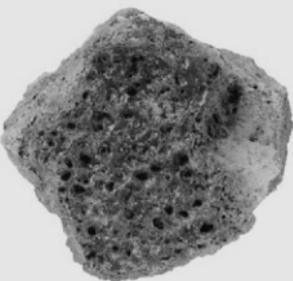
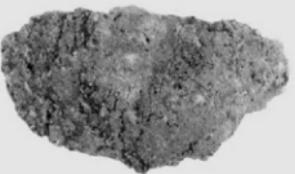


M35



M36

M20 : SB15出土銅錢 M21~M36 : 旧河道出土銅錢

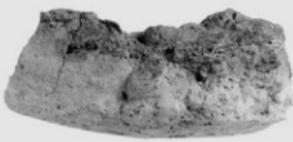


M37

M38

M37・M38：旧河道出土鉄滓

モノクロ図版64 遺物



M39

M40

M39・M40：旧河道出土鉄滓

報 告 書 抄 錄

兵庫県文化財調査報告 第405冊

上郡町

山野里宿遺跡

(主) 姫路上郡線 道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年3月24日 発行

編 集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 加古郡播磨町大中1丁目1番1号

発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印 刷 福田印刷工業株式会社
〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6-3
